

夕に及びて、葡萄畑の主人、會計を呼び、いひけるは「最後の者より始めて、最初の者にまで、賃銀を拂へ」と。五時頃雇はれし者等來りしが、各一デナリを受けたり。而して最初の者等來りしが、彼等は多く受るならんと思ひしに、又銀一デナリを受けたり。是を受けたる時彼等主人をつぶやきいひけるは、此最後の者等は僅かに一時間働きしのみ、然るに我等は終日仕事と暑氣の苦に堪へし者なるに汝は彼等を我等と均しくすと。主人彼等にいひけるは「友よ我汝に不義をなさず、汝には一デナリを約束せしにあらずや、汝の者を取りて往け。我は最後の者にも汝と同じく與へんと欲す。我は我が有するものを以て我が欲する如くなすこと能はざる乎。我が慈しむによりて、汝は嫉む乎。斯の如く後の者は先きに、先きの者は後になるべし。」

自由の恩惠
（人格的關
係）

【注】 右の比喻は神と人との關係は律法的小のものとなく、人格的にして自由なることを最も明白に教へられたものである。神は何等の規則にも事情にも束縛せらるゝものではない。但し我儘勝手に振舞はるゝのではない。其所には神の愛と人の柔順とが一致せねばならぬ。然れど條件は其だけである。何の形式的、器械的規定はない。即ち神と人との

第一に求む
べきは、人
格

間には一定の約定があつて而して人は相當の代價又は労働を神に與へて其恩惠を買ふやうなものではない。神は自由に其恩惠を與へ給ふのである。故に人間に大切なるものは至誠、神を愛し人を愛する精神である。其精神に基く行爲は神を喜ばしめ、而して神は自由に恩惠を下し給ふ、外形的功績は神の前に左程喜ばるゝものでない。由來パリサイ人は神と人との關係を或規定の下にあるものとして考へ、而して其規定に基き働くことは一種の代價を拂ふものとし、而して之を外形的に計算し其量に従ひて、神より恩惠を受け得るものと考へた。故に彼等は其規定即ち律法を尊んたが、神御自身をば慕つたり依頼したりせなかつた。又善行については一種の誇りをもち、又之を代價と心得、神の恩惠を強請する態度を有してゐた。従つて彼等に感謝の心がなかつた。是の如きはイエスの極力排斥せられた思想であつた。元來人間が求むべき第一のものは「神らしき人格」でなくてはならぬ。其れ以下のものを求めて之を標準として神を怨み人を嫉んでならぬ。比喻に用ひられた労働者といふは當時ユダヤに多く居つたもので、彼等は奴隸ではないが、收穫時の忙しき時に人に雇はれて野にて働くものである。主人は街頭に出でゝかゝる人を雇ふのである。

「一デナリ」といふは、凡そ我が三十錢乃至四十錢に相當する金であるが、此比喻にある如く當時一日の労働賃であつた故に其價値は凡そ我壹圓位にも當るのである。

「汝嫉むか」直譯すれば「汝の眼悪しきか」とするのであるが、眼悪しといふは嫉むといふ義である。

第十 報酬の否定

路 十七〇七—十

聖書本文

汝等の中誰か、或は耕し或は羊を牧ふ僕をもたんに、其僕野より歸りたる時「汝直に往きて食につけ」といふものあらんや、反つて彼にいはすや「我食する爲に備へせよ、また我が食ひ且飲み終る迄汝帶して我に事へよ、而して後汝自ら食ひ且飲め」と。僕は命せられしことをなしたりとて主人彼に謝すべけんや、汝等も斯の如く凡て命せられたることをなし終へたる時も「我等は無益の僕、只なすべきことをなしたるのみ」といへ。

【注】此比喻も前節の主意と似て、人は報酬を目的として神に事へてはならぬことを教へたものである。

報酬なるものが全くないと教ゆるのではない。報酬を目的として神に事へてはならぬと教へたのである。他所に「汝の報酬大なり」といふ語もある。但し其報酬といふは神の恩恵で人々の靈を向上せしめ一層神と人との爲に役に立つ人となることである。

茲に教へてあるやうに主人が野より歸れる労働者を直ちに家の用事に役ふが如きは人間社會にありては殘酷な事である。然れど心靈的世界に於ては斯く働くことは人間の特權であり幸福である。

「無益の僕、云々」の語は人は決して自己の功勞に誇つてはならぬとの義である。尙シリヤ語の或譯本(Syr, sinaitic)には「無益」の語を除き「我は只僕なり」としてある。其方が一層意味を強くするかと思ふ。

以上本章にて研究した聖書の教訓は凡て神の國即ち支配主權の如何なるものなるかを明かにし又人の是に對する心得を教へたるものである。即ち神の國は結局愛の支配及勝

利で、人が之に對する道は第一心より悔改めること、第二謙遜にして他を嫉まず、常に喜んで人を愛して行くことである。茲に人間最高の喜悅があり、又最後の勝利があるのである。

第四章 イエスの倫理及處世訓

概 説

イエスの説教が「神の國」を主題とすることは前章既に説明した通りである。而して其の他の説教は其敷衍とも見るべきものである。凡そイエスの宗教の原理は其所謂「神の國」の説教中に教へられてあるのである。然れど其れが人生の事實に應用せられて説かるゝ場合には所謂倫理的説教となるのである。

イエスの倫理的説教なるものは神の國の説教と全然區別すべきものではなく、又注意は勿論同一のものである。然れど研究の便利上茲に之を區別せんとするのみである。さてイエスが倫理の根本とせられたものは何かといふに、其は神である。神は即ち善の根本であり本體である。故に神の如くなれといふがイエスの倫理訓の本旨である。

然らば如何にすることが神の如くなることであるか、彼は之につき、二つの重要な標準を與へてゐられる。即ち第一は自ら清くすること、第二は他人を愛すること、此二者

倫理の根本

倫理の二大標準

か全ふせらるる時には即ち神に似た者となり得られたのである。

イエスは必しも禁慾主義を主張せられたのではない。然れど慾情を以て自己の心を亂したり利慾を主として其良心を傷けたりなどすることを甚しく戒められた。他人を憎まぬこと、他人の罪を許すこと、是等もイエスの切に教へられた所であるが、要するに是等は自ら清くなることである。自ら清くなることは即ち神の如くなることである。

次にイエスは他人に對して信義を守ること、貞操を重んずること、罪人をも見棄てぬこと、敵の爲にも祈禱すること等を教へられた。是等は何の爲かといへば、他人の人格を尊重して、彼等をも神に似た人とならしめん爲である。換言せば他人を愛する爲である。彼等の靈を救ふ爲である。愛といふは畢竟他人の人格を尊び、其人をして神に似た人とならしめんことである。

イエスの所謂倫理訓は即ち以上説明するが如き主意を、種々の機會に於て種々の事實に應じて語られたものである。故に彼の倫理訓には組織と順序はない。其れは父母に對する義務、朋友に對する義務、君主及國家に對する義務等と區別をなして語られたものではない。故に倫理上の行爲につき詳細なる規則を知らんと欲するものには失望を與へる

に相違ない。然れど倫理の本義を學び、其根本的精神を了解せんとする人にはイエスの教訓は大なる満足を與へるものである。

次にイエスの處世訓といふも實は右の倫理訓を一層實際的にしたものに過ぎぬ。又之を區別することもできぬ、但しイエスは人間の現實生活に深き同情を有せられた故に、自ら處世訓ともいふべきものがないではない。イエスの處世訓は第一に神の保護を信じ、所謂煩悶なくして日々を送ること、貧乏に甘じて寧ろ之を楽しむこと等である。以上はイエスの教訓と行爲の全體を通じて我等が発見し得る主旨である。即ちイエスの言行、態度等に最も著しく現はれてゐる精神である。尙イエスの是等の精神及主旨を了解するに最も重要なものは所謂山上の垂訓である。

山上の垂訓は即ちイエスの倫理及處世訓を比較的完全に一所に纏めたものである。元來イエスの教訓は題目を定めて組織正しく、數回に亘つて講義的に語られたものでない。時と場合に従ひ、彼の許に來れる人に適當するやう語られたものである。故に順序組織なく暗示的、對話的であるのが其特色である。斯ることより考ふれば、山上の垂訓はあまりに組織的にしてイエスの説教らしくない。是れと相似た説教が路加傳第六章に

載せられてゐる。此説教につきても多くの疑問があるが、而かも大體より見れば此の方がイエスの實際的説教に近い。但し吾人が山上垂訓に於て大に尊敬せねばならぬことは、此説教中には前述せる如くイエスの高尚なる思想が最も明白に説かれてあることである。一々イエスの語でないかも知れぬ。又同時の説教でないかも知れぬ。然れど他の何れの説教よりも最も詳細にイエスの思想を記してある。

想ふに山上の垂訓は記者が當時のキリスト教會に對して、一憲法を與へんとして、イエスの教訓に基き、記者自ら編纂したものであらう。故に根本はイエスの教訓及び思想に相違ない。然れど編纂したものは記者である。従つて記者の思想教會の氣分が其内に現はれてゐる。

其著しき例を擧ぐれば次の如きは其一である。第五章十八節以下に左の如き教訓がある。曰く

「我汝等に告げん、天地の過ぎ去るまで、律法の一針一毫も就げ盡くさずして廢たることなし、故に若し誰れにても其の律法の最も小き一を廢し、且其の如く人に教へば天國に於て最も小き者と稱へられん云々」と。

是は資料「Q」に基く語かとも思ふが、後半の句の如きは確かにイエスの語でなく、是は記者の保守的氣分を現せる句である。故に最も穩健なる學者の稱あるモファット博士も其著新約聖書英譯に是等の句に活弧を附して他と區別せられてある。其他の注釋者等も又此句をば記者又は後の人々の附加したるものとしてイエスの語とは思つて居らぬ。要するにイエスの教訓の特色は人格的なることにある。従つて自由である。決して誠律を其れ程重んずるものでない。又天國に於ける報酬を主眼とするものでもない。是はイエスの全體の教訓と其行爲とより推して最も確實なることである。故に若し之に矛盾するが如き言語あらば、之れは決してイエスの語とすることができぬ。前述せる如く山上の垂訓は大體に於て人格主義を標榜する最も高尚偉大なる倫理及處世訓である。然れど其内に又非人格的なる誠律主義、又はラビ的なる言語又は口調が加つてゐる。故に此全體を此のまゝにてイエスの宗教倫理を完全に叙説したものと見ることできぬ。

世間には山上垂訓が教義的でなく主として倫理的なるが故に尊しとなし基督教の眞髓は此の内にありといふものもある。又同じ理由によりて是は左程尊いものでない。他の教義的教訓の反射に過ぎぬ。「太陽に對する月の如きもの」であるといふものもある。

吾人は教義的であるとか若しくはないとかいふことによりてイエスの教訓の價値を定むることを以て極めて愚かなることと信じてゐる吾人は神の人格を高調し、人の人格を重んじ、而して熱誠なる愛の精神が強く人々の心に迫るものあるを以て、イエスの眞實に近き語とし、又價値ある教訓とするのである。

本章は右の如き主意精神に基き、イエスの倫理及處世訓と見るべきもの數項を集めたものである。例により吾人の集め方は純粹に組織的ではない。如何となれば前にもいへる如く、イエスの教訓は主眼題目等を豫め定めて、講演的に語られたものでない。従つて之を分類して順序を科學的に定めることは不可能であるからである。其の代りにイエスの語は一句又は一語を選びてもよく其内よりイエスの主意を各方面に亘りて學び得ることができるのである。

第一 律法と福音

〔太 五〇七七・七八・廿
路 十六〇十六・十七〕

聖書本文

われ律法と預言者をつつる爲に來れりと思ふ勿れ、我之をつつるにあらず成就せんが爲なり、我汝等に告ぐ、若し汝等の義、學者とパリサイ人の義にまさらずば、汝等天國に入るに能はざるなり。(太五〇十七・十八・二十)
(イエス又曰ひけるは)律法と預言者はヨハネまでなり。其時より神の國の福音は宣べ傳へらる。而して人々勵みて是に入らんとす。然れど天地の廢るは律法の一劃の廢るよりも易し(路十六〇十六・十七)

馬太と路加
との比較

【注】右の前半の語は山上垂訓の記者が以下舊律法と新教訓とを比較して記すに當つて附した緒言である。此緒言并に其比較論の大部が路加傳の記事中にないことにより多くの學者は其れが古き資料「Q」中にあつたか否やを疑ふのである。従つて又イエスの眞實の語であるや否やをも疑ふものがある。

但し路加傳記者は異邦人の爲に記した故に、此句をば其資料中より故意に除き去つたのであるとの説もある、尙馬太傳の右の語の次ぎには「律法の一劃も天地のつきざ

る内に廢たることなし」とある。是は路加傳の「天地の廢たるとは律法の一劃のすたるよりも易し」と同語らしい。而かも路加傳は其れと同所に「律法と預言者はヨハネまでなり」と記してゐる。是等の語の方イエスの原語及び「Q」の文に近いと思ひたれば是等の語を此所に入れたのである。

此主意に基づけば律法の大切なることはいふまでもない。而かも現代は既に律法と預言者の時代でない。福音の時代である。換言せば人格を以て直ちに神の人格に接する時代である。倫理的律法に反してはならぬが、其律法の支配を受くるやうではならぬといふのである。而して之れがイエスの主旨らしい。

又イエスは「パリサイ人の義より汝等の義まさらずば云々」と語られてゐるが、其意味は次に馬太傳が記す所によれば外形的の行爲でなく、精神的純潔を尊べといふことである。但しイエスの眞意は一層深いものであつたらしい。即ちパリサイ人は神より與へられたる誠律として、(又之を守れば神より賞與を受くるが故に)正義を守るが、汝等は然らず天の神の人格を慕ひ、其子とならんとし、自己及び他人の人格を尊重する心より義をなせとの意である。實は是はアモス、ホセヤ以來眞の宗教的人格が主張し來つた

「パリサイの義」の意義

精神である。尤も古き預言者の教訓には尙徹底せぬ點があつたが、イエスの教訓に至つて全く徹底したのである。

イエスが又「汝等パリサイ人及びサドカイ人のバン種を慎めよ」といはれたも同様の意味である。即ちイエスはあくまで人格を主として形式的義を排斥せられた。所が不幸にしてイエスの弟子等は其意義を了解し得なかつたらしい。此馬太傳の語の如きも明白に其意味を書き表はして居らぬ。

馬太傳記者の主意とする所は次の如きものらしい。即ち儀式的の律法は左程必要はない。割禮の如き最早守るの用はない。是は使徒パウロ等の主張した通りである。然るに儀式的律法は要なしとしても倫理的律法をも之れと共に棄て去るはパウロの主張した自由を誤解するもので大に戒めねばならぬことである。イエスは安息日法は之を棄て、顧みられなかつたが、モーゼの十誡の如きは之を尊重せられた。要するに倫理的律法は不變のものである。天地のつきざる内に其一點一劃もすたるものではない。故に之を輕蔑するはイエスの主意に適はぬといふのである。

然れど尙舊律法は新律法を以て補足せられねばならぬ。低い律法は高い律法を以て

馬太記者の律法論

充せらねばならぬ。律法の主意も精神も變化するのではないが、一層高尚なるものを以て之に附加する所があらねばならぬ。イエスは之を成就せられたのである。彼は法律を變化したのでない。彼は律法の一劃もすてたのでない。彼は小さな律法をも尊重せられた。只之を尊重し、之を變化せずして其まゝ残しつゝも、更に高尚なる律法を與へられた。是れによりて舊律法は成就せられたのである。イエスは實にモーゼ法の完成者である。神はモーゼに先づ律法を與へ爾來之を完成せんと望んでゐられたのである。而してイエスは實に之を完成し得られた方である、彼は實に律法でふ不朽の聖業を成就せられた方である。茲にイエスの尊き點が存するといふのである。

即ち馬太傳記者の意によれば「殺す勿れ」といふも不朽の律法である。然れど是は低い律法である。故にイエスは「憎む勿れ」といふ一層高尚なる律法を與へて之を補足せられたのである。而して之にて「殺す勿れ」との誠は決して廢れたのでなく成就したのであるといふのである。

以上の如き思想も高尚なるものである。勿論イエスに於ても律法の倫理的教訓まで廢せんとするの精神はなく、又低い誠を補充して高い精神的誠を與へんとの意志もなかつ

たではなからう。然れどイエスが舊律法、舊思想に對してあきたらず思はれた最大の主意は、舊律法舊思想が神と人との人格を主意とせざることにあつた。此點は尙以下の本文を注意して學べば略ぼ明了にせられる。要するに山上の垂訓はイエスの教訓を精神的律法であると主張する人の手によりて記されたものである。

「律法と預言者」とあるは舊約聖書全體をさす語である。然れど茲には律法のみをさしてある、預言者をも當時の人々は同一の主義精神のものと思つたらしいが、預言者の教訓は實は律法とは大に精神を異にするものである。預言者は寧ろ律法に反對したものである。彼等は神の愛と義を重んじ、イスラエル人の弱者をも之をアブラハムの子として尊重せよと教へ、而して形式的律法は勿論、倫理的律法をも作らんとせなかつた。彼等は人格主義の主張者であつた。然るに其預言者の教が律法化するに至つたは主としてパピロン追放以後のことである。

馬太傳五〇十八・十九は前文既に記した通りにモファット教授が括弧を附し、又他の多くの注釋者が明かに後の附加であるといふ故に前文の聖句中にも除去したのである。

「神の國に入る」といふは、馬太記者は報酬の意を以て記したかとも思ふが、報酬を主

「神國に入る」
義」との意

張するはイエスの主意に反する。

「神の國に入る」とは「神の國の世嗣となる」、又「永遠の生命を得る」又「救はれる」といふと同意義にて人間の達すべき理想をいふのである。「入る」といふ語はダルマン氏の説によれば寧ろ達する (attain to) と譯すべきであるといふ。而して其内容には左の三意義が含まつてゐると思ふ。

- 一、神と同じ性質即ち神の子らしき品性を得ること。
- 二、神より權威を受けて勝利者となること。
- 三、神と交りて聖き喜悅の生涯に入ること。

第二 新舊倫理の差別

太 五〇廿一—四十八
路 六〇廿九—卅六

聖書本文

汝等聞けり、右の人に告げて「殺す勿れ、殺すもつは審判に附せらるべし」といへることあるを。然れど我汝等に告げん、凡て兄弟を怒るものは審判に附せらるべし。

(太五〇二十一・廿二)

汝等聞けり「汝等姦淫すべからず」といへることあるを。然れど我汝等に告げん、凡て慾情を以て女をながむるものは心中既に姦淫せるなり。(廿七・廿八)

汝等又聞けり、古への人に告げて「偽り誓ふ勿れ誓ふ所は必主に果せ」といへることあるを、然れど我汝等に告げん、一切誓ふ勿れ……汝等のいふ所は然り然り、否否たるべし、之より過ぐるは悪より出づるなり。(三十三・三十七)

汝等聞けり「目には目、齒には齒」といへることあるを、然れど我汝等に告げん、惡に敵すること勿れ。

若し汝の右の頬をうたば亦他の頬をもめぐるして之に向けよ。

汝を訴へて下着を取らんとするものには上着をも取らせよ。

人汝に一里を強いなば、彼と共に二里往け。

汝に求むる者には與へ、汝に借らんとするものを卻くる勿れ(卅八—四十二)

汝等聞けり「汝の隣人を愛しみ、其敵を憎むべし」といへることを、然れど我汝等に告げん、汝等の敵を愛し、汝等を迫むるものの爲に祈禱せよそは汝等天にある汝等

の父の子とならん爲なり。

彼は日を善き者にも悪しき者にも照し、又雨を義しき者にも義しからざる者にも降らす。

汝若し己を愛する者をも愛するならば何の報酬をか得ん。税吏も然かせざらんや。又汝の兄弟にのみ挨拶するは何のすぐれたることかあらん、異邦人さへも然かせざらんや。

然らば汝等の天の父の完きが如く汝等完くなるべきなり。(四十三―四十八)

【注】 以上は前節に述べた通り、馬太傳記者の意によればイエスが、不朽の舊律法の完成として、更に不朽なる新律法を加へられたといふ教訓である。

如何にも此語をイエスの説教のまゝとせば、イエスは茲に不朽の律法を與へられたものである。新しき律法を制定し且宣言せられたものらしい。然るにイエスは其最後の愛敵の宣言中に、「之れ汝等が天の父の子とならん爲なり」と語られ又「汝等父の完全なるが如く汝等完全になるべし」と奨励せられてゐる。然らばイエスの主意は律法其ものを

根本主義の
差異

舊律法五ヶ
條

主とするものではない。「父の子たる人格を得るために努力せよ」といふが其主意である。茲に前節以來論述し來つたイエスの大主意が示されてあるのである。イエスの教訓は舊約の教訓又は律法に比較して高尚なるものである。然れど其高尚なる所以は其言語や程度の差にあるのではない。根本的精神の差にあるのである。即ち一は誠律を標準とし、又は利己的報酬を目的とするに反し、他は(即ちイエスの教訓は)人格を主とするものである。此主意が明かにせられて初めて、イエスの教訓が活きて來るのである。馬太傳記者は此語を記しつゝも尙充分に其精神を味つて居らぬらしい。

尙本文の順序に従ひ、其教訓を見て行けば、茲に新舊の律法五ヶ條の比較がある。先づ舊き教訓又は律法を擧ぐれば次の通りである。

- 一、殺す勿れ(所謂モーゼの十誡中第六誡である)(出埃及廿〇十三)
- 二、姦淫する勿れ(以上第七誡である)(同上十四)
- 三、偽り誓ふ勿れ(利未記十九〇十二)
- 四、「目にて目を償へ」(出埃及廿一〇廿四)
- 五、「隣人を愛し其敵を憎め」(利未記十〇九十八申命記廿三〇六)

右の内 第一と第二は前述せる如く所謂モーゼの十誡中より選んだものである。第三は恐らく利未記十九章十二節より採つたものであらう曰く。

「汝等我名をさして偽り誓ふべからず、また汝の神の名を汚すべからず、我はエホバなり。」

而してラビ等の説明によらば人をさして誓つた誓は必しも守らすとも或は可ならんも神をさしての誓は必守らねばならぬといふのである。

第四は復讐を命ずるものである。又第五は第四と殆んど同様のもの、即ち敵愾心を鼓吹したものである。而して第五の「隣を愛しみ敵を憎むべし」の句は其まゝでは舊約聖書中になく、多分各所に現はるゝ敵愾的教訓よりラビ等がこつて作つてゐた句であらう。往古國民的存在が困難であつた時、彼等は敵に對して敵愾心を必要としたのである。又彼等が有する宗教を維持するにも妥協を許さなかつたのである。然れど此の如きは上古に於ける道徳で、時代の進歩につれ精神的に變化せられねばならぬものである。

右の如き舊律法に對し、馬太記者がイエスの立てられし新律法といふものは次の如きものである。

- 一、兄弟を怒る勿れ。
- 二、心に愆情をもつ勿れ。
- 三、一切誓ふ勿れ。
- 四、「惡に敵する勿れ」
- 五、「敵を愛しみ誼ふものを祝せよ」

右の内第一、第二は心の純潔を教ゆるものにして、神の聖にして愛に充つる人格に倣はんとするものは無論心がくべきことである。

第三の教訓即ち一切誓ふ勿れとは、自己の人格及他人の人格を重んじ、假令神をさして誓はずとも、一人のものが他人に對して苟くも語つた以上は必之を守らねばならぬ。然らざれば之れ自己の人格を輕蔑し、又他人の人格を無視したものである。他人に對して誠實であるといふことは人格尊重の第一義である。

第四、第五は殆んど同義で、イエスの教訓の特色たるものである。勿論イエス降世以前にも愛敵の教は存してゐた。然れど徹底的に天の父の人格を以て理想となし、一切の人類を兄弟となし全心を献げて互に愛すべきことを教へたのは實にイエスを以て第一と

なすべきである、而して此第四、第五の教訓は路加傳にも殆んど此まゝにて載せられてゐるのである。従つて是は「Q」資料に記されてゐたものに相違ない。又是によりイエスの眞實の教へたることも一層信せられ易いのである。

愛敵の教訓

さて茲に問題となるは其所謂愛敵の教訓が果して實行せられ得べきものなるか如何といふことである。若しイエスの教訓が一々實行上の戒律を與へられたものとせば、到底實行し難きものである。例へば右の頬を打つものに必左を向けねばならぬ。又借らんとするものには必貸さねばならぬといふことであれば、恐く今日の社會に於ては到底實行することができぬのである。然るにイエスの説かれたものは戒律ではない。戒律は文字通りに實行せねばならぬものであるが、イエスの教訓は常に精神的のものである。要するにイエスの主意はあくまで愛の精神を以て何人にも接せよといふことである。彼が敵でもあれ、悪人でもあれ、何人であつても眞に其人を愛し、其人の靈を救ふ目的を以て行へといふ意である。

イエスは妥協を許されなかつた。除外例をも定められなかつた。如何なる場合も一貫せる主義精神を以て、自己の生命幸福をも犠牲として行へと教へられたのである。然れど其

れは精神を云へることである。實行上の規則について曰はれたのではない。根本的精神には純一なる服従を要求せられた。然れど實行は人々の自由に一任せられた。如何となれば其社會の實情に適應せねばならぬからである。各自の良心を重んじ其良心の命する所に従へと教へられたが、各自の良心を束縛すべき戒律を如何なる場合にも與へられたことはない。

第三 宗教的奉仕

太 六〇一―六・十六―十八

聖書本文

汝等其義を人々に見せん爲に其前に示すことをつゝしめ、然らば汝等天に在ます父より報を得じ。

汝等施與をなす時には偽善者の如く會堂や街衢にて喇叭を汝等の前にて吹かしむる勿れ。

彼等は人の尊敬を得んとするなり。

我眞に汝等に告げん彼等は既に報を得たり。

汝等施與をなす時には右の手のなすことを左の手に知らしむる勿れ。

是れ施與の隠れん爲なり然らば隠れたるに見給ふ汝の父は明かに報い給ふべし。(六

〇一四)

汝等祈る時には偽善者のなす如くなす勿れ、彼等は會堂や又は街衢の角に立ちて祈ることを好む。

彼等は人に見られんとするなり。

我真に汝等に告げん彼等は既に其報を得たり。

汝等祈る時には汝の室に入り戸を閉ぢて、隠れたるにゐます汝の父に祈れ。

然らば隠れたるに見たまふ汝の父は汝に報いたまはん。(五・六)

汝等斷食する時には偽善者の如く憂容をする勿れ、彼等は斷食することの人に知られん爲に其面を損ふ。

我真に汝等に告ぐ彼等は既に其報を得たり。

然らば汝等斷食する時には、汝等の頭に油を注ぎ汝等の面を洗へ。

然らば汝等の斷食すること人に知られずして隠れたるに見給ふ神に知らるべし。

祈禱も斷食も「行」ではない

【注】 以上の教訓は當時ユダヤ人が宗教的奉仕の道と心得居る三ヶ條につき批評を加へられたものである。當時のパリサイ人等も「神に仕ふる道は人を愛するにあり」との主意は一應知つて居つた。然れど其愛する道を知らぬ。單に人に物を與へさへすればよい。又其愛する動機につきて心を用ゆることを知らなかつた。彼等は之によりて人より又神より賞與を得んとした。之れが先づイエスの非難せられたる理由であつた。

次にユダヤ人等が重んじたものは祈禱と斷食である。是は元來人間が罪を悔い、神に接する爲に行ふものである。祈禱其もの、斷食其ものに功德はないが、是れによりて神に交り、我が靈を潔め、而して神の恩恵を受くるに足るものとなる爲である。然るにユダヤ人等は祈禱は一種の「行」である。其「行」をつむことによりて神より報酬を得る。斷食は一層大切なる而も困難なる「行」である所謂苦行の一である、故に神の前に一層功德あるものであると考へた。斯くて彼等は其靈的意義に就て考へ至らず、只形式的にも之を忠實にさへ行へば功德あるものと思つた。故に熱心なるユダヤ人は日に三度は必祈禱をなし又一週二日も斷食をなした。(路十八〇十二)

イエスは慈善、祈禱、斷食等に直接反對せられたのでない。然れど慈善は他人を神の子として愛する爲に行ふことである。其人を敬ひ、其人を救ふ心を以て行はねばならぬ。社會の名譽を得る爲、又之を一種の功德ある「行」と見做してはならぬ。祈禱も隠れたる神に交る道である。「おつとめ」でもなければ「行」でもない。イエスが一人靜かに野に於て又山に於て祈られたは神と交るに外ならぬのである。四十日四十夜斷食せられたのも苦行の爲ではない。

要するにイエスは慈善でも祈禱でも斷食でも之を一種の「行」と心得、又は一の戒律となし、之を守るものには功德報酬があるとの思想には斷然反對せられたのである。イエスの主義は人格を中心とするものである。人格の要求に應じ、人格の爲にすることは固より價値のあることであるが、人格との關係を離れては如何なる所爲も價値はない。

本文の聖句は主としてイエスがパリサイ人の偽善を非難せられたことである。即ち彼等の行爲は神を目的とせずして人を目的とするものである。故に神より報酬を受くる理由がないといふのである。然れどイエスがパリサイ人の行爲に對する非難は單に其れが外形的偽善的であるといふのみではない。其行爲が戒律であり、「行」即ち「おつと

め」であり、功德を積む所以とする點にある。是等のことはイエスの他の教訓と行爲とを見れば極めて明了なることである。馬太記者の此文章は其點に於て充分徹底して居らぬやうである。即ち記者はイエスは單にパリサイ人の行爲を一層精神的にしたのみであるとするのである。然るに實際イエスの主張せられた所は、一層根本的に人格主義、自由主義の行爲、道徳を確立するにあつた。従つて此聖句は此まゝにてはイエスの語ではなからう。恐く「Q」中にも斯ゝる語はなかつたものと思はれる。只イエスがパリサイ人を非難し、其行爲を責められたことは無論あつた。而して其主意は以上述ぶるが如く人格主義に反するからである。茲には其れが少しく變化して傳へられたものである。

「憂容をなす勿れ」とは面白き語である。パリサイ人等は憂容を特更裝ひて神に憐愍を求むることをなし、又之を以て宗教家らしき態度として人に誇つたものらしい。然るにイエスの徒は常に快活にして「憂容」をなすことを甚しく嫌つたものである。斷食につき前回既に述べた如く四十日四十夜の斷食はあつたが、其後イエスは斷食せられたらしくはない。

第四 人の罪を審く勿れ

太七〇一五・十二
路六〇三十七―四十一・三十一

聖書本文

汝等人を審く勿れ、然れば汝等も審かれじ、そは汝等が審く審判を以て汝等も審かるべければなり。汝等が量る量^{はかり}を以て汝等も量かるべければなり。

汝何ぞ兄弟の目にある塵を見て、己が目にある梁^{うづは}を認めざる乎。汝等如何にして兄弟に向ひ、我をして汝の目にある塵を取らせよといふことを得んや、見よ梁は汝の目にあり、偽善者よ先づ己の目より梁を取れ、然らば汝の目明かになり兄弟の目より塵を取ることを得ん。(太七〇一―五)

凡て汝等が人々よりせられんと欲ふことを、汝等もまた人々にせよ、そは是れ律法と預言者なればなり。(太七〇十二)

【注】新しきイエスの倫理は前段より繰返へし論ずるが如く、自己及他人の人格を尊重

することにあり。人を欺かず誠實を語れといふも、又姦姪及離婚を許さずといふも、凡て其人格尊重主義より生ずる道徳である。

茲に他人を審く勿れとあるも又同一の主義精神に基くもので、新道徳中に於て最も重要なるものである。パリサイ人等は戒律を守るか否かを以て凡ての道徳的判斷の基礎とするが故に、容易に他人を審く風がある。即ち自ら其義に誇り他人を輕蔑する傾向がある。然るに人格を主とするものは容易に他人を判斷せぬ。即ち其人が義人なるや否やは、其人の人格にありとせば容易に判斷し得られぬ筈である。之を判斷し得るものは神のみであるからである。

且人間の人格は神の子たる資格と價值とを其内に有するものとせば、之を輕々しく審くことは神に對する不敬である。

以上の如き理由よりイエスは自ら不完全なる人にして他人を判斷することを禁止せられた。此教訓は路加傳にもあるものにて、所謂「Q」資料に明記せられてゐたものである。従つてイエスの語として一層確實なる證據を有するものである。

「汝の欲する所を人にも施せ」との教訓は實に凡て倫理道徳の大本である。只其欲する

所は自己人格の向上にあるべきはいふまでもない。イエスの倫理の要旨は第一に其人格的なることと又其れが積極的たることに於て特色をもつてゐる。是は單にイエスの教訓が證明するばかりでなく、イエスの生涯が實に其特色を發揮したものであつた。

ユダヤの學者ヒレルも「汝の厭ふことをば他人になす勿れ是れ律法の全體にして、其他は其注釋のみ」と語つてゐるが、彼の生涯も其教訓も未だ人格主義、積極主義の奥義には達して居らなかつたらしい。其語の如き消極的のものである。

第五 人の罪を許すべきこと

可 十一〇 廿五・廿六
太 十八〇 廿一・二同十五
路 十七〇 三・四

聖書本文

イエス曰ひけるは。

「汝等いつにても祈んとして立つ時、他人に對ひて怒をもつことあらば、之を許せ、さらば天に在ます汝等の父も汝等を許し給はん」と。(可十一〇 廿五・廿六)

ペテロ出で來りイエスにいひけるは。

「主よ、幾たびまで、我兄弟の我に罪を犯すを赦すべき乎。七次まで乎」。イエス彼に曰ふ、我汝に「七次」といはじ、七次を七十倍せよ。(太十八〇 廿一・廿二)

汝の兄弟もし汝に罪を犯さば、汝彼の獨りある時ゆき、彼と汝と相對して彼を諫めよ、若し彼汝の言葉をきかば、汝は其兄弟を獲るなり。(太十八〇 十五)

【注】「祈らんとして立つ時云々」は山上垂訓中の「汝禮物を以て壇に往きたる時云々」(太五〇 二四)と相似て主意も同じである。又主の祈りの中にある「我等他人の罪を許せば我等の罪をも許し給へ」といふのとも略ぼ同主意である。

我等は神の前に立つ時先づ心得べきことは他人に對して有つ憾み又は怒りの心を去るべきである。然らざれば人は神との交りに入ることができぬ。従つて神よりの慰めと新しき力を得ることができぬ。

「七度を七十倍せよ云々」とあるに似た教訓は路十七〇 四にある「もし一日に七度罪を汝に犯して一日に七度汝に對ひて、我悔ゆといはば許すべし」といふ語である。何れも

祈禱の時の注意

「Q」の資料に基く語であらう。

「獨り往きて諫めよ云々」は又路十七〇三に殆んど同じ語がある。是れも資料は同じであらう。

人の罪を赦す主意

凡て是等の教の主意は明瞭である。基督の弟子たらんものは無限に他人の罪を許し何人に對しても聊かの悪意なく只彼等の靈を救はん爲に全力をつくせといふのである。彼等を責め又は戒めることがあつても決して彼を辱める爲でなく、心より其人の益を計る爲でなくてはならぬ。其人の爲と思はゞ無論鞭を用ゆるも妨げはない。又神は我等が他人の罪を許すにより又我等の罪を許し給ふやう記してあるは決して神が其ことを條件として我等の罪を許し給ふといふ意ではない。神は自由に人の罪を許し給ふのである。然るに人の心柔順にして他人の罪を赦すほどの態度になり得ずば其赦を経験し得ぬといふ意である。罪の赦を経験するといふは先きにもいへる如く神と親しき交りに入り、何等の恐怖なくして神に接し而して神より恵と力とを得て、神の子たる生活をなすことである。

最大の事業

「兄弟を獲べし」との語は最も注意すべきである。獲るとは儲けるといふ意義の文字である。人を儲ける又獲る又漁る何れも相似た意義で、失はれんとする人の靈を捕へて神

に献げるのである。人間のなすことに於て最も尊きことである。我等の行爲は一は我が靈を救ひ、父の子たらん品性を得ると同時に二は他人の靈を救ひ、彼等をして神に近づかしむることにある。若し我等が誠實なる忠告をなし而して其人をして眞に悔改め得しめたならば是に勝る尊き事業はない筈である。

第六 人を躓かす罪

可 九〇四十二
太 十八〇六・七
路 十七〇一・二

聖書本文

イエス其弟子にいひけるは、躓づきは來らざるを得ず、然れど其を來らす者は禍なる哉。是等の小さき者の一人を躓かするよりは、寧ろ大白を其頸にかけられて、海に投げ入れられん方、其人の爲によかるべし。(路十七〇一・二)

【注】「白を首にかけられて云々」とは其罪の大なること、其罰の恐ろしきことを表はし

最大の罪惡

たものである。

さてイエスが「小、さ、き、者、を、踏、か、す、こ、と」をかく戒め給ふたはイエスの精神より考へて誠に當然の事であり、而して是によりて一層イエスの精神及主義を了解することができるのである。昔の豫言者は最大の罪惡として弱者を苦しむることを戒めた。弱者を苦しめるは神を輕んずることであると教へた。イエスは同様に弱者を苦しめることを戒められたが彼は更に其弱者の心靈に思ひ及び、其心靈を踏かし、彼等が神に歸し善に移らんとするを妨ぐるならば其罪に至りては殆んど許さるべからざるものであると訓へ給ふたのである。

「大白」とは馬太傳廿四〇四十一にある手にてひく白ではない。驢馬にひかす大きな白をいふのである。

要するに是の教訓は他人の人格の如何に貴重なるかを示すものである。イエスの倫理の大本は前述せる如く「人格の尊重」にある。本文の教訓も其主義精神の最も明白に現はれてゐるものである。

第七 自 制

可九〇四十三
太五〇廿九・三十七〇三十三
同十八〇八・九・十三〇廿四
路十四〇三十四・同十三〇廿四

聖書本文

若し汝の隻手汝を踏かさば、之を切り去れ。

兩手ありて地獄に、滅せざる火に往かんよりは不具にて生命に到るは汝の爲によきなり。

若し汝の隻足汝を踏かさば、之を切り去れ、

兩足ありて地獄に投げ入れられんよりは、

跛にて生命に入るは汝の爲に善きなり。

若し汝の一眼汝を踏かさば、之をぬき出せ、

兩眼ありて地獄に投げ入れられんよりは、

一眼にて神の國に入るは汝の爲に善きなり、

(地獄)彼所には蛆死なす、火きえざるなり。
そは何人も火にて鹽づけらるべきなり。

鹽は善きものなり、

然れど鹽若し其味を失は、何を以てか是に鹽づけん、

汝等自らの内に鹽をもち居れ。(可九〇四十三―五十)

狭き門より入れよ、

滅亡に至る門は大きく、其道は廣し、

之れより入る者多し、

然れど生命に至る門は小さく、其道は狭し、

之を取るもの少し。(太七〇十三・十四)

【注】 右の文章中「一手^{かたて}云々」の語は馬可傳より取つたものである。馬太傳によれば此語は山上垂訓中に入れられてある。但し馬太傳には更に是れと對照せらるべき場所にも此語を載せてゐる。つまり馬太傳は二ヶ所に此同じ語を載せてゐる。然るに何故か路加傳

には此語は一度も記されて居らぬ。但しイエスの語たることにつきては疑問はない。

此文章の主意は明瞭である。即ち人は他人を躓かせてはならぬと共に、自ら躓いてもならぬ。自ら躓かざらんと欲せば、自ら顧みて其誘惑の根源となるものを除かねばならぬ。自ら棄て難き情慾は勿論野心にても我良心を傷け我心靈を滅すものであるならば直ちに棄て去らねばならぬ。假令是が我が肉を切り去るやうなことであつても之を棄て置くことができぬ。是はイエスが例の如く徹底せる生活を主張せられた教訓である。

「人は火にて鹽づけらる云々」といふは、奇妙なる語である。併し其意は火の如き力によらずば人間は淨められぬといふのである。馬太傳にある「汝等は地の鹽なり」といふは之れと相似た語である。然れど馬可傳の方は個人的の意であり馬太傳の方は社會的の意である。即ち馬可の文によれば是はイエスが其弟子に對して自己を顧み、凡ての汚れを火に焼き又鹽にて淨めんことを命せられたものである。尙「鹽はよきものなり云々」の語は路加傳にもありて而して其意味は馬可と同一のものらしい。

「狭き門より入れよ」云々とは「汝の目を切りて棄てよ」と同意にして人格的生命を完ふする爲には一切のものを犠牲とせよとの意である。尙此語は路加傳にはあるが何故か

馬可傳には見えぬ。但し是れもイエスの語たることにつき疑問はない。

「生命」といふは「永遠の生命」又は「救」の意である。「生命の爲に何を食ひ云々」の「生命」は靈魂又は精神 (Soul) といふ文字で、此所の「生命」とは違つてゐる。

地獄とあるは「ゲヘンナ」即ち「ヒンノムの谷」といふ原語である。

蛆とあるは原語「彼等の蛆」としてある。彼等を苦ましむる蛆といふ義である。無論比喩的の語である。

第八 倫理的實行の必要

太五〇十三—十六・七〇十三・

十七—廿一—廿七

聖書本文

汝等は地の鹽なり、鹽もし其味を失はば何を以てか是に味つけん、最早用なし外に棄てられて人に踏まるゝのみ、汝等は世の光なり、山の上に立てられたる市は隠るゝを得ず、人誰れも燈火をともして樹の下に置くものなし必ず之を燭臺の上に置かん、かくて其光家にある凡ての者を照さん、斯くの如く汝等の光をば人々の前に輝かせ、

然らば、人々汝等の善行を見て天に在す父を榮むべし。(太五〇十三—十六)

汝等僞善者を警めよ、彼等は綿羊の衣服を着て汝等に来れども内は暴き狼なり。其結ぶ果によりて彼等を知るべし。夫れ茨より葡萄を採り、薊より無花果を取ることせんや斯くの如く善き樹は善き果を結び惡しき樹は惡しき果を結ぶなり。(七〇十五—十七)

是故に我が言を聞きて之を行ふものを岩の上に家を建てたる賢き人にたとへん、雨降り、大水いで、風吹きて其家をうてども、其家倒れず、其は岩の上に其基礎を置けばなり。我言を聞きて之を行はざる者を砂の上に家をたてたる愚なる人にたとへん、雨降り、大水出で、風吹きて其家をうたば、其家倒るゝすさまじ。(七〇廿一—廿七)

【注】馬太傳の「鹽及光」につきての教訓は弟子の他人に對する責任を訓へたものである。

弟子が他人に對して負ふ義務はイエスの使者又は代人として神の國の福音を傳へ、病める者を助け惡鬼を追ひ出すなどのことである。然れど其使者又は代人たるべきものが、

イエスの弟子たる資格

高き品性を有せず、正しい行爲がなかつたならば決して其使命を完ふすることができぬ。故に弟子たるものは其品性行爲を磨いて其光を人々の前に輝かせねばならぬ。此の主意に於てイエスが弟子に此教訓を與へられたものとすれば當然の教訓であると思ふ。但し他の福音書になく且言語が稍後期のものらしく従つて「Q」にあつたか否かは疑しい。當時一般に用ひられた鹽は甚惡質のものにて混合物多く、爲に時々變質する事があつたといふ。

「市」とはエルサレムの如き城邑をいふのである。通常山上にあり、周圍には城壁をめぐらしてあつたのである。故に遠方からでもよく見えたのである。

「偽善者を警めよ云々」は何れの時代にも誤れる宗教家、偽教師ありて無邪氣なる人民を惑はすものある故に、注意せよとの意である。又偽教師と正しき教師との差は其人の人格行爲等につきて見るべしとの教訓である。つまり教義上の問題は何れを善しとすべきか分別し兼ねることがある。然れど其人の至誠、愛等は何人にもよく了解せらるゝ故是に基きて其教訓を判断せよとの意である。

要するに正しき教師の特徴は其教義よりは其行爲品性が尊いことである。其品性行爲

眞偽教師の
區別

によりて世の光地の鹽たる本分を盡くすものである。偽教師の特徴は教義はよくとも其品性の下等なる點にある。

最後の「岩上の家」といふ比喩は、畢竟宗教は實驗であり、生活である故に實行せねば何の役にも立たぬとの意である。

教義のこと、議式のことも必要であるが、倫理的實行が伴はずば、此の如きものは所謂架空の論に過ぎぬ。教義だけを信じ、又議式だけを守つて自ら信仰ありと思つてゐると、忽ちに人生の困難に遇ひて其信仰も品性も破滅することがあるのである。

「其倒るゝや、すさまじ」との譯は意譯である。從來の如く「其倒るゝや、大なり」とする方原文に近けれど、其れにては意味通せず、依つて斯く改めたのである。モファット氏は左の如く英譯してゐる。即ち「其は倒るゝ——大なる響を以て」云々 (It fell—with a mighty crash) である。

第九 貧者と富者

路 六〇二十一—二十六
同 十六十九—廿五

聖書本文

其時イエス目を上げて弟子を見やり、而していへり。

福なる哉、汝等貧しき者、そは神の國は汝等のものなればなり。

福なる哉、汝等今飢ゆる者、そは汝等満たさるべければ也。

福なる哉、汝等今泣くもの、そは汝等笑ふべければ也。

福なる哉、人々汝等を憎む時……そは汝等の祖先が豫言者になしたるも此の如し。

禍なる哉、汝等富める者、其は今己が慰を有すればなり。

禍なる哉、汝等今飽き足れる者、其は飢うべければなり。

禍なる哉、汝等今笑ふもの、其は泣き悲しむべければなり。

禍なる哉、人々汝等を讃むる時、そは汝等の祖先が偽りの豫言者になしたるも此の如し。(路六〇二十一—二十六)

茲に一人の富める者ありき。紫の布と、細布を纏ひ、日々奢り暮らせり。彼の戸前にラザロといふ一人の乞食居たりき。彼は全身腫物を患ひ而して其富める者の食卓より落つる屑にて飽き足らんと欲したり。(而かも何人も彼を慰むるものなく、只犬來り

者
イエス
と
貧

て其腫物を舐む)、然るに其乞食死にければ、彼は天使に携へられてアブラハムの懷に至れり。又其富める者も死にて葬られるが、彼は陰府にて苦められ、遙かに目上げてアブラハムと其懷にあるラザロを見て、叫びいへり、父アブラハムよ、我を憫みてラザロを遣はし、其指尖を水に浸し、我舌を冷させ給へ、我は燂の中に苦しめばなりと。然るにアブラハムいへり、子よ、汝は生ける間に凡ての幸福を享け、又ラザロは苦痛を受けしを記憶せよ、彼は今慰められ、汝は今苦しむなりと。(路十六〇十九—廿五)

【注】 右の教訓及び比喩は路加傳にのみ記されるものである。従つて多くの學者間に疑問となつてゐるものである。

イエスが貧者を憐み、彼等に同情せられたことは明白なることである。従つて「貧しき者は福なり」と告げて、彼等を祝福せられたことも、疑ふべき理由はない。只問題となるはイエスが貧者を愛して之を祝福せられたる理由である。

路加傳の記事によると、イエスは此世に於て貧苦を嘗めしものは其功德によりて來世

に於ては幸福を得るとせられたらしい。若し此理由にて彼が貧者を愛し又祝福せられたものとせば、イエスの他の教訓主義と一致せぬのである。

故に多数の學者は是を以てイエスの弟子中、貧窮を主義とする所謂エビオニ人と稱せられた一流より傳つたものとし、而してイエスの語ではないと主張するのである。

而かも吾人はイエスが「貧しき者は福なり」と語られたといふことを否定してはならぬと思ふ。又其貧しきといふは確かに貧乏をさすものである。語原を尋ねれば「虐げられたるもの」といふことであるが兎に角物質的の貧窮者に相違ない。然るにイエスは何故に彼等を幸福なりとして祝福せられたのであらうか、其意味は、即ち貧しき者の方が富める者よりも謙遜である、柔順である故に、神より恵まれるといふことであると思ふ。

富者必しも罪人のみではない。而かも彼等は金力をたのみ貧者を虐げんとする傾向がある。彼等が謙遜にして柔順なる生活をなすとは甚困難なる事である。然るに貧しき者は他に誇りとすべきもの、たのみとするものを有せぬ故にひたすら神に依り頼み、柔順なる生活をなし易いのである。故にイエスの意は貧者は寧ろ其貧者たる境遇を感謝せよと語られたものと思はれる。此く考へてこそ、イエスが貧者を祝福せられたる理由も明

路加^三エビ
オニ人

イエスの真
意

白となるのである。然らずして是を一つの功德の如く考へてはイエスの主意と矛盾して遂に其要領を得ざるのである。

第十 貧者の徳及幸福

太五。一—十

聖書本文

さてイエス群衆を見て山に登れり、彼座しければ弟子其もとに來りぬ。イエス口を開き彼等を教へ曰ひけるは。(太五。一—二)

福なる哉、心の貧しき者、そは天國は彼等の有なればなり。

福なる哉、悲しむ者、そは彼等は慰めらるべければなり。

福なる哉、柔和なる者、そは彼等は地を嗣ぐことを得べければなり。

福なる哉、義に對ひて飢え渴くもの、そは彼等は満たさるべければなり。

福なる哉、慈悲ある者、そは彼等は慈悲を得べければなり。

福なる哉、心の清き者、そは彼等は神を見ることを得べければなり。

福なる哉、平和を求むる者、そは彼等は神の子と呼ばるべければなり。
福なる哉、義のために迫害せらるゝ者そは天國は彼等のものなればなり。

(馬太五。五—十)

神國民の理想なるか

【注】 以上は路加傳が「貧しき者は福なり」との語を全然物質的に解釋したるに反し、是は又全然精神的に解したるものである。

従つて又是を以て所謂「神國民の資格又は理想」となす學者も尠からずある。眞に此文中には最も高尚なる人間の品格が擧げられてゐる。然れど之を以て其理想とすることは稍誤解であるらしい。是は單に「貧しき者は福なり」との注釋と見るべきものである。又イエスの弟子たる準備的資格であるとすれば了解せられるが、是を最高理想とすればイエスの他の教訓の主意と矛盾する。故に之を神國民の理想的資格とする人々は其語を稍曲解する危険を有して居る。尤も馬太傳記者は此語の内にあらゆる理想的資格を擧げたつもりかも知れぬが、あまりに消極的である。従つてイエスの新理想は此語の内によく示されて居らぬ。故に此語を文字通り解する時はイエスの弟子の理想的資格を教へた

キング博士の説

ものどすることができない。

米國オベリン大學校長キング博士は吾人の見解と異つて之を「人間の理想的品格」と解し、而して其箇條を左の如く説明してゐる。(同氏著耶蘇の倫理による)

- 一、「心の貧しき」者とは謙虛なる心を有する者。
- 二、「悲しむ者」とは眞に悔悟せる者。
- 三、「柔和なる者」とは最高の克己心を有する者。
- 四、「義に飢渴く者」とは最高の品性に對して熱誠なる者。
- 五、「慈悲ある者」とは人に對して同情ある者。
- 六、「心の清き者」とは人格に對して最深の尊敬心を有する者。
- 七、「平和の人」とは人々の間に平和を増進する者。
- 八、「迫害せらるゝ者」とは人々の爲に犠牲となる者。

右の説の如しとせば、如何にも是はイエスの理想らしく思はれる。然れど此注釋はあまりに近世的である、馬太の語は其れほど近世的ではない。舊約的であるのである。かくて私には此内にはイエスの理想も示されてはあるが、其れを主としたものでなく、

是は「貧者は福なり」との説明的教訓であると思ふ、イエスの主意によれば「貧しき者は福である。」何故となれば彼等は謙遜なるからである。謙遜なる者は神の力を受け得る者である。又貧しき者は柔順である。又同情を有するものである。神の救をひたすら望むものである。平和忍耐の心をもつものである。従つて貧者は神より恵まれる。故に貧者たるものは寧ろ其境遇を感謝せよ、神の國に與かるものは、此の如き境遇にあるものである。是が此説教の主意である。所詮「幼児の如くならずは天國に入ること能はず」との主意と同一である。

然るに馬太傳記者が既に之を理想化し過ぎて居る。又近世の注釋家が一層之を理想化せんとしてゐる。其れが爲にイエスが物質的貧者に對して同情と奨励とを與へられた主意を忘却する恐れがあるのである。

尙其一語一語につき注解を加ふれば次の通りである。

先づ序言に「イエス群衆を見云々と共に「弟子其のもとに來る」とある。是は弟子のみ來つた意か、所謂群衆も來り弟子も來つた意か、馬太傳の話は此意味明了でない。兎に角此教訓は主として弟子に語られたことは明かである。路加傳によれば「イエス目を

舉げ弟子を見ていへり」とあるによりても明かである。但し茲に弟子とは十二の弟子に限つたものではない。他のイエスを慕つてきた多くの人々をも含めていつてゐると思ふ。

「心の貧しき者云々」とは多數學者の承認するが如く、イエスの語又は「Q」の文には單に「貧しき者は福なりとあつたに相違ない。「心の」(原語「靈に於て」といふ語は附加せられた注に相違ない。

「貧しき」とは一層古い意味では「虐げられたもの」との意である。而して「虐げられて尙神を敬ふもの(the oppressed godly people)」といふが此語の眞意義である。(Allen, St. Matthew 参照)故にタト「心の」(in spirit)といふ語があつても之を全然精神的に解するは誤りである。是は「貧しくして 心に神を畏れ 謙遜なる者」との意である、實際に貧しきといふ意を棄て去つては本文の意と違つてくる。

「天國は彼等のものなり」とは、神の支配主權にあづかるの意で、勝利をいふのである。虐げられて而かも神を敬ふものは、必神の恩恵を受け遂に勝利者となつて他を支配するに至るとの意である。即ち「神の權は彼等に與へらる」とも又は「勝利は彼等のものなり」とも譯し得らるべきであると思ふ。

「悲しむ者云々」とはイザヤ六十一章二節の語である。「悲しむ」といふは「苦しみなやむ者」との意で「貧しき者」と殆んど同意義である。

「柔和なる者は地をつぐことを得べし」とは、詩三十七篇十一の語である。「柔和」(Meek)といふは虐げられ、苦しめられ、貧窮の生活をなすつゝも天を恨みず人を悪まず、静かに神に事へて生活をなすものである。「地をつぐ」とはイスラエルの地を嗣ぎ、祖先以來の主權を完ふすることであるが、一種の熟語で、意味は「天國は其人のものなり」と同じである。

「神の義」

「飢え渴く者」とは神の力をまち望む者、神の救を願ふものとの意である。「義に對ひて」(after the righteousness)とあるは馬太記者の附注であるが、其義とは「神の義」といふことで「神の義しき救」といふ意である。(茲に冠詞が「義」の字に附しあるは即ち「神の義」*righteousness*) (McNeile, St. Matthew p. 51)

「心の清きもの」とは、詩篇七十三篇一の語である。尙同二十四篇四にある「潔き手と清き心」(clean hands and a pure heart)をもつものといふも同意義である。

「平和を求むるもの」、又は「平和の爲につくす者」(the peacemaker)といふも舊約的の

「人の義」

言葉である。柔和、謙遜にして人と争はず、又人の争を止めるものである。

「義の爲に迫められる者」といふは、不正不義なる強者富者の爲に迫害せらるゝものである。此「義」といふは普通の正義である。但し普通の正義にても、ユダヤ人の「義」は一層宗教的で、神に事へて行ふ一切の生活行爲をいふのである。モファット氏は是を「善」(goodness)と譯してゐる。

要するに此祝福の語は貧者弱者に對して與へられた獎勵の語である。而して其語は何れも舊約特に詩篇及び第二イザヤ等後期の舊約文學より取りたるものである。従つて消極的の氣分を帯びて居る。故に是によりてイエスが貧者弱者、及び又敬虔者に對して同情を有せられ居りしことを知るを得れど、前述せる如くに之をイエスの完全なる理想とすることはできぬ。(尙附録、終末論者の意見を参照せよ)

第十一 富についての教訓

路 十二。十三―卅四・同十六。十三
太 六。廿五―卅五
同 六。十九―廿一・廿四

聖書本文

群衆の中の一人、イエスに曰ひけるは「師よ我が兄弟に我が家督の分配を與ふるやう命じ給へ」と、イエス、彼に曰ひけるは「人よ、誰が我を立て、汝等の裁判人又は分配者となせしや」と、イエス又人々にいひけるは「戒心してあらゆる貪心を慎しめよ、夫れ人の生命は其所有物の豊かなるには因らざればなり」と。(路十二・十三―十五)

又弟子にいひけるは

生命の爲に何を食ひ、身體のために何を着んと思ひ煩ふ勿れ。

生命は食物にまさり、身體は着物にまされり。

鴉を見よ播くことなく刈ることなく倉をも納屋をも有せざるなり。

然れども神は是等を養ひ給ふ。

汝等鳥にまさること幾許ぞや。

汝等思煩ひて其身長を一キュビットも延ばし得んや。然らばかゝる小さき事さへなし得ざるに、何ぞ其他のことを思ひ煩ふや。

又百合は如何にして成長するかを見よ、紡くことも織ることもせざるなり。

然れど我汝等に告げん、ソロモンの榮華の極に於てさへ彼が粧此花の一に如かざりや。

夫れ神は今日野にありて、明日爐に投げ入れらるゝ草をもかく粧はせ給へば、況して汝等をや、ア、汝等何ぞ彼を信することの薄きや、然らば何を食ひ何を飲んと求むることなく、又思ひ惑ふこと勿れ。是等は異邦人の求るものなり、汝等の父は是等のものなくてならぬことを知り給へり、汝等只神の國を求めよ、然らば是等のものは皆汝等に加へらるべし。(廿二―三十一)

汝の所有を賣りて、之を施せ。

自己の爲に古びざる財布を造れ。

つきざる寶を天に蓄へよ、其所には盜賊も近よらず、蠹もそこなはざるなり。

そは汝等の寶のある所に汝等の心もあるべければなり。(三十三・三十四)

僕は二人の主に事ふること能はず。

其は一人を惡み、一人を愛し。

又一人に近づき、一人を疎むべければなり。

汝等神とマンモンとに兼ね事ふること能はざるなり。(十六。十三)

身體の燈火は目なり、故に若し汝の目健全ならば全身明かなるべし。

されど汝の目悪からば、全身暗かるべし。(太六。廿二・廿三)

【注】 イエスは前節に於て教へられたる如く、貧者を祝福し、彼等にして始めて天國の子供たり得る資格ありとせられた。然れど是は必しも全く富なるものを罪惡とせられたのではない。富者が其富の爲に貪慾であり、高慢であり、又其の爲にのみ心を用ゆることを厭ひ給ふたのみである。

富が生活に必要なことはイエスも承認せられた所である。但し、彼は富の奴隷とならず、又其爲にのみ心を用ゆることなきやうに戒められたのである。本節の教訓は其主意に基くのである。

「あらゆる貪心」とはあらゆる形をもつて現はるゝ貪心の意、イエスは富其ものを排斥せずして寧ろ貪心を戒められたのである。

「夫れ人の生命は云々」の語は原文の字句正しく列べられて居らぬ故に大體の意味は了解し得らるゝが正確には譯し難い。直譯すれば、

「人の豊かなるによりて其生命はあらず……其所有物より……」(For not in any man's abundance is his life……from his possessions)

といふやうな句で何か語を加へるか又は少しく句の位置を變へるかせねば意味が通せぬ依て、普通に「人の生命は所有物の豊かなることによりては成立せず」とするのである。

(For a man's life consisteth not in the abundance of the things which he possesseth) 又或人々は「人は如何に多くの富を有するも、其所有物より人の生命は生ぜざるなり」と譯し又或學者は「人の生命は其豊なる所有物の一部にはあらざるなり」と譯するのである。

尙其生命(Life = Zoe)といふ語は普通には永遠の生命又は救といふ義に用ひられる語である。普通人間の生命又は精神といふ時には別の語即ち「靈」(Soul = Psyche)の語が用ひられる。依て文字上よりいへば此句の意味は人の救即ち永遠の生命は所有物より來らずといふのである。然るに多くの學者は此時に於ける、生命といふ語は精神又は、人間の

地上に生きてゐる生命をいふのである。此生命は物質より來つたものでない。故に其次ぎに路加が記す比喩にある如く(本書には略した)、物質は多く集められても、死すべき場合には何のやくにも立たぬといふのであるとする。其れが正しいやうにもあるが原語の意味のまゝにて「永遠の生命」の意義であるとしても大なる不都合はない。

其次ぎに「生命の爲に何を食ひ云々」とある生命は確かに地上にある時の生命、肉の内にある靈で、原文にも、前文の生命即ち救又は永遠の生命といふ語でなく、普通の精神又は「靈」(Soul = Psyche)といふ語が用ひられてある。

尙序であるが生命及生活に關し、數様の言葉が、聖書中相似て而かも稍異なる意味に用ひられるのである故、一言説明を加へて置きたい。

生命について
の三種の
用語

一、神より出づる「靈氣」(Spirit-Pneuma) 是は血肉(Flesh)に反對するものである。此語は人の心靈といふ意に用ひられることもある。

二、人の精神又は「靈」(Soul-Psyche) 是は肉體(body)に反對するものである、但し是は肉體とは離すべからざる關係あるもので「肉に於ける生命」の意である。

三、生命(Life-Zoe) 是は肉體的生活(Bios)に反對するもので、主として永遠の生命、救

の生活をいふのである。以上説明する如く此三種の言葉は各異つた意味を有するのであれど、時には著しき區別なくして用ひられて居る。

「ソロモン云々」は直譯すれば「最も榮華を極めたる時に於けるソロモンさへも、彼等(花)の一つの如くには粧はざりき」といふのである。

「神の國を求めよ」は馬太には「彼(神)の國と義を求めよ」又或原本に「神の國と彼の義を求めよ」とある。即ち義といふ語が加つてゐる。馬太傳記者は好んで此語を用ひる。是はユダヤ的の語である。

前に既に説明した通り義には二様の意があつて「神の義」といふ時には殆んど「神の救」と同義であり、「人の義」といふ時には信仰生活の全體をいふのである。是は前に説明した通りである。

要するに「義」を求むるといふことは今日の正義を慕ふといふ語とは稍意味を異にしてゐる。其意味も其内に含んでゐるが一層宗教的の語で、神の救、及敬虔の生活といふやうな語である。而して神の國即ち神の支配の完成と殆んど同意義である。かくて路加は此「義」なる語を用なしとして除いたとも考へられぬことはない。但し馬太が、ユダヤ人

の理想たる此語を、神の國と並べて爰に入れたとする方が正當であらう。

「求めよ」は現在動詞の命令であるが、之は文法上連續を意味してゐる。故に「求めつゝ居れ」(Continue to seek)といふ意である。

「マンモン」とは、財寶を人格的にいひ現はしたものの、マンモンといふ福の神があつたので、此語が用ひられたのである。

「目の健なる」とは慈愛に富むこと、「目の悪しき」とは慾心深きこと、是はユダヤ人の間に熟語となつてゐた言葉である。而してイエスの意は心に慾心深ければ燈火の暗きが如く人は明かなる生活をなし得ぬといふのである。

右の教訓は凡て馬太傳記者が山上垂訓中に入れてゐるものであるが、恐く獨立の教訓であらうと思つて路加傳に従ひ、別に此所に記した次第である。

イエスは肉體的要求を罪である或は卑しきものであるとは決して思つて居られなかつた。然れど富が人間の良心を傷け其靈性を害することを認め強く其誘惑に勝たんことを説かれたのである。

目の善惡

第十二 祈禱についての教訓

路	十一。一—十三
太	六。九—十三 十七。廿
同	七。七—十一 路 十七。五・六

聖書本文

イエス或處にて祈りしけるに、其終れる時、一人の弟子彼に曰ひけるは「主よヨハネ其弟子に教へし如く汝も我等に祈ることを教へ給へ」と。イエス彼等にいひけるは、祈る時は斯くいふべし。

「父よ、汝の名を尊からせ給へ、

汝の國を來らせ給へ、

日々の糧を日毎に與へ給へ、

我等も亦我等に負債ある者を凡て許せば、

我等の罪を許し給へ、

我等を誘惑に導き給ふ勿れ」と。(路十一。一—四)

イエス又彼等に曰ひけるは「我汝等に告げん、求めよ然らば與へられん、尋ねよ然

らば遇はん、叩けよ然らば汝等のために開かれん、そは凡て求むる者は得尋ぬる者は遇ひ、叩く者は開かるべければ也。汝等のうち父たる者、誰か其子のパンを求めんに、石を與へんや。又魚を求めんに其れに代へて蛇を與へんや、又卵を求めんに蠍を與へんや、然らば汝等惡き者ながら、善き賜をその子に與ふるを知る、況して天の父は求むる者に聖靈を與へざらんや。(九—十三)

我誠に汝等に告ぐ、汝等若し芥種かいたねほどの信仰あらば此山に向ひて此所より彼等に移れといふとも山移らん。(太十七。二十)

主の祈

【注】祈禱の大切なることはいふ迄もない。但し是は一種の修行ではない、従つて形式的に行ふものではない。人間の赤心を神に披瀝するのである。イエスは茲に一の模範を示された。而して是も規則ではない。故に常に此通りを其まゝ唱へよといふのではない。さて其祈禱文に馬太と路加にて多少の差がある。之を比較せば次の通りである。

(馬 太)

天に在ます我等の父よ

(路 加)

父よ

汝の名を尊からせ給へ

(太と同じ)

御國を來らせ給へ

(太と同じ)

汝の御旨の天に成る如く地にもなさせ給へ

(無し)

日々の糧を今日も與へ給へ

日々の糧を日毎に與へ給へ

我等の負債を許し給へ

我等の罪を許し給へ

我等も亦我等の負債者を許す如くに

我等も亦我等に負債ある者を悉く許す故に

誘惑に導き給ふ勿れ

(太と同じ)

却て惡き者より我等を救ひ出し給へ

(無し)

(其は國と權と榮とは永遠汝のものなればなり)(此句は古き原本になし、改正英譯も除けり)

言語の簡短なるより考へて路加の文がイエスの原語に近いやうに思はる。但し馬太の

文のユダヤ的なるを却てイエスの原語に近い理由とする學者もある、主意は大體に於て同様である。

「父よ」とは恐くイエスの常に用ひられた祈禱の語であらう、「我等の」とか「天に在ます」とかいふは言語を整へる爲に記者の加へたものであらう。

特に「天に在ます父」(The Father which is in Heaven)といふ語は舊約聖書中一回も用ひられて居らぬ語で、是れがユダヤ人の文學中に見ゆるに至つたは紀元一世紀の終り頃よりである、是れより見ても此語は比較的新しき語である、恐くイエス自身用ひられた語ではない。

「御名を尊からせ給へ」とは、神の御名が人々より「聖」なるものとして認められ且敬はれんことを祈るとの意である。(Let it be acknowledged to be holy, treated as holy, venerated) 換言せば多くの人々が眞に神を尊び、神の榮光の耀くに至らんことを望むといふことである。

「御國を來らせ給へ」といふは神の支配、主權(Dominion rather than Kingdom)が、此地上にも確立せんことを祈るとの意である。現在も神の支配の下にあるには相違ないが、

尙罪惡盛んに行はれて充分に聖旨の行はれ居らぬからである。尙「御國」(汝の國)とはメシヤ時代をいふものかと思へど、必しも終末的のものど解するに及ばぬ。神の支配さへ行はるゝに至れば如何なる時と所でも天國である。

「聖旨の天に成る如く云々」の句が馬太傳にはあるが、是は記者が恐く附加した注の語であらう。天に成るといふは神の周圍に侍する天使等の間に行はれてゐるといふ義では是れもユダヤ的の語である。但し彼等も「天國が天に成立してゐる故に其所に往きたい」といふやうな考をばもたなかつたらしい。ユダヤ人等はあくまで、此地上に聖旨の行はれ天國の成立せんことを望んだ。

「我等の日々の糧云々」はイエスが肉體的生活をも尊まれたことを示してゐる。糧とはパンの義である。

「罪を赦させ給へ」は神の前に自己の罪を懺悔することである。赦すことは神の旨で祈る祈らぬに關係はないが、人間に謙遜な心がなくば其罪の赦を経験することができぬ。罪の赦を経験することは神の親しみを經驗することである。「アバ父と呼ぶ子」たる實驗に入ることである。斯くて人間は古き失敗を去りて新しき生活に移ることができるので

ある。

「我等又他人の罪を許せば」とは決して是を代償として神の赦を買はんとするのではない。我等が謙遜なる態度を告白して神の助を乞ふのである。

「誘惑に云々」とは自己の弱きを知つて神の保護を祈つた語である。但し之によつて絶對に誘惑又は試練 (Temptation or trial) を受けぬといふことはできぬ。故に之を受けた時は一層神の力を要するのである。此祈の内に其意も含んでゐると思はれる。

尙馬太傳には「惡しき者より我等を救ひ給へ」といふ一句が附加せられてゐる。

「惡しき者」とは惡魔である。ユダヤ人によれば世界は今惡魔の手に支配せられてゐる。故に我等は是非共其手より救はねばならぬと皆考へたのである。

「聖靈を與へんや」は馬太傳の方には「善き物」としてある。其方がよいかとも思ふ。

路加が用ひた「聖靈」の語は、パウロ又は馬可傳の感化によるものかと思ふ。但し其れに、神學上の意味がなかつたことは明白である。又或學者は路加が、エビオナイト派 (Ebionite) の資料に基き、肉體を卑しめ靈を重んずる所より、この語を用ひたのであると論じてゐる。エビオナイト派の感化が路加傳に存することは確實なれど、此句まで

を其感化となすは恐く誤謬であらう。

「求めよ然らば與へられん」といふはイエスにとりては最も大切なる教訓であつた。彼が如何なる迫害と困難にも失望せず、大膽なる活動をなし得た所以は常に神に祈り、而して此教訓の如く其祈りが必聞かるゝものと信せられたからである。故に「求めよ然らば與へらる」との信仰はイエスの力の源であつた。又「芥種ほどの信仰あらば、此山に移りて彼の海に入れよといふも又成らん」とは彼が生涯の確信であり、又抱負であつた。而して彼に是れありたればこそ、彼はよく人間の力を頼まずして、救世の大事業に當り、又よく之を成就せられたのである。

第五章 ガリラヤに於ける傳道

概説

ガリラヤ傳道の價值

イエスの傳道は主として何處に於て行はれたかといへば、いふ迄もなくガリラヤに於てであつた。併しながらガリラヤは田舎であつた故に、此地に於て起つた運動をば自然輕蔑する風があつた。元來ユダヤ人はメシヤはエルサレムに於て活動するものと思つてゐた故に。福音書記者もイエスのエルサレムに於ける傳道をば殊更に尊重し、ガリラヤ傳道をば、輕視する傾向がある。然れどイエスが主として傳道せられた地はガリラヤで、此地に於ける傳道がイエスに取りて最も有意義であつたのである。

イエスは如何にして此ガリラヤ傳道を始められたか。又イエスは如何なることをガリラヤ人の間に説かれたか。是は既に前章に於て研究したる所である。されば本章に於ては、其ガリラヤ人が、如何にしてイエスの傳道を受けたかを、主として研究せんとするのである。

ガリラヤ平民の失望

ガリラヤは由來平民の國であつた。其平民等がイエスに對して、如何なる態度をとつたか、是れが本章の重なる問題である。吾人が福音書を見て、先づ認め得ることは、最初に於てはイエスの傳道が大に是等の平民の間に歡迎を受けたことである。人々は恰かも旱天に雨を得た如くに喜びイエスの許に集つた。而して柔順に其教を受け悔改めて、肉も靈も救はるゝ人が甚だ多かつたのである。

然るに何時の頃よりか次第に反對の氣勢が強くなり、遂にはガリラヤ傳道も全く失敗に終つた。是は如何なる理由によるか、其點につきては福音書の記事明瞭を缺ぐと雖、略其記事によりて次の如きことが推知せられるのである。即ち第一の理由はバリサイ人學者祭司等が反對したることである。イエスが彼等と衝突せられたことは前章既に研究したる所である。又本章にも一二其記事を載せた。而して是が、平民等の心に影響したのである。然れど原因は其れのみではなかつたらしい。元來ガリラヤの平民等は一旦大に感激する所あれば學者祭司等の反對に逆つてもよく奮闘するを得たものである。然るに尙多數の平民をして其れほど迄に奮起せしめ得なかつた原因は他にあると思ふ。其れはヨハネの弟子がイエスを訪問した時の語や、又約翰傳に「人々彼を王とせんとした」と

いふ記事などから、略ぼ想像せらるゝのである。即ち一般の平民等は、一層政治的にして、一層煽動的なる人物を要求したのである。然るにイエスは彼等の要求に應ずるやうなる人物ではなかつた。彼は現實に於ける人々の悩みに深く同情し、此苦痛より彼等を救はんとせられたのであるが、其精神は純宗教的であり、其方法も心靈的・道徳的であつた、イエスは彼等に先づ心より悔改めて神の力と愛とを信するやう要求せられたのである。是れ彼等の豫期に反してゐた、其爲に彼等は失望せざるを得なかつたのである。此失望がイエスの傳道をして遂に失敗に終らしめたる大なる原因と思ふ。

少數の弟子

イスカリオデのユダの如きも最も深く失望した一人である。彼は其結果、遂に反對に彼を賣つたのである。他の弟子等に於ても多少は同様の失望をもつてゐたに相違ない。然れども幸に彼等は深くイエスの高潔なる人格と其愛に感ずる所があつた故に、よく其失望に堪へて終りまで志を變へなかつたのである。

イエスの傳道なるものは以上の如くして歓迎せられ、又遂に表面上失敗に終つた。然れど前述せる如く忠實なる少數の弟子等は最後まで其志を變せず、尙神を信じイエスを信じてゐた。かくてイエス自身は少しも失望せらるゝ所はなかつた、元來イエスの主意

は自ら王となつて政治的國家を組織せんとするのでなかつた如くに、又一大教會を作つて多くの信徒會員を得んとするのでもなかつた。勿論イエスは政治を度外視し、教會を無用視せられたのでもなからう。然れども其れは第一のことではない。又イエスが自己の使命とせられたことではなかつた。政治のこと若しくは教會組織のこと等は第二第三のことで、又他に之に當る人もあると信じて居られたに相違ない。彼は専ら人々の良心に訴へ其信仰心を覺醒し、彼等の精神の根底に或生命を與へ得ればイエスは我事業は成功せりと信じてゐられたらしい。又其人々が假令少數なりと雖、イエスは其少數者によりて遂には大事業が成就せらるゝと信じてゐられた。一人の心靈に播かれたる生命の種は必未來永遠に偉大なる効果を生じ得るものと信じてゐられたのである。

さて以上の如くして行はれた所謂ガリラヤ傳道は略ぼ幾許の期間續いたものであるか、之れが又困難なる一問題である。普通には約翰傳の記事に基き、三年に亘つて行はれたもので、其間にイエスは數回エルサレムにも行きて傳道せられたといふのである。然れど是につきは疑はしい點が多い。共觀福音書を見れば、最後の記事の外にエルサレム行が一度も記してない。而して時を知るべき記事としては只次の二つがあるのみであ

ガリラヤ傳
道の年限

る。即ち麥の穂の熟してゐたことと、綠草のあつたことの記事である。是は春が凡そ二回あつたことを示すのである。かくて近頃多くの學者は、イエスの傳道は前年の春、即ち「スギコシ節」以後に始まり、次年の春即ち「スギコシ節」に終つたのである。故にガラヤ傳道は略十ヶ月乃至十一二ヶ月であつたといふのである。此説によるとユダヤ傳道といふは僅かに一二ヶ月に過ぎなかつたのである。

以上の學説はあまりに短期に過ぐるやうにも思はれるが、或は其の位のものであつたかも知れぬ。元來ガラヤは小さい國で南北六十哩、東西三十哩、其内にも異邦人の市邑もあつた故に、實際イエス及弟子等の巡回傳道した地域はあまり廣くなかつた、故に其間を一通り巡回して傳道するには左程多くの時を要せなかつたに相違ない。

尙イエスの傳道は前述せる如くに、今日の基督教傳道とは異り、いはゞ同一信徒間に道を傳へ彼等の信仰を覺醒するもので、決して異教徒間に働きしものでなく、又組織的教會を建てんとするものでもなかつた。故にイエス自身も左程多くの時日を之が爲に費さんとせられたのではなかつたらしい。弟子等がイエスに従つて此運動に加つたのも、終生其職につかんとしたのではない。職業としての傳道といふやうなことは彼等の毛頭

考へなかつた所である。以上の如き事情より推考せば、恐くイエスの傳道は長い時期のものではなかつたのであらう。故に私は所謂短期説を可とするもので十年若しくは十五年も働かれたといふ長期説もあるが、是には賛成することができぬ。

尙其他の件につき研究を要すべきことが多いが、是は本章に引用した聖書本文及び其れに附したる註によりて了解せられんことを望む。

第一 癩病人癒さる

可 一。四十一—四十五
太 八。二—四
路 五。十二—十六

聖書本文

癩病のもの一人かれに來りて跪き願ひ曰ひけるは「汝の意に適はゞ汝我を潔くなし得べし」と、イエス深く憫みて、手をのべ、彼につけていひけるは「我が意に適へり潔くなれ」と、癩病直ちにはなれ其人潔まれり。イエス嚴しく戒めて彼を去らせたり、曰く「汝何をも人に告ぐる勿れ……」と、(可一。四十一—四十四)

【注】以下數節に亘りてイエスの奇蹟談を掲載することゝした。是は奇蹟が特にガリラヤ傳道中に多く行はれた爲と、又其れがガリラヤ人の信仰を示す爲によるのである。即ちイエスを信すること篤くなかつたユダヤ地方にては多く奇蹟は行はれなかつた。又ナザレに於てさへ、人々の不信の爲にイエスは病人をいやすことをなし得なかつたのである。

奇蹟は前にも述べた如くイエスが自己の權威の證據として行はれたものではない。イエスは外形的證據に訴へて己を信せしむることを好み給はなかつた。又肉の救済を主として働かれたのではない。従つて特別に奇蹟を尊重するは弟子等の間に起つた思想でイエスの本意ではない。然らば奇蹟は何等の意義をも有せぬものか、又は全く後人の偽作したものかとの説もあれど、吾人はかくの如き考も、誤つてゐると思ふ。此事につきては既に説明する所があつたが、尙一言して置きたい。奇蹟は後に至りて愈尊重せられ、其物語も一層不可思議のものと見做されたい。然れどイエスが自己の人格の感化と人々の信仰の力によりて重病者をもいやされたことは實際あつたに相違ない。又イエス

奇蹟の主意

が肉の惱みに對して同情せられたことも明白である。但しイエスの最大の目的は福音を傳へて人々の人格を生れ更はらしむることにあつた。而して其結果、箇人の肉體的生活も、社會の政治的狀態も改善せらるゝに至らんことを希望せられた。其れ故に奇蹟のみを見て彼に來るものや、肉のみの癒されんことを欲して、靈の生れ更はりを欲せざるものはイエスより叱責せられたのである。

イエスの奇蹟の主意は右の如きものであつたとせば所謂天然の奇蹟は信するに困難なるものとなる。イエスはかゝる外形的奇蹟をなして己を信せしめんとするが如きことをなす人ではなかつた。イエスは元來信仰の力によらば、山を移することも、いと易きことと思つてゐられた。即ち彼は全能者たる神を信じ、彼の聖旨に適へば如何なることでもなし得られぬことではないと思つてゐられた。然れど前より既に述べ來つた如く、イエスは先づ何よりも人を重んじ、其人格の改善を目的とせられた故に、天然を變化せしむる奇蹟のことには意を用ひられなかつたのである。

尙「奇蹟」(Miracles)といふ語は聖書翻譯中に多く用ひられる語であるが、是はよい譯語ではない、其語は「力」といふ原語か、又は「休徴」(Sign)といふ原語かに用られるの

「奇蹟」の原

であるが、英語改正譯にはなるべく之を改めて、前者を「力ある業」(Mighty work)とし、後者を「休徴」(Sign)としてある、其れでも尙此「奇蹟」の譯語を用ひたる所もある、但し其時には注として其れが「力」なる原語か「休徴」なる原語かを明示してある。

共観福音書には大抵イエスのせられた所謂奇蹟をば「力ある業」と呼んで「休徴」とは呼んで居らぬ。只路加傳に一ヶ所(廿三。八)「休徴」と呼んで居る。然るに約翰傳にはイエスの奇蹟を一切「休徴」と呼んである。想ふに是はイエスの意ではないと思ふ。イエスは明かに「休徴」をば排斥せられた。ユダヤ人が「休徴」を求むることを甚しく怒り給ふた。故にイエスのせられたことは「休徴」でなくして「力ある業」である。「力ある業」とは神の大能の現はれたる事業といふ義にて、決して教義的意義あるにあらず、又必しも超自然的事業といふ意でもない。

さてユダヤにあつた癩病といふは日本にある癩病とは異つてゐたやうである。ユダヤの癩病も一種の皮膚病で甚嫌れたものである。道をゆくにも其患者は「不淨々々」と呼んで往かねばならぬといふ程のものである。然れど全く不治の病氣ではなかつた。故に利未記にも是れが癒えた時の律法が記してある。イエスに癒されたのも斯くの如き病氣で

「力の業」と「休徴」の差

癩病の性質

あらう。

此治療は何處にて行はれたことか明瞭でないが、此本文の前の節に「イエスガリラヤを巡りて教を傳へ云々」とある故にガリラヤの一地方であつたことには相違ない。ガラヤ傳道の一特色はかかる奇蹟の多く行はれたことである。

尙「行きて祭司に見せ云々」と聖書本文にあるが、是はイエスが普通ユダヤ人の習慣に従ふことを命せられたといふに過ぎぬ。

第二 イエス風波を靜む

可 四。三十五—四十
太 八。廿三—廿七
路 八。廿二—廿五

聖書本文

其日、夕暮に及びイエス彼等にいひけるは「我等向ふの岸にわたらん」と、彼等乃ち人々を離れ、イエスの舟に在りしを其まゝ乗せ往く、又他の小舟も共に往けり。時に大風起り浪うちこみて殆んど舟に満ちぬ。イエス艫のかたに枕を置きて寝たりしが

弟子彼をよび醒ましていひけるは「師よ我等が溺るゝをも顧み給はざる乎」と。彼起きて風を戒め、又海に對ひて黙せよ静かなれといひしかば風やみて大なる風となりぬ。斯くて彼等にいひけるは何故かく恐るゝや、汝等何ぞ信なき乎」と。(可四。三十五—四十)

【注】「其日」とあるは湖畔にて説教せられし日をいふのであるが、便利のため其説教と分けたのである。尤も路加傳には或日となつてゐる。

「師よ」は普通弟子がイエスを呼びし語である。即ちラビと呼んだのである。ラビといふものゝ彼等もイエスが普通の所謂ラビでなかつたことは知つてゐたであらう。

さて是は所謂天然の奇蹟の一例である。此他に天然の奇蹟といへば波の上を歩まれたこと、五つのパンで五千人を養はれたこと等である。果して斯くの如きことが行はれたか否かは大なる問題である。

但此事の可能又は不可能を論ずるは我等が研究の目的でない。是は果してイエスの精神に適ひ其事實と合致するかといふが主旨である。イエスが休徴を排斥せられたことは

天然の奇蹟

其事實を寧ろ否定するものではなからうか、「鬼を逐ふ」「病をいやす」といふことは屢々イエスの言葉にも現はれたことである。然れど天然の奇蹟を以て神の力又は自己の使命を證明せられたことはない。イエスが大なる奇蹟とせられたことは斯る事實ではなく他に大なる事實があつたのである。

但し右の記事は注意すべきものである。イエスが常に此湖上を往來して傳道せられたること、彼が屢疲れて風波の中にも熟睡せられたること、弟子が驚き騒いだこと、是等は何れも確實なる事實である。イエスが又立て海に向ひ大聲を發せられたといふこともあり得べきことである。但し其れが事實上奇蹟の力があつたか否かは明瞭でない。又海を叱責せられたとあるは恐く弟子を叱責せられたことではないかと思ふ。

第三、ゲラサの狂人癒さる

可 五。一—十九
太 八。廿八—卅四
路 八。廿七—卅九

聖書本文

第五章 第三、ゲラサの狂人癒さる

かれら湖をわたりて、ゲラサ人の地に至れり、イエス舟より上るや直ちに、穢れし靈に憑れたる者、墓より來りて彼に遇ふ。……彼遙かにイエスを見て走りより彼を拜し、大聲に呼はりいひけるは、いと高き神の子イエスよ、我汝と何の關係あらんや、我神によりて求む、我を苦しむる勿れ」と、茲に多くの豚の群、山に草食ひるたりしが、穢れし靈其人より出で豚に入りしかば、約二千匹ほどの群、はげしく走せ下りて湖に入り溺れたり。

イエス乗る時、彼の惡鬼になやまされし人、隨はんことを乞ふ。イエス之を容れずしていひけるは「汝の家汝の親戚にゆき、主が汝の身に如何ばかり大なることをなし、又汝を憐みしかを告げよ」と（可五。一—十九）

【注】「ゲラサ」といふ語は不明の語である。馬太傳には「ガダラ」とある、「ガダラ」は大きな市である。ゲラサは稍隔つた所の地名である。此近くに此名にあたる地を發見し難い。兎に角ガリラヤ湖東岸の一地方であつたに相違ない。ゲラサ人といふは其地方に住む人をいふので、異邦人であつたか、どうかかわからぬ。但し豚を牧ふことを見ればユ

ダヤ人であつても普通のユダヤ人とは異つてゐたことは明瞭である。恐く癒された人も下等なるユダヤ人の一人であつたかと思ふ。

「墓より」といふは土中の穴よりといふ意ではない。ユダヤの墓は岩石の間に造つた、窟のやうなものである。横に向ひて掘つてあるのである。

イエスが「汝の名は何か」と問はれたに對し惡鬼は「レギオン」（軍團）と答へたといふ數節の語をば省略した。是は記事を簡明にする爲であつた。尙是れは當時の風習又は思想に基きて記したもので、重要なものでない。イエスも古代のユダヤ人であつた故にかゝる思想をもつてゐられたかも知れぬ。但し斯ることはイエスの根本的思想には關係のないことである。

惡鬼が豚の群に入りて湖に入つたといふは一層信じ難きことである。當時の一般的信仰に基く記事に相違ない。恐く此人が其癒される時、大聲を出しつゝ走せ廻つたので、其れで豚が恐れて湖に入つたのであらう。是に深い意味があるとは思はれぬ。

尙此人がイエスに従ひ往かんとしたをイエスが止めて「汝は家に歸れ云々」と命じたことは、イエスが各人の性質によりて其使命の異なることを信じてゐられたことを示すもの

である。イエスに従ひ行くことのみが弟子の使命ではない。家庭に歸り其父母親戚と共に神を信じつゝ其家業に従ふのも、イエスの弟子たるもの、使命の一である。

第四 ヤイロの娘及血漏の女癒さる

可 五。二十一—四十三
太 九。十八—廿六
路 八。四十一—五十六

聖書本文

會堂の司つかさどの一人なるヤイロといふ人來り、イエスを見て其足下に伏し、ひたすら乞ひひけるは「我が幼こき女むすめ、死ぬるばかりなり。彼が救はれ、且生きん爲に、來りて手を按おき給へ」と。

イエス彼と共に往くとき、多くの人々彼に従ひおしあへり、爰に十二年血漏を患ひたる婦あり、イエスの事を聞きて群衆の中より彼の後うしろに來り、其衣にさはれり、そは彼女は其衣にだにさはらば癒ゆべしと自らいひむたればなり。かくて直に彼女の血の泉涸れぬ。……イエス其婦を見んと見廻はしければ、婦おそれおそい、來りて彼の前

に伏し悉く其實を告げたり。イエス彼にいひけるは「小女よ、汝の信仰汝を癒やせり、健康にして往け、汝の病全く癒やされよ」と。

尙語り居れるに會堂の司の家より人々來りていひけるは「汝の娘死ねり……」と。イエス會堂の司にいふ「汝恐るゝ勿れ只信じ居れ」と。かくて會堂の司の家うちに來り凡ての人を出たし、幼兒の父母と彼に従へる者のみをつれ、幼兒の臥せる處に入り、幼兒の手を執りて、彼にいひけるは「タリタ、クミ」と。之を譯せば「少女よ、我汝にいふ、起きよ」との義なり、少女直ちに起きて歩めり。(可五。二十一—四十三)

【注】會堂の司といふは牧師とは稍異つてゐる。長老又は執事長とでもいふやうな人で、其會堂の長ではあるが、常に自ら説教するのではない。彼が他の人に依頼して説教し又聖書を讀ましむるのである。カペナウム附近には會堂も幾つかあり、従つて其司なる人も他に幾人もあつたのである。尙一つの會堂に數人の司のあつたこともある。但し何れも名譽ある人々であつたに相違ない。イエスの衣に觸れて癒されたといふ婦人はいふ迄もなく篤き信仰の人であつた。イエスも「汝の信汝を癒やせり」と語り給ふた。當時イ

エスに癒されたといふ人々は皆かゝる信仰を自らもつてゐたのである。

「健康にして往け」は希臘語にては「平安にして往け」といふのであれどヘブル語の意味は「健康……」である故かくしたのである。

「汝の病全くいやされよ」と譯したは汝の舊き病より全くいやされて「健康で暮せ」といふやうな意 (be well, or be free from your complaint) である。

ヤイロの娘は初め全く死んでゐたのではなかつた。即ち馬可傳には、此司が歸途に、死んだといふ知らせを受けたと傳へて居る。然るに馬太傳には、此會堂の司がイエスの所に來た時に、既に死んでゐたと記して居る。かくて馬太は馬可の物語を一層奇蹟的にしてゐる。

尙「家に入りしに騒ぎ甚しく人々泣き且嘆き居たりき」とあり。是は馬可によれば雇はれたる人々が來て泣いて居たのではない。何故なれば今死んだといふ通知を受けた司がまだ歸りつかぬに既に雇人の來る筈はない。然るに馬太傳には「笛ふく者云々」とある。是は明かに雇はれ人である。ユダヤにて死者ある時は人を雇つて泣かしむるのである。馬太傳は即ち死して既に時を経たるものとしてゐる。馬可傳は其時すぐであつたやう

傳へてゐる。

「タクタ、クミ」は「小女よ、起きよ」の義でアラマイツク語である。

第五 百人長の僕癒さる

太 八。五—十三
路 七。一—十

聖書本文

イエス、カペナウムに入りし時、百人の長きたり請ふて、曰ひけるは「我僕、中風をやみ、家に臥しゐて、甚だ苦めり」と。イエス彼にいふ、「我至りて彼をいよさん」と。百人の長答へていへり、「主よ、我は汝を我が屋根の下に迎ふるに足らず、只一言を出し給へ、然らば我僕はいえん。其は我は權威の下にあるものなれど、尙我が下に兵卒ありて、其一人に往けといへば往き、又他の者に來れといへば來る。又我が奴隸に是を爲せといへば彼は其をなすなり」と。イエス之を聞き、大に怪みたり。而して隨へるものにいひき「誠に我汝等に告ぐ、イスラエルに於てさへも、かゝる大なる信に遇はざる也と。又百人の長にいへり、「往け、汝が信する如く汝になるべし」と。而

して其時より其僕はいえたり。(太八。五十一・十三)

此記事の特
頁

【注】右の物語は資料「Q」に載せられしものと見え、馬可傳に記されざるに拘らず、馬太にも路加にも記されてゐる。「Q」の他の文章と稍趣を異にするので「Q」でなく他の資料に記されありしものとの説もある。但し之を決定することは困難である。「Q」にあつたとしても大なる不都合はない。只「Q」にあつたとせば「Q」編纂の年代を稍遅くせねばならぬやうに思はれる。

他の馬可傳に出づる奇蹟と比較せば、其異なる所は遠方にありて、只言葉を以て、よく病者をいやしたといふことにある。

異邦人の信
仰

又此恩恵を受けた人が外國人であつたことも此物語の一特徴である。外國人がイエスより病氣をいやされた例は「サイロビニケに生れし婦人」(可七。廿四—三十)があつた。共に信仰厚き人にて、イエスの驚嘆を受け、且共にイエスの言葉のみにて病人は離れて居ながら癒されたのである。又「主よ」といふ語も著しき語である。

「主よ」といつた語はイエスの生存中、他より受けられた語ではないらしい。其の爲か

「主」の語

モフアット氏は「君よ」(Sir)と譯してゐる。然れど原語は主(Lord)である。是等は先きにいへる如く、此物語が馬可傳に出づる或奇蹟談と比して決して早く記されたものではないことを證明する。

「我が僕」としたは「我が子」(boy)即ち我が愛する若き僕との意である。奴隸であつたかないか是れのみにては明瞭でないが、路加傳には「奴隸」(bond-servant)と明記してある。

「汝を我が屋根の下に迎ふるに足らぬなり」とは無論謙遜の語であるが彼が異邦人なりし故に特に遠慮したのかも知れぬ。

「権の下にある」とは百人長にも他の長官があつたに相違ない。彼は五十人乃至百人の兵士の長に過ぎぬ。而して彼はカペナウムに駐在してゐたことより見れば、領主ヘロデ、アンテバスの臣であつたかと思ふ。

「大なる信」とは果して如何なる信であつたか其深い内容をば此記事のみでは知ることができぬ。只此記事によれば、其信仰はイエスの力によりて病人がいやされるといふこととの厚い信仰に過ぎぬ。但し其單純なる信頼の心が最も尊いのである。

第六 洗者ヨハネ使者を遣はす

〔太 十一。二十一—二十九
路 七。一八一—三十五〕

聖書本文

さてヨハネ獄中にてキリストの業わざを聞き、弟子を遣はして彼に曰はしめたり。曰く「来るべき者は汝なる乎。或は我等他にまつべき者ある乎」と。
イエス彼等に答へて曰へり、「往きて、汝等の聞き又見し所をヨハネに告げよ。瞽者めくらは見、跛者かたなは歩み、癩病人は潔まり、聾は聞き、死たる者は甦よみがへされ、貧者は福音を聞かせらる。凡そ我につきて躓かざる者は幸なり」と。(太十一。二一—二六)
さて彼等の去るや、イエスヨハネのことを群衆に語り始めたり。曰く、
汝等何を見んとて野に出しや、風に動かさる、葦なる乎。
然らば汝等何を見んとて出しや、柔かき衣を着たる人なる乎。
柔かき衣を着たる人は王の家にあり。
然らば何の爲に出し乎、預言者を見んとしてなる乎。

然り、我汝等に告ぐ、預言者よりも遙かにまされる者を、……

我實に汝等に告ぐ、婦より生れたる者の中に、未だ洗者ヨハネよりも大なる者は起らざりき、然れど天國の最も小き者も彼よりは大なり。(同十一。七一—七二)

我、今の代を何に比へん乎、恰かも小兒、街に座し、其仲間に向ひて呼はるが如し、曰く、

「我等は汝等のために笛を吹きたれども汝等は踊ざりき、

我等は哀歌を唱へたれども汝等は胸をうたざりき」と。

そはヨハネ來りて食はず、飲まざれば、人々彼は鬼につかたるものなりといふ。

人の子來りて食ひ、又飲みければ、人々彼は食を嗜み、酒を飲む人、税吏、罪ある者の友なりといふ。
然れど智慧は其業わざによりて義とせらるゝなり。(十一。十六—十九)

【注】 洗者ヨハネがヘロテ、アンテバスの爲に獄中に囚へられてゐたことは、ジョセファスの歴史にも傳へてゐる。但しジョセファスの歴史と聖書の記事とは此點につき多

少異なる所もある。

聖書の記事によればヨハネはヘロデに向ひ、彼が兄弟の妻ヘロデヤを娶つたことを責めたので其の爲に囚はれたとしてある。然るにジョセファスはヘロデがヨハネの勢力を嫉んだのであるとしてゐる。

ジョセファスによればヨハネはマケラス (Machabeus) の城中に囚へられてゐたのである。然るに此所にてヘロデの誕生の祝筵が開かれ、而してヘロデヤの女サロメが舞踏するといふやうなことが行はれさうにない。マケラスの城は死海の東岸にある邊陲の要砦である。故に是等の記事につきては疑問が起らざるを得ぬのである。

又ヘロデヤの女「サロメ」は此時既に北方の領主ピリビの妻になつてゐたのではなからうかと思ふ。

其は兎に角ヨハネが獄中よりイエスの所に使者を遣はしたといふことは信せられ易き記事である。而して其問題とした「メシヤは汝なる乎」といふことにつきては疑問がある。私は多分の審判者は汝なる乎」と尋ねたとする方が事實に近いと信じてゐる。「来るべきもの」といふ語は必しもメシヤを指すものでない。エリヤのことをも指した語である。

ジョセファスの所傳

(McNeile, St. Mt. p. 151)

ヨハネの理想はメシヤであつてもエリヤであつても兎に角審判をなすもの來るとである。然るに其審判者の來るとあまりに遅き故にイエスの意見を聞いたのであると思ふ。

「替者は見云々」とはイザヤ書(三十五。五其他)よりとりたる語である。其主意は人に單に審判のみを待つべきでない。神の愛の現はれを望むべきである。今や其力は既に現はれ、病者弱者が福音を聞き救はれつゝあるといふのである。

「預言者よりもまされるもの」とは預言者中最もまされる者との意であらう。而して其まさる所以をばイエスは其人格にありとせられたらしいが福音書記者は其時期と使命とにありとし、直接メシヤの前に出で、其道の準備をした故に尊いとしてゐるらしい。

「然れど王國に於て至小なるものも彼れより大なり」とは、福音記者の意によれば、彼は直接メシヤの前に出で「道の準備」をばなしたが、其道の成就した後に出なかつた爲に其恩典にはあづかることを得なかつたといふのである。但しイエスの意はヨハネの人格の大を以てしても、眞に神の愛を悟り、幼児の心を以て神に事ふる我弟子の大なるに若かずといふのであらう。

即ちイエスは教義によりて人間の大小を定められたのでない。其心情が果して聖化せられ、天國の小供となつてゐるか否かによりて定められたのである。如何に高德の人でも心に高慢あり不平あらば眞の高徳者ではない。

此の次ぎに馬太によれば「ヨハネの時より天國は暴力に襲はれ、暴力の者は之を奪ふ」云々とあるが、此語は意味不明の句である。普通には「人々勵みて天國を取らんとす、勵みたるものは之を得たり」と日本語譯のやうに解せられてゐる。即ち暴力とは熱心之を求むること兵士の進撃に似たことをいふ。然れど尙分り兼ねる語である。本書には省略して置いた。(路十六。十六參照)

「笛吹きたれど云々」といふは、小兒が其仲間のもものと共に、婚禮の遊戯をなす時、一方の人々は笛を吹くに、他の子供等が其れに應じて踊らぬといふことである。「哀歌を唱ふ云々」は葬式の遊戯である。共にイエス及びヨハネが、傳道し説教しても、現時の人々が之に共鳴せざりしことをいふのである。

「智慧は其業によりて義とせらる」とあるは他の原本及路加には「其子によりて義とせらる」とある。其意味は智慧の智慧たることは其働き又は其弟子の行爲によりて證明せ

られるとの意である。「其果によりて知るべし」と似た意味である。但し是には尙多くの異説がある。

第七 ナザレにて奇蹟多く行はれず

可 六。一—六
太 十三。五四—五八
路 四。十六—三十

聖書本文

イエス其所を去りて、己が故郷に來れり、彼の弟子も隨ひ行けり。安息日となるや彼會堂にて教へ始めたり。聞きゐたる多くの者、驚きていひけるは「如何にして此人に是等の事あるや」、「彼に與へられたる此の智慧は何ぞや」、「かつかゝる能力ある業彼の手によりてなざる」、「此はマリヤの子、ヤコブ、ヨセフ、ユダ、シモンの兄弟なる大工にあらずや、彼の姉妹も我等と共に在るにあらずや」と。かくて彼等彼について躓きたり。時にイエス彼等にいひき「預言者は其故郷、其親戚其家の外に於ては尊まれざるなし」と。(可六。一—四)

かくてイエス、少數の病める者に手を按き、彼等をいやせし外、何等の能力ある業をもなすこと能はざりき。イエス彼等の不信仰を驚き怪みたり。(六・五・六)

イエスの故郷

【注】 イエスはナザレに育つた人である。其誕生地はダビデの故郷ベツレヘムであるといふのが一般の傳説であるが、然し是は傳説に過ぎぬことかと思はれる。當時人々はナザレを彼の故郷としてゐたらしい。而して其ナザレの邑は甚だ小邑であつて、全く名のなかつた村らしい。舊約聖書中にも又ジョセファスの歴史等にも其名を見ぬ所である。但し其周圍には歴史上名高き場所があつた。特に風景のよい所である。北にある小山に登れば東にガリラヤ湖ヨルダン河、西に地中海、北に雪をいたゞくヘルモン山を、眺めることができ、今日でも旅客が一般に其風景を賞讃するのである。又東方近い所に大きな貿易道路が通じてゐて。北方ダマスコ其他と南方埃及及び地中海岸諸市とを連ねてゐた。従つて旅商人の團體が多く之を往來してゐたのである。然しナザレは直接此道に沿ふて居つたのではない。かくて其村は貿易等には全く關係のなかつた所である。(尙ナザレの地理につきては George Adam Smith, Historical Geography of the Holy Land 及徳富

健次郎氏著順禮紀行等を参照せられたし)

故郷の人々がイエスについて「マリヤの子に、あらずや」とか、「此力は何處より來りしか」とかいつたといふは、凡て一人がいつたといふ義ではない。別々の人が口々にいつたといふ意である。尙此記事中に、母の名のみありて、父の名のないは恐く、父は此時死んでゐたのであらう。

「力ある業」としたは、先きにも説明した如く原語は「力」で、之を奇蹟と譯するはよくない。

「大工」といふは「木工」(Wood-worker)の意である。木を用ひてなす凡ての勞作に従事するものである。

「なす」と能は「わらふ」(he could not)といふは馬可特別の語である。馬太傳には「なすわらふ」(he did not)となつてゐる。(但しモファット氏英譯には何故か馬太の文も「能はざりき」となつてゐる)

要するにイエスの奇蹟なるものは、神の恩恵とイエスの大なる人格の力によるものであるが、受くるものに信仰がなければ行はれぬものである。是等の事より考ふれば愈い

奇蹟と信仰

エスの奇蹟は精神的のもので器械的のものでないことが明瞭である。

第八、パリサイ人イエスを誣ゆ

可	三。廿二—三十
太	十二。廿二—卅二
路	十一。十四—廿三・同 十二。十

聖書本文

イエス啞なる悪鬼を逐ひ出しむたりき。悪鬼やがて出でければ啞ものいひ、群衆驚けり。(路十一。十四)

然るにエルサレムより下れる學者いひけるは「彼はベルゼブルにつかれたり」と又曰ふ「鬼の王によりて鬼を逐ひ出すなり」と。イエス彼等と呼び、比喩を以て語りたり、曰く、

サタン如何でサタンを逐ひ出し得んや。

若國自ら分れ争は、其國立つ能はず。

若家自ら分れ争は、其家立つ能はず。

サタン若自ら起ちて分れ争は、彼立つ能はず反つて滅ぶべし。(可三。廿一—廿六)

もし我ベルゼブルによりて鬼を逐ひ出さば、汝等の子は誰れによりて鬼を逐ひ出す

乎。然らば彼等は汝等の審判者とならん。(太十二。廿七・廿八)

人もし強き者を先づ縛るにあらざれば強き者の家に入り、其家具を掠むること能はず、縛りて後には其家を掠め得ん。

我に與みせざる者は我に反く。

我と共に聚めざりし者は散らすなり。

故に我眞に汝等に告げん人の子等の犯す所と其瀆すことは許されん。

然れど聖靈を瀆すものは許さるべからず。

反つて永遠の罪に定めらるべきなり。(可三。廿七—廿九)

誰れにても人の子に逆ひて言を出すとも彼許されん、然れど誰れにても聖靈に逆ひて言を出すときは今の世に於ても來るべき世に於ても彼は許されざるなり。(太十二。三十二)

【注】右の本文はパリサイ人の態度及其心事が如何に陋劣であつたか、又之に反しイエスの心事が如何に高潔であつたか、又彼の事業特に奇蹟なるものが如何なる性質のものであつたかを示すものである。

イエスは此文によりて明かなる如く自己の名譽權力の爲に傳道し又病人をいやしなどしてゐられるのではない。其は神の事業で、人を救ふ愛の至誠に基くものである。然るにパリサイ人は之を誣いて惡鬼の業とした。即ち彼等はイエスの名譽を惡み、其至誠に感ずる能はず却て彼の事業を以て人を害する爲のものとしたのである。依てイエスも彼等を厳しく戒め、神の業を惡鬼の業とし、善を惡と誣ゆるが如きことは人間の罪惡中最も恐ろしきことにて此の如きことをなす人々の靈性は既に永遠に滅亡に至りつゝあるものであると告げられたのである。尙此記事はイエスに對する反抗の愈烈しくなつて來たことを示すものである。

「逐ひ出しむたりき」とは直譯すれば「逐ひ出しつゝありき」(he was casting out)で、かりに斯くしたのである。

此記事の緒言として路加と馬太にはイエスが唾の惡鬼を逐ひ出されたことが記してあ

神の業と惡
鬼の業

る。馬可には此記事がないが、此記事に適當のこと、思ひたれば路加より一節を取つて此所に入れたのである。「下れる」は土地がエルサレムよりガリラヤ地方が低いからいつた言である。

「ベエルゼブル」(Beelzebub)といふは汚れの王といふ意で、サタンと同じものをさすので、所謂惡鬼の首領である。學者等はイエスを罵つて、普通の惡鬼ではない、惡鬼の首領が彼についてゐるといつた。「サタン」といふは昔は固有名詞でなく普通名詞で、天使の一種で人を訴へ人を苦しむる惡性のものであると思はれてゐた。ヨブ記の一章二章にあるサタンは其のやうなものである。然るに次第に固有名詞となり、惡鬼の首長の名となつたのである。尙ユダヤ人は其所謂「サタン」に他の名をも種々與へてゐた。

「汝等の子は云々」といふは、明かにパリサイ人をさすのである。パリサイ人中にもよく惡鬼を逐ひ出し得たものがあつたからイエスが斯くいはれたのである。是によりて見ても所謂奇蹟はイエス一人のみにあつたのでないことが明瞭である。而して此句は馬可傳にはないが、馬太と路加と同様に記す所を見れば所謂「Q」の資料中にあつたものに相違ない。

「神の靈によりて鬼を逐ひ出さば神の國は汝等に臨めり」といふは路加には「神の指云々」となつてゐる。而して此語が此の場所に記されてゐるが、元來「神の國」についての語である故、前章既に記載したれば、此所には省略した。

「人の子等の犯す罪云々」とある人の子等は明かに人間をさすのである。

又「人の子に逆ひて云々」の人の子は單數であり且冠詞も附せられてあることなれば是はイエスを指すものであること明白である。然らばイエスの語られた主意は次の通りである。「人もし我を了解せずして惡口をいふとも、其は其人に取りて大事にあらず、然れど愛の事業に對して惡口をいふものは其人既に滅亡の子である」と。

是によりて見ればイエスは決して自己に對する教義を以て其宗教の根本とせられたのではない。人我を預言者とするも、メシヤとするも其人に取りて、比較的小事である。我に於ては無論怒るべきことでも喜ぶべきことでもない。然れど我が赤誠より出で、神の聖善の力によりて行はれつゝある業を惡より出づるといふが如きは其人にとり其良心の滅び居ることを示すもので最も悲しむべきものであるといはれたのである。即ち自己を中心とせずして、神と其倫理的事業を主とせられたのである。イエスが自ら信する所高

許さるべき罪

許さるべからざる罪

かりしにも拘らず、如何に其の思想態度の公平純潔なりしかは、是によりて知ることができる。

「聖靈を瀆す」とは聖靈に對して惡口をいふ意にして、聖靈とは神の聖善の働きをいふ。三位一體などいふ教理は後に生じたものである故に、此聖靈に教理的意義があつたのではない事は明瞭である。然らば聖靈を瀆すとは聖善の神の力によりて行はるゝ事業に對し之に感動する能はず、之を譏ることをいふのである。

「永遠に救されず」とは以上述ぶる如く、人の間に行はるゝ善事に對して感動する能はず之を妨げ之を譏るが如きものは即ち良心の全く麻痺してゐるもので救はるべき見込みがないとの意である。自ら非を犯しつゝあるも尙愛と至誠の事業に對して感ずるだけの良心あらば彼は救はるべき希望資格のある人である。

第九 家族の者イエスを捕へんことす

可三。廿一廿一卅一卅五
太十二。四十六―五十
路八。十九―廿一

聖書本文

彼家に入る、群衆再び集り、爲めに食事することさへなし能はざりき。彼の家族之を聞き、彼を捕へんとて來れり。其は彼等「彼は狂氣せり」といひ居たればなり。(可三・廿・廿一)

かくてイエスの母と兄弟來る、彼等戶外に立ちて人を遣はし彼を呼べり。時に群衆彼の周圍に坐しゐたりしが、人々彼にいひけるは「見よ汝の母と兄弟と姉妹等、戶外にありて汝を求む」と。彼答へていふ、「我母、我兄弟とは誰ぞや」と、又彼の周圍に環り坐せる者を見ていへり。「見よ、之れ我が母、我が兄弟なり。凡て神の意を行ふものは我兄弟姉妹又母たるなり」と。(卅一・卅五)

【注】「家に入る」としたは、「家に歸る」(comes home)とした方がよいとの説が多い。但しイエスが果してカペナウムに自己の家(借家にせよ)を持ち給ふてゐたか否かは不明である。或はペテロの家を我が家の如くして居り給ふたかも知れぬ。「彼等彼は狂氣せりといへり」とある「彼等」は文法上よりいへば親族等をさすことなれど、事實に於ては他

の人々をさすのではなからうか。即ち「世間の人々が彼は狂氣せりといふてゐた」ので、家族の者が心配して捕へに來たのであるらしい。尤も家族等も同様に「彼は狂氣せり」と思つたに相違ない。而して此の數語は馬可傳のみにあるのである。イエスを親族のものが狂氣したと思つたといふ記事は餘程大膽なる書き方である。依て是は「イエス、ナザレに於ては多くの力ある業をなし能はざりき」といふやうな語と共に博士シユミール氏などが最も確實なる史的證據となる語であるといふのである。

尙イエスが「我が母とは誰ぞ云々」といはれたことは決して親子の關係を輕蔑せられたのではない。彼は「神への供物」と稱して、父母に與ふべきものを與へざるを甚しく怒り給ふたこともある。神の名によりて倫理的義務を怠るものを、はげしく責め給ふた。然れど人には最高の善がある。是れが爲には何物をも犠牲にせねばならぬ。而して其最高善を完ふることが、又萬事に忠なる所以である。イエスは神の使命に従ひ、其意をなすことは眞の孝行であると信じてゐられた。かくて彼は私情によりて公義を棄てなかつたのである。

父母に對する態度

第十 十二使徒の派遣

可 六。七—十三
馬太十。五—十五
路 九。一—六

聖書本文

かくてイエス十二人を呼び、二人づゝ遣はし始めたり。イエス彼等に汚れたる鬼を制する權威を授く、又旅するに一本の杖の外、何をも携へず、パン、旅囊及財布(帶)に金錢等をもつことなく、履をはき、而して二枚の下着をつくべからずと命せり、又イエス彼等にいひけるは「汝等何處にても或家に入らば、其地を去る迄其所に留まれ、若し又何所なりとも汝等を承けず、其人々汝等に聞かずば、其地を去る時彼等への警告として汝等の足の下につける塵を拂へ」と。かくて弟子等出で、人々に悔改むべきことを宣べたり。且多くの悪鬼を逐ひ出し、又油を注ぎて多くの病める者をいやせり。(可六。七—十二)

派遣の主意

【注】 イエスは、傳道の最初より弟子を招き、之を教育すると共に、傳道の手傳をなさしめ給ふた。而して其弟子の内十二人は特にイエスの信任せられたものであつた。イエスは此十二人を常に其傍に置き給ふたのみならず、時々之を他に傳道の爲に派遣せられた。此派遣は何時頃であつたか明了には知り得られぬが、イエスの傳道漸く人々の注意を惹くに至つた頃からで、而して恐らく一度あつたのみではなからう。又一度に十二人を派遣したといふのでもなからう。二人づゝ幾度にも其弟子を派遣せられたことかと思ふ、其主意はいふ迄もなく成るべく廣く福音を傳へんとせられたからである。

「派遣し始めたり」とあるは即ち是より後數度に分ちて派遣せられたことを示す語らしい。但し此「始めたり」といふ語は馬可の好んで用ひた語で、故に此「始めたり」との語に強い意味はないとの説もある。然れど爰に「始めたり」とあるは派遣が十二人一度でなかつたことを示すものらしい。(Gould; St. Mark p. 106)(Plummer; St. Mark p. 159) イエスの派遣命令には何等儀式的のことはない。弟子等を教職に就かして而して派遣するといふやうな意義は毛頭ない。而して其箇條は何れも當時の事情に照して傳道者の心得となるべきことを命せられたに過ぎぬ。

命令の意義

金銭、旅囊等を持つことを禁せられたは、無用の準備に心を奪はれ、大切なる目的を忘却してはならぬ爲である。

財布としたは帯のこと、帯の内に金銭を入れて旅行するが當時の風であつた。但し袋になつた財布もあつた。

金銭と譯したは「真鍮」である。真鍮又は銅にて造れる貨幣が當時一般に行はれてゐたので、其れをいふのである。尙路加傳には銀とある。銀貨は稍大金である故日用の小使には稀に用ひられたのである。

杖を持つことを許されてゐるは馬可のみであるが是は持つても持たずともイエスが左程意にかけられたものではない。要は能ふ限り無用のものを持たぬことである。「履をばく」云々も馬可のみである。履としたは實は鞋わらじのことである。棕櫚の皮を以て造つたものである。但し鞋といへば今日の日本にては平素用ひぬものである。然るに此ユダヤ人の鞋は平素用ひてゐたものである。故にかりに履としたのである。

「一枚の外衣を着るべからず」といふは普通の着物の外に長き外衣を着てならぬとの意、普通の着物といふは日本の着物に似てゐる。普通人は之を一枚着てゐたのである。然る

に富有の人は其上に羽織の長いやうなものを着てゐた。イエスは之を着る必要がないと語られたのである。尙他の福音書には「一枚の外衣を持ち又は得る勿れ」としてある。同じことではあるが、馬可の方が適當であると思ふ。

尙之は文法上のことであるが、馬可は始め間接法を用ひて命令の簡條を數句記し、而して最後の「一枚の外衣云々」のみを直接法にて記してある。即ち「杖の外何をも持にぬやうに……命じ」(he charged them that they should take nothing……)とあると同時に最後の句は「着る勿れ」(“do not put on two coats”)となつてゐる。依て英語改正譯には此最後の句に「といへり」(he said)との一語を加へて居る。

「或家に入らば出づる迄其家に止まれ」といふは、何處にても迎へられたる家に満足して居り安りに他の家を求めて移りてはならぬとの意、當時宗教的旅行者をば特に歓迎する風があつたのである。イエスの如きも大抵何處に旅行しても宿には苦しみ給はなかつたやうである。

「警告」として云々としたは原語にては「證據又は證明 (for a testimony) として」とあるのである。「證據又は證明」は廣く用ひられる語であるが、此所にては彼等が滅びるとの

證明を彼等に與へるとの意である。故に「警告」としたのである。尙其次に「彼等にまで」(unto them, not against them)としてある故に、是は決して彼等を神に訴へ、又は呪つた意味ではない。彼等に對する注意の爲との意と思ふ。「足の下につける塵を拂ふ」といふは彼等の不信仰に於て關係はない、其罪は自ら受くべきものであるとの意味を示したものである。但し是に神學の意味があるのでなく、又イエスは必斯くせねばならぬと命ぜられたのでもない、若し汝等承けられなかつたならば、警告を與へて斷然去れといはれたのである。

「油をそゝぎて云々」とあるは又馬可特別の記事である。病人に油をそゝぐこと當時一般の風であつたかと思ふ。但しイエスが病めるものをいやすに、油をそゝぎ給ふたことは記されてない。要するに病をいやすに必要なことは病人に神の愛を信せしむることにあつた。斯くて油をそゝいだのは神の愛が其人の上にそゝがれるといふ記號であらう。茲に説教のことが記してないが、併し彼等が「神は近し」との説教をなしたことは明かである。此福音を傳ふることが此派遣の主たる目的であつたことはいふまでもないことである。

第十一 七十人の派遣

路 十。一―六
太 九。三十七・三十八
同 十。十二・十三

聖書本文

さて是等の事の後、主、他の者七十人を任命し二人づゝ、彼が自ら至らんとする各邑各處へ前に遣はせり、而して彼等にいひけるは「まことに收穫は多し、されど働く者は少し、故に働く者を收穫に、急ぎ遣はすやう、收穫の主に願へ」と。(路十。一一―一二)

往けよ、我汝等を遣はす、汝等は狼の中に於る小羊の如し。(一三)
財囊、旅袋、履をも携ふる勿れ、途にて何人にも挨拶する勿れ、如何なる人の家に入ることも汝先づいへ、「此家に平安あれ」と。若し平安の子其所にあらば、汝の平安は其人の上に止まらん。若しなくば其平安は汝に歸らん。(四―六)

【注】 さて此七十人の派遣は路加傳のみに傳へられる所で、馬太馬可には見えぬ。又其場所はペレア(ヨルダン河の東部)としてあれど、馬太馬可にはかゝる傳道が、ペレア又はユダヤ地方で行はれたやうには記して居らぬ。

想ふに若し是れが行はれたとすれば、恐くガリラヤ傳道中のことであらう。且七十人といふは正確なる數ではなく。十二人以外他の多くの弟子が傳道に派遣せられたといふ意に過ぎぬと思ふ。イエスは十二人の弟子を特に選ばれたが、必しも十二人以外には弟子を選ばぬといふ意志ではなかつた。最後の旅行中、一度遇つたのみの富める少年をさへ弟子としエルサレムに伴ひ往かんとせられた。又十二弟子以外バルナバの如きは早くよりイエスに従ひ、又彼に愛せられた弟子に相違ない。要するに十二人の弟子を特別に區別するは稍後の思想であらう。

「七十」の數はユダヤに於ける圓滿なる聖き數である。モーセの選んだ長老が七十人であり、又所謂サンヘドリンの議員が七十人である。又世界の民族は七十に分れてゐると思はれてゐた(創世記十)。かゝる習慣からイエスにも七十人の弟子があつたやう想像せられたのである。尙或原本には「七十二」とある。古來「七十」と「七十二」と混同せら

れ易い數であつた。多分「七十」の方が正しいのであらう。

十二人の使命は永久的であつたが、七十人の使命は一時的であつたとの説もあるが、かくの如き差別があつたわけではない。イエスが十二人を職業的傳道者となされた様子は見えぬと共に又他の者は彼等と區別せらるべき使命を有つてゐたとは傳へられぬ。教師と平信徒との區別は確かにイエス死後のことである。十二人も七十人も又イエス自身もいはゞ皆平信徒である。

「收穫は多し」云々は馬太傳には十二使徒派遣の時に記されたる語である。當時の諺かとも思ふが兎に角イエスの主意は福音を求めてゐる者の多いことをいふのである。「急ぎ遣はす」としたは「遣はす」といふ語が、意味の強い語で「逐ひやる、急ぎやる」といふやうな語である、故に、かく意譯したのである。

「狼の中に於ける小羊云々」は反對者の多いことを示した語である。前節の語に示された如く、福音の要求者も多いが、反對者も多い。是はガリラヤ傳道の中頃の狀態に適合するかと思ふ。

「平安を祈れ」は馬太傳を見れば「挨拶せよ」となつてゐる。是は同じことである。何人

に對しても其人の平和、幸福を祈るはイエスの弟子たる資格である。「途にて挨拶する勿れ」とは形式的禮儀によりて無用の時を費す勿れとの意である。

其他イエスが弟子派遣に際して與へられたと傳へらるゝ句が尙二三ある。異邦の途に往く勿れ」云々も其一である。但し是はイエスが決して異邦人を輕蔑したのではない。先づ傳道の範圍を便利上制限せられたに過ぎぬ。

「犬に聖き物を與ふる勿れ」云々も弟子に對し傳道の心得を語られたものかと思ふ。犬といふは斷じて異邦人とか罪人とかいふ意ではない。犬といふは「高尚なる理想に對し要求の心を有せざる者」この意である。神を求むる要求心なきものに、神を語ることも何の益をもなさない事を教へられたのである。但其要求は何人ももつてゐる、只多くの人は之を明かに自覺して居らぬ。是れが所謂人にして尙犬の如き境遇にあるものである。故に傳道者の職務は其眠れる要求心を覺醒するにある。

第十二 天父の保護

太十。廿六—三十一
路十二。二一七・三十二

聖書本文

何物も掩れて顯はれざるはなく、隠れて知れざるはなし。

我が暗黒に於て汝等に告げしことを、汝等光明に於て語れ。

耳をつけ聞きしことをば、屋根の上にて宣べよ。

身を殺して靈を殺すこと能はざるものを恐るゝ勿れ。

靈と身を地獄に滅し得るものを恐れよ。

二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然れど汝等の父によらずしては、其一羽も地に落つることなし。

汝等の頭の毛皆數へらる。

然らば恐るゝ勿れ、汝等は多くの雀よりもまされり。(太十。廿八—卅一)

小さき群よ、恐るゝ勿れ、そは汝等の父は喜びて國を汝等に與へ給ふべければ也。

(路十二。三十二)

【注】「地獄」としたは原語「ゲヘンナ」(Gehenna) といふので、もとヒンノムの谷といふ

義である。エルサレムの南西に不潔物を焼く谷があつて之をヒンノムの谷といふ。是に基き死後罰せられる所をもヒンノムの谷といつたのである。

「一錢」としたは「一アツサリオン」といふので、我國の二錢計りにあたる。即ち「デナリ」の十六分の一である。

「父によらずして」は「父の御旨によらずして」の意である。

「頭毛皆數へらる」とは人間のことにつきては小事でも神よく知り給ふとの意。

右の教訓は何時、何處に於てなされたものか明了でない。馬太傳によればガリラヤ傳道中十二使徒派遣の時に與へられたものとしてある。然るに路加傳によれば、ペレア傳道中弟子等に與へられたものとして記してある。想ふに是はイエスに對する反抗の氣勢愈強く、迫害漸く激烈になつて來た頃のもので、ガリラヤ傳道の後期であつたに相違ない。兎に角最も力強い獎勵の教訓である。

「小、さ、き、群、よ、云、々」は、馬太にも馬可にも見えぬ句であるが、イエスが勝利の約束を弟子等に與へられたるもので甚重要な教訓である。依て此所に入れたのである。其内に「國を與ふ」とあるは「主權を與ふ、勝利を與ふ」といふやうな意義の語である。

第十三 イエス群衆に食せしむ

可 六。三十一—四十二
太 十四。十三—廿二
路 九。十一—十七

聖書本文

かくて使徒等イエスの許に集り、彼等のなせしこと及び教へしことを凡て彼に告ぐ、イエス彼等にいひけるは「寂しき所に往き、暫く休めしむ。即ち彼等密かに舟にて寂しき所に至れり、然るに群衆彼等の往くを見、之を知りて、町々より出で、陸を歩み、馳せゆきて彼等に先ち、其所に至れり。イエス出で、夥しき群衆を見、彼等が牧者なき羊の如くなるを憫み多くの事を教へ始めたり。(中略)(可六。三十一—三十四)

かくてイエス弟子に命じて、人々を組々に分ち綠草の上に横臥せしめぬ。人々乃ち百人又は五十人づゝ、規律正しく臥せり。かくてイエス五つのパンと二つの魚を取り、天を仰ぎ、祝し、而してパンをば、くだきて、弟子にわたし、之を人々の前に置かしむ。又二つの魚をも、彼等凡ての人々に分てり。かくて人々皆食して飽きぬ。(可六。

三十九—四十二)

【注】「使徒等云々」とは所謂「十二人」中の數人等が傳道より歸つたのである。使徒(The Apostles)といふは單に使命を傳ふるのみならず、其派遣者を代表する者をいふのである。

「陸を歩み」とあるはイエス等が舟にて東岸に行かれしを見、群衆は北の岸を廻りて其所に達したることである。

「綠草の上」としてあるは特に注意すべきことで氣候が初春の頃であつたことを示すのである。

「規律正しく」としたは原語にては「花壇(Garden beds)の如くに」とある。即ち花園に草木が規律正しく植ゑられてあるやうに、人々が規律正しく組々になつて列び臥したのである。

「パンをくだく」としたは妙な譯語のやうであるが、ユダヤ人のパンは堅くして、引き裂くことはできぬ。故に之を割る又はくだく(Break)のである。

福音書記者の主意

さて此奇蹟をば如何なるものと考ふるが最も誤りのない解釋であらうか。是は多く病者をいやされたものとは大に異つてゐる。

想ふに福音書記者の是を記した一の目的はイエスがモーセよりも、エリヤよりも大なる奇蹟即「休徴」を與へられたといふことを傳ふるにあるらしい。モーセは野に於てマナを天より降らせて人民に與へ、又エリヤは貧しき婦の爲に、其粉と油とを食へども食へども盡きぬやうになしたといふ。イエスの奇蹟は是に似て更に大なるものであつたといふが、記者の主意らしい。

福音書記者が此物語を傳へた目的は尙他に一つあつたらしい。其れは之を以て神の國に於ける大饗應の型として傳へんとしたことである、従つて是は晚餐式と同様の意味を含むのである。初代教會に於ては神の前に共に食をなすといふことを重んじ、毎日曜日晚餐を守つた程である。是れも其れと同様の意味で行はれたものとするのである。

以上二つの目的中、第一の「休徴」として之を傳へることは恐く事實に反し、又イエスの主義にも背くものである。何故とならばイエスは外形的休徴を與ふることをば、斷然拒絶せられたのである。然らば第二の目的即ち「晚餐式」として之を傳ふることは果して

事實に合し、又イエスの精神に適ふや否や是につきては孰れとも斷言し兼ねる。イエスもユダヤ人で、又時に記號的行爲もせられぬではなかつたであらう。故に特に斯く行ひて、神との交通(communion with God)を経験せしめんとせられたかも知れぬ。

蓋し實際の事實は次の通りであつたかと思ふ。其の聖書の傳ふる如く、此時食物を携ふるものが少かつた。全くなかつたのではない。少年が五つのパンと二つの魚をもつてゐたは其一例である。而してイエスは其少年のさげたパンと魚とを取り、之を祝福して其周囲の數人に分ち與へ、是によりて互に愛を分つのみならず、神との交りに入らしめんとせられた。此例に倣ひ他のものも、其もてるものを、もたぬ者に分ち而して神の國に於ける饗應を思ひ浮べつゝ喜んで食を共にしたのであらう。「食ひて皆飽けり」又「其屑十二の籠にみてり」といふは記者の入れた句で他は歴史的事實であらう。

其他に是は説教であつたものを、事實と誤り傳へたとの説もある。然れども其れは恐らく間違で、イエスが多くの弟子等と、食を共にせられたといふことは事實であらう。又同様のことが今一度行はれたとする馬可傳の記事は恐らく誤りである。其はタトへ多くの人々とイエスが食を共にせられたことは他にもあつたとしても、同様の順序で、同様の

説教なりし
乎

方法を用ひてせられたといふことがイエスの如く形式に拘泥せぬ方にあつたとは信せられぬ。

又人數を「五千人又は四千人」とするは大要の數で正確にいへば其れより遙かに少數であつたに相違ない。

尙五千人饗應後の記事(可六。卅一以下太十四。十三以下)と四千人饗應後の記事(可八。一一廿六、太十五。卅二一十六。十二)とは重複してゐるやう思はれる。其の爲か路加傳は四千人饗應の記事を略し兩者を一にしてゐる。(McNelis, St. Mt. p. 287)

第十四 ガリラヤ諸邑に對する警告

太 十一。二十一—廿二
路 十。十二—十五

聖書本文

さてイエス、力ある業の多く行はれたる邑々を責め始めたり。之れ彼等悔改めざりし故なり。曰く

禍なる哉、汝コラジンよ、禍なる哉、汝ベツサイダよ、

第五章 第十四、ガリラヤ諸邑に對する警告

汝等の内になされし力ある業、ツロとシドンとの内になされしならば、彼等は早く粗衣(喪服)を纏ひ、灰に坐して悔改めしならん。

然れば審判に於てはツロとシドンは汝等よりも堪へ易からん。

カペナウムよ、汝天にまで擧げらるべき乎、否汝は陰府に落さるべし。(太十一。廿一。廿三)

【注】以上の語は馬太、路加共に記すことより見れば、「Q」の資料に基くことが明了である。而して路加傳は七十人の派遣と共に之をベレア傳道中に入れて居れど、七十人の派遣が恐くガリラヤに於て行れた如く、此語もガリラヤに於て發せられたものと思ふ。其語中にあるベツサイダ及コラジン等凡てガリラヤの地名であることより考ふるも確かに左様思はれる。即ち是はガリラヤ傳道の終り頃語られたものに相違ない。

ガリラヤ人等は前段既に研究した如く、一時盛んにイエスを歓迎したのである。然るにイエスの傳道が、自己の欲望する所と異なる爲に、漸次イエスを厭ひ始めた。遂にパリサイ人等に與みしてイエスを迫害するに至つた。此語は即ち其状態を見てイエスの語ら

れたものと思ふ。

コラジン、ベツサイダ、カペナウムは、皆ガリラヤ湖畔の市邑である。かゝる地名を呼んで語られたは此地方のガリラヤ人をさす詩的の語である。

「粗衣を纏ひ灰に坐す」とは喪の時などになす悲痛の状態である。

「天に擧げられんや云々」は、或原本には「天にまで上げられしカペナウムよ云々」となつてゐる。舊日本語譯聖書は其れに基いたのである。但し是はよくない。故に改めたのである。

「ツロとシドン」は異邦人である。ユダヤ人の輕蔑してゐた民である。

第十五 イエスの感謝

太 十一。廿五—廿七
路 十。廿一。廿二

聖書本文

其時にイエス語りていひけるは、

「我汝を讚美す、天地の主なる父よ。

第五章 第十、イエスの感謝

それ汝は是等のことを智者學者に隠くして嬰兒に現はせり。

然り、父よ、斯の如きは汝の前に喜ばるゝことなればなり」

「一切のものは、父より我に委ねられたり、父の外に子を知るものなく、

子及び子の現はさんとする者の外に父を知るものなし」と。(太十一・廿五—廿七)

【注】以上の語は前節の「ガリラヤ諸邑に對する悲嘆」の語の續きで、共に「Q」資料より採つた文章である。而して是は前者がガリラヤ人の不信仰を悲嘆せられたに反し、弟子等の忠實なる信仰を喜ばれた語である。想ふにイエスは一方に於てガリラヤ人の不信仰に對しては少からず失望せられたるに相違ない。然れど又他方に於て少數の弟子等が不十分ながらも神の愛を信じ、忠實に其旨に従はんとしつゝあるを見て、大に喜ばれたのである。かくてガリラヤ傳道も決して失敗ではなかつたといふ自覺を有せられてゐたに相違ない。

「其時云々」は詳しく譯せば「其期に於てイエス答へていひけるは云々」とすべきであるが「其期」及び「答へて」の事情明了ならざれば本文の如くに譯したのである。

「嬰兒」とは赤子 (babes) の意、謙遜にして柔順なる心をもつものをいふのである。イエスが彼等の信仰を喜び、彼等にのみ神及福音の主意が了解せられたといはれたことは眞に尊むべきことである。

「一切のものは我に委ねられたり云々」以下は前の語ほど單純な句ではない。但し「一切のもの」といふは萬物の支配權といふのでなく、一切の宗教的智識といふ意味である。「父の外に子を知るものなし」といふはイエスの貴き人格と其使命をば人々が了解し得ぬとの意である。但し此句につきては種々の異論がある。ハルナツク教授は之を後の挿入として本文中より省略してゐる。

「子及び子の現はさんと欲するもの外に父を知るものなし」といふ句は、前の「赤子に現はし給ふ」といふ句と關係ある句で比較的信せられ易いのである。(Harnack's sayings of Jesus) (Gilbert's Jesus p. 144) (McNelle, St. Mt. p. 27)

想ふに「Q」資料はイエスの神秘的智識を重んじたる故にかゝる句を載せたるものであらう。此記者は贖罪論をばせぬが、イエスを心靈的預言者 (spiritual prophet) とし、又其權威は父を知り、又父を人に示す點にありとしてゐる。

ヨハネ神學の發達は此思想に負ふ所が多い。ヨハネ傳記者もイエスを心靈的教師所謂「神より遣はされたる師なり」とするものである。又永遠の生命とは父及び其子を知ること、即ちイエスの心靈的知識に通ずることであるといつて居る。斯かる思想は「凡てのもの(知識)は我に委ねられたり、……子及び子の現はすもの外に父を知るものなし」どの句と、最も近い關係があるのである。尙イエスの自覺につきては後に研究するつもりである。

第六章 弟子の訓練

概 説

イエスの傳道はガリラヤを中心とするものであつたことは前章既に説明した通りであるが、其ガリラヤ傳道を何故にやめてエルサレムに向はれたかといふことにつきては尙不明の點がある。即ち是は反對の氣勢強くなりし爲に止むを得ず中止せられたのである乎、或は又一と通りガリラヤ傳道をなし終へたので之をやめて他に轉せられたの乎、或は又中止したのでなく、完結したのでもないが、「すぎこし節」が來たので、此機會を利用してエルサレムに上り、其所にて傳道せんとして上京せられたのである乎。是等のことにつきては聖書は明了なる説明を與へて居らぬ。但し聖書の記事によりて見れば、反對の氣勢の甚強くなり、再び以前の如き傳道をなすこと能はざるに至つたことは事實らしく、又イエスが此ガリラヤ諸邑を一通り巡回し、最初の計畫だけは略ぼなし終へられたやうにも見える。而してエルサレム行は充分の覺悟と準備を以てせられたやうであ

ガリラヤ傳
道中止の理
由

エルサレム
行の準備

る。故に「すぎこし節」が来たので、急ぎ上京したといふのではないらしい。

エルサレム行の準備としてはイエスは先づ弟子等の信仰をよく養ふことを努められた。彼は是れが爲に弟子をつれて人を避け、彼等が活動の中心であつたガリラヤ湖畔の地方を去つて、北方の地に旅行せられた。而して其旅行の地を馬可傳は、ツロ、シドンの地方及カイザリヤ、ピリビの近傍であつたとしてゐる。

ツロ、シドンの地方といふは、地中海の沿岸でガリラヤよりは西北にあたる地である。此地とは昔から交通のないことはない。其人種はユダヤ人と相似た民である。然れど全く歴史的、社會的事情を異にしてゐる國である。所謂純異邦人の國である。

カイザリヤ、ピリビはガリラヤの北東で、ヘルモン山の屹立してゐる地方である。此地はヘロデ大王の子ピリビの支配してゐた地で、比較的パレスチナとは關係の深い地である。ガリラヤ湖北部にあるベテサイダ、コラジン等よりカイザリヤまでは、僅かに三十哩計りを隔つるのみである。一日路を行けば其近くまで達し得るのである。故にイエスが弟子をつれ、教養の爲カイザリヤ、ピリビの地方へ旅行せられたといふことは最も信じ易いことである。然るにツロ、シドンの方へ旅行せられたといふことは、之に比すれば甚だ信じ難いことである。尙聖書記事について見るに、カイザリヤ、ピリビ地方の旅行中にはベテロの信仰告白、受難の預言、變貌等重要なる記事があるが、ツロ、シドン地方の旅行中には異邦人たる信仰厚き婦人に遇ひ、其娘を癒やされたと、いふことの外にはない。尙路加傳記者は此記事を凡て除いて居る。かくて此事實を疑ふ人がある。但しガリラヤの北部、フニシヤの近くまで、行かれたのであるとすれば、大なる困難はない。

其は兎に角、イエスが弟子教養の爲に北方の地方に旅行せられたことは、明了確實なることである。然れど其れがカイザリヤ、ピリビの地方のみであつたか、又はツロ、シドンの地方にも往かれたかは、明了でない。又其は重なる問題でもない。

さてイエスが此旅行中弟子に要求せられたことは自己に對する絶対的信任和、パリサイ人の迫害に對する犠牲的覺悟である。従つて此期間に於てイエスの弟子に與へられた教訓は、實に懇篤親切であつたと共に又甚しく嚴肅壯重なるものであつた。イエスはガリラヤ傳道の終り頃よりして、反對の氣勢愈盛んなるを見て、犠牲献身の覺悟が必要なることをば弟子等にも告げてゐられたが此期に至り、イエスは愈死を決せられしもの

弟子の信任
と覺悟

の如く、又弟子等にも一層強固なる覺悟を要求せられたのである。

イエスは元來奮闘の人で、反對に遇つて勇氣を失ふ人でない。却て愈其精神を固くすると共に又愈其使命の重大なることを感ずる方であつた。故に此時期に於て最高の自覺と最大の元氣とを得られたのである。かくて共觀福音書(主として馬可傳)は此時を以てイエスのメシヤ的宣言の時機とするのである。

イエスの自覺に進歩發達があつたか否かは現今學者間の一問題である。或學者は馬可傳の記事に基き、イエスのメシヤ的自覺は漸次發達したもので、此北方旅行の時に至りて愈完成したものであるといふのである。此説は最初よりイエスがメシヤ的自覺を有せられたといふ説よりは、確かに歴史的事實に近い議論であると思ふ(Holtzmann's Life of Jesus 参照)。歴史上に於けるイエスには確かに進歩もあり變化もあつたに相違ない。死の覺悟の如き漸次成長したものである。但しイエスの根本的主張に變化があつたであらうか。彼の自覺にも變化があつたであらうか。是は容易に決定し難い問題である。イエスが初めよりメシヤ的自覺を有してゐられたといふ説と同様、イエスが中途に於てメシヤ的自覺に達せられたといふ説は尙批評を要するものである。

イエスの自覺

メシヤといふ思想は序論中にも述べた如く歴史的事情に基き發達し來つた思想で、又多くの教義を伴ふものである。其内には深い宗教的經驗に基く活ける信仰もあるが、大體より見れば其は確かに舊い思想の型に過ぎぬ。故にイエスが自己の經驗及び自覺等をいひ表はすに果して、かゝる舊き型を用ひられたのであらうか。若し果してメシヤなる語を用ひられたとしても其メシヤは全く新しき意義のものであつたに相違ない。メシヤであつてメシヤでないものである。故に其メシヤといふ名は無用のものである。元來イエスが常に「我をメシヤと人に告ぐる勿れ」と命せられたことは明了だが、我はメシヤなりとの宣言をなされたといふことは其れ程明確でない。

然らば弟子等の信仰は如何。彼等はイエスほどの獨創家でなかつた。故に舊き教義、舊き觀念によらねば考へることも信ずることもできぬ人々であつた。故に好んでメシヤといふ語を用ひた。彼等はイエスを説明するに是非此語を要したのである。故に弟子等がイエスをメシヤとしたことは明了であるが、イエス自身メシヤとせられたか。否かは疑はしい。恐くイエスは自らメシヤであると公言せられたことなく、又思ひもせられなかつたと思はれるのである。

弟子等がメシヤとせし理由

然らば何故に弟子等が、其師より聞かざることを信じ、而かも是を中心として後に教をなすに至つたか、イエスと弟子との間に全く連絡を欠ぐでないかとの批難がある。

是はいふまでもなく、イエスの人格の崇高なりしこと、及び其自覺の偉大なりしことによるのである。彼は當時の人々がメシヤとして理想した以上に大なる人格であり、又大なる自覺を有した人であつた。

イエスはヨナより大なるもの、ソロモンより大なるもの、婦の生めるものの内最大なる預言者ヨハネよりも大なる者との自覺があつた。又「凡ての知識は我に委ねられたり、子及び子の表はす者の外に父を知るものなし」との語にも表はれてゐる如く偉大高尚なる自覺を有せられてゐたのである。尙彼は地上に於て貧しき者弱き者罪人等の友となり彼等の爲に奮闘することを以て、天にありて神に奉仕する天使等よりも大なる使命と信じてゐられたるに相違ない。最後の審判に於て何者が其座につくかは明かでない。神御自身か天使か所謂メシヤか其れは大なる問題でない。然れど其審判の標準となるは我が人格と我が主義精神にあると信せられた。茲に教義ならざる偉大なる信仰があつた。是が弟子等に傳へられるに及び教義の型を取るに至つたのではなからう乎。

尙弟子等がイエスをメシヤとして眞に信仰するに至つたは、其死後「甦り」を経験した以後である。パウロも「其甦りしことによりて明かに神の子たること現はれたり」といつて居る。故に甦られざりし以前、果して弟子等がイエスをメシヤなりと、信じたか否かは疑問である。

ペテロを始め少數の弟子等が、ガリラヤ傳道の末期、北方旅行中に於てイエスに對し最高の尊敬と絶對的信任を捧げたことは事實であらう。但し「メシヤなり」と告白したとの傳説は疑問である。

要するにガリラヤ傳道を終り、新しくユダヤ地方に向はれんとするに當り、イエスが弟子を隨へて北方に旅行せられた時は、イエスの思想も人格も最高調に達した時である。本章には此時期に於ける記事及び教訓を集めんとしたのである。但し聖書の其時期についての記録は甚だ簡短で、其旅行の如きも如何なる順序を以てなされたか明記してない。其間の教訓の如きも甚だ粗略である。依て聖書の順よりいへば他に入るべきものも、二三此内に入れてある。斯くして、此時期に於ける氣分を幾分にも明確に知り得んとしたのである。

尙本章に載せた聖書本文中には「人の子」といふ語が多く用ひられてゐる。而して其れがメシヤ問題と關係する故に今其意義を簡短に述べて置きたい。

「人の子」といふ第一の意義は「人」といふ義である。アラマイック語にては人類といふ意義以外にはないといふことである。聖書にも人として用ひられた所が少くない。詩篇に於ける左の如き語は其一例である。

「人は如何なるものなれば是を聖意にとめ給ふや、人の子はいかなるものなればこれを顧み給ふや」(八〇四)

尙福音書中にも單に人間といふ意で用ひられた所があるかとも思はれる。

「安息日は人の爲に作られたるものなり、然らば人の子は安息日にも主たるなり」とある「人の子」は「人」と同義かと思ふ。

然るに其「人」なる意義の文字が、後に「メシヤ」といふ意義になつた。其由來はダニエル書(七。十三)に、バビロン、ベルシヤ等の王國を獸に譬へ、メシヤ王國を人間即ち人の子に譬へたことである。其れより人の子といへばメシヤのこととなつたのである。

エノク書といふは福音書と略ぼ同時代にできた書であるが、「人の子」をメシヤの意義

に用ひてゐる。而して其「メシヤ」は人間でなく、天より、人の形 (appearance of a man) を以て降るものである。故に人間ではないが、人の子といふのである。

福音書は主としてエノク書と同様の意味を以て人の子といふ語を用ひて居る。即ち「メシヤ」の意義である。尙福音書は特別に左の二つの意味を附隨せしめ此語を用ゐてゐるらしい。

一は榮光の姿を以て來る (future coming in glory) といふ意味である。是はダニエル書エノク書等に由來するのである。故に再臨のことをいふ時には、多く「人の子」といふ語が用ひられてゐる。

二は謙遜 (humility) の意である。「人の子は多くの苦難を受け云々」とあるは其一例で、「人の子」といふ場合には賤しき生活をなし、多くの苦難を受けるものといふ意味を含んでゐることが多い。

尙福音書には單にイエスの自稱として「我」といふ意の外何の意味なく用ひられてゐる所が多い。馬可傳に「我をいひて誰とするか」とあるを馬太にては「人の子をいひて云々」としてゐる。此の「人の子」は「我」と同意義に相違ない。若し是れが「メシヤ」といふ意な

らば「メシヤをいひて誰れとするか」といふことになりて、意義をなさぬ。然らばイエスは單に「我」といふ意で「人の子」といふ語を用ひられたであらう乎。是は信せられ兼ねることである。イエスの「我」と呼ばれた所に記者が「人の子」といふメシヤ的稱號を入れたものと思はれる。

尙此語は福音書以外、他の書即ちパウロの書翰、ヨハネ傳等には用ひられて居らぬ語である。是は福音書が一層エノク其他の所謂「黙示文學」(Apocalyptic Literature)に感化せられた爲であらう。是によりて見ても福音書は決して單純にイエスの事實を其まゝ寫したのではない。當時の文學に感化せらるゝ所があつて其言語思想を用ひて記したことは明白である。

第一 躊躇せし弟子

〔路 九。五十七—六十二〕
〔太 八。十九—廿二〕

聖書本文

彼等路を行く時、或人イエスに曰へり「何所にもあれ我汝に隨はん」と。イエス彼に

いへり。

「狐は穴あり

空の鳥は巢あり

然れど人の子は枕する所なし」と。(路九。五十七・五十八)

イエス又他の一人にいひけるは我に従へど。然るに彼いひけるは「先づ行きて父を葬ることを許せど、イエス彼にいひけるは、死者をして其死者を葬らしめよ。汝は往きて神の國の福音を傳へよと。(九。五十九・六十)

又他の者彼にいひけるは「我汝に従はん、然れど先づ我家族に別を告ぐることをゆるせ」と。イエスいひけるは手を犁につけて後を顧るものは神の國に適せざるものなり。(九。六十一・六十二)

【注】 以上の記事は馬太傳によればガリラヤ傳道の初期にあつたことである。然れど路加傳によればガリラヤ傳道を終りイエスがヨルダン東方の地を旅行しつゝあつた時のことである。従つて其時期を確實に定めることはできぬ。

然るに尙是を茲に入れたは、終りまでイエスに従つた弟子は弟子中に於ても特別に勇氣のあつたものであることを示さん爲である。多くの弟子等はイエスの教訓と其事業の尊きことを知つてゐても一身をさへげて彼に従ひ、其傳道に参加することをばなし得なかつたのである。

而して此文中にある問答は凡て口實を設けてイエスの命に従はざらんとしたので、イエスは嚴しく之を戒められたのである。是れが大主意で、其他一々の言葉には左程肝要なる意味はない。但し茲に稍不明なるは「父を葬ることを許せ云々」の語である。

此弟子が「父を葬ることを許せ」といつたこともイエスが「死人をして其死人を葬らせ」といはれたことも主意は明瞭である。即ち弟子は家庭の事情を口實としてイエスの命を避けたのである。然るにイエスは之を見破り、斷然我に従へといはれたのである。此主意の外には何もないが、其口實にした「父を葬る」といふは如何なる事か、實際父が死んでまだ葬式が済んで居らぬとの意か、又父が老年である故彼が死する迄他に行けぬとの意か明瞭でない。但し是れが口實であることは前後の文意で明かである。イエスの「死者をして其死者を葬らしめよ」といふ語も不明ではあるが、其意は即ち「つまらぬ形式

卑怯者の口實

「父を葬る」の意義

や事情に捕へられず、新しき活ける働きに従へ」との意である。人間は死んだ人となり死んだ事業にのみ従事してゐては役に立たぬ。活きた人となつて活きた事業に従事せねばならぬ。父母に孝行をつくすことは肝要である。然れど形式的孝行に拘泥して大なる使命を棄て、はならぬとの意で、多くの注譯者は此句を解して「死者の葬式は不信者ばかりにさして置けばよい」といふ意に解する。其れではあまり不人情のやうに聞える。私は右説明する如くに形式に拘泥する勿れと一般的に答へられたものと思つてゐる。

第二 建築及戦争による比喩的訓戒

路 十四・二十五・廿八―三十三

聖書本文

さて夥しき群衆、イエスと共に行き居りしが、彼顧みていふ。

「汝等の中誰か、塔を築かんに、先づ座して、費用を計り、之を成就するに足る資金ありや否やを、調査せざるものあらんや。若し礎を置きたる後、之を成就すること能はずば、視る者皆嘲りいはん、「此人は建て始めたれど、成就すること能はずなり」と」。(路十四・廿五・廿八―三十)

又如何なる王か、出で、他の王と戦を交へんに、先づ座して、我が一萬の兵を以て、かの二萬の兵をもて來り居る者に、敵し得るや、否やを、慮らざらんや。若し敵し得べからずは、彼は敵の尙遠くある間に、使節を遣はし、和睦を求むるなるべし。

此の如く、汝等の中誰れにても其有てるものを悉く棄つるにあらざれば我が弟子たること能はざるなり。(三十一—三十三)

【注】 以上の記事は路加傳のみに記されたる所で、他の福音書には記してない。而して何時頃何所に於てあつたことか明白ではない。路加は之を最後のエルサレム旅行中、ヨルダン河東であつたこととしてゐる。其れが事實かも知れぬが、路加のペレア記事は必しも其まゝ信すべきものではない。ガリラヤ傳道中に入るべき記事も多く此中に入つてゐる。

さて此主意は前段及後段の記事又は教訓と共に弟子の覺悟を要求せられたものである故に、此所に入れたものである。即ち充分の覺悟なくしてイエスに従ふ者は自分の爲にも益なく、又イエスの爲には迷惑となるのである。イエスに従ふからには一切を献げ

て従ふ覺悟が必要である。

第三 イエス姑息なる平和を排す

太 十。三十四—三十八
路 十二。四十九—五十三

聖書本文

地に平和を投げ入れん爲に我來れりと思ふ勿れ。

平和にあらず刃を投げ入れん爲に我來れり。

我が來れるは人を其父に反かせ、娘を其母に反かせ媳を其姑ににそむかせん爲なり。

其人の家族は彼の敵となるべし。

我よりも父又は母を愛する者は我に應はざるものなり。

我よりも子又は女を愛するものは我に應はざるものなり。

自ら其十字架をとりて我に従はざるものも我に應はざるものなり。(太十。三十四—三十八)

【注】「投げ入れん」は原語によれば單に投ぐる (to send) の意である。もち來たす (bring) おくる (send) と譯しても大なる差異はない。但し強い意味の語である。

「かなふ」とは相應する適當する、一致するといふやうな意である。

「自ら十字架云々」は原語「彼の十字架」とあるのである、人各自己の負ふべき十字架をもつてゐるのである。

此教訓は父母妻子に反抗することを教へたものでは無論ない。父母に従はんとしてより高き義務を怠る時には却て不孝となるのみならず、自己の靈性を滅すものであることを説いたものである。

茲に尙注意すべきは「我よりも云々」といひてイエスが自ら絶對の服従を弟子等に要求せられて居ることである。

イエスは自らソロモンよりも大なるもの、モーゼよりも大なるものなりとの自覺があつたのでかくいはれたのであると思ふが、其れにしても尙イエスの眞意は神に従ふことを第一とせられたものに相違ない。聖靈の主權に服することを要求せられたものに相違ない。弟子に對して「自己云々」と稱せられたにしても、其れは神若しくは聖靈と一致せ

より高き義務

「イエスの我」

る自己で、自ら獨立にかゝる權を要求せられたのではない。若し然らずしてイエスが自己の私權を主張し、私意に基いて人を或は救ひ或は罰するのであるとすればイエスの他の公明なる態度教訓と全然矛盾するのである。

さて以上の教訓も何時與へられたものか明瞭でない、前段の教訓と共に恐く迫害漸く盛んになつたガラリヤ傳道の終り頃であつたと思ふ。

第四 北方への旅行及ペテロの告白

可 八。廿七—三十一
太 十六。十三—二十
路 九。十八—廿一

聖書本文

イエス其弟子と共にカイザリヤ、ピリビの村々に出で行けり、途にて彼、弟子に問ひ、いひけるは、「人々は我を誰といふ乎」と。彼等イエスに告げて、いひけるは、「バプテスマのヨハネなり、又或者はエリヤ、或者は預言者の一人なりといふ」と。イエス又彼等に問へり、汝等は我を誰といふ乎と。ペテロ答へて彼にいひけるは「汝は

キリスト(メシヤ)なり」と。かくてイエス彼等を厳しく戒めて、己れについて誰れにも告ぐる勿れと命じたり。(可八。廿七—三十)

【注】 以上の記事は福音書中最も重要なものである。イエスがメシヤであり、又メシヤたる宣言をなされたといふことにつき最も確實なる證據とせらるゝものである。

メシヤといふは先きにも既に説明した如く、「油を注がれた者」といふ義で、もと國王をさしたものである。然るに其後特別に神より遣はされて將來イスラエル王國を復興すべき國王を他の國王とは區別し、之を「メシヤ」と稱するに至つたのである。尙イエス當時に至りては、其メシヤは國王でなく、人間以上超自然者であるとの信仰も起つてゐたのである。而してイスラエル人はかゝるメシヤを頻りに待ち望んでゐた。

さて此記事の主意はペテロがイエスの間に答へて、他の弟子に先ち「汝はメシヤなり」といつた。するとイエスは是は輕々しく論ずべき問題でない故に誰れにも、告げてはならぬと語られたといふのである。

要するに此馬可傳の記す所によれば「イエスはメシヤであつた。然れど其は大なる秘

メシヤの意

理由にせし

義の存する所で、イエスの生存中は特別の者の間にのみ知られてゐたことであつた」といふのである。是は果して事實であらう乎。獨逸のグレーデ氏などが「是は歴史にあらずして教義(ドグマ)である」と主張するのである。

然らば事實に於てペテロは何と告白し、イエスは何と信じてゐられたか、是は異論の多い問題である。恐くイエスは前述せる如く舊き教義に従ひて自らメシヤであるとは思つてゐられなかつた。又ペテロも此時は未だ全くイエスをメシヤとは信じ得なかつたと思ふ。メシヤは前述せる如く國王たる乎、超自然者たるかの資格を有せねばならぬ。然るに當時イエスの行動は國王らしくもなく、又超自然者らしくもなかつた。故に此時ペテロがメシヤであると思つたといふは事實らしくない。

ペテロがイエスを眞にメシヤと信じ得たはイエスの死後、彼の甦りを經驗してから後のことと思ふ。此時は只イエスの崇高なる人格に感じ、イエスを人的よりは神的(divine rather than human)の方であると思つてゐたのである。故に其の通りをイエスに申し上げたことと思はれる。イエスも敢へて之を辭し給はなかつたやうである。然れど彼はペテロの敬意を受けられると共に、彼は直ちに其次ぎに記される「受難のこと」を語られたの

である。

然らば「イエスのメシヤたる」ことは秘密であるとか、馬太傳の其信仰は直接神の啓示によるもので、血肉即ち人間の思想ではないとか、又教會は此上に立たねばならぬとかいふことは、弟子等の教義に屬することで、イエス直接の語ではなからう。(太十六。十七。十八參照)

尙前文中「村々」とあるは馬可傳の語で馬太傳には「地方」とある。カイザリヤ、ピリビは都會なれど、其附近をもカイザリヤ、ピリビの地方又は村々といつたのである。パレスチナの最北部で、ヘルモン山に近い所である。此都會は領主ピリボが建た都市でオーグスト皇帝に獻ぐる意でカイザリヤと名づけたのである。尙地中海岸のカイザリヤと區別してカイザリヤピリビといふのである。

「我を云々」は馬太傳には「人の子を云々」としてある。イエスは恐く我をば「我」といはれたであらう。自己を常に「人の子」と呼ばれたとするは疑はしい。

「エリヤ」といふは紀元前凡そ八百五十年頃の預言者である。然るにイエス當時人々の信じた傳説によれば、此エリヤはメシヤ時代の前驅者として再び現はれるといはれたの

である。

第五 受難の預言

可八。三十一—三十三
太十六。廿一—二十三
路九。廿二

聖書本文

さてイエス、人の子は必多くの苦難を受け、長老、祭司長、學者等に排斥せられ、而して殺され三日の後に甦るべきことを教へ始めたり。彼之を公に語りぬ。ペテロ彼を引きとめ、彼を叱責し始めたり。イエス振り返り、弟子を見廻はしつゝ、ペテロを叱責し、而していへり「去れよ、サタン。汝は神の事を思はず、人の事を思へり」と。(可八。三十一—三十三)

【注】以上の記事はイエスが一方に於て偉大なる自覺を有せられたと同時に他方に於て最も賤しき死を覺悟してゐられたことを示すものである。

「人の子多くの苦難を受け云々」とはいふ迄もなくイエス自ら多くの苦難を受けられることである。而してイエス自ら人の子と稱せられたか否かは疑問である。

「三日の後に甦る云々」とは他の書には「三日目に云々」となつてゐる。是は恐くホゼヤ書の語に一層適合するやう改めたのであらう、ホゼヤの預言といふは次の通りである。

「エホバは二日の後我を生きかへし、三日に我をたゞせ給はん」(六〇二)

とある。是れから「三日目の甦」といふ思想ができたのであらう。但し此ホゼヤ書の語は國民の復活をいつた語で箇人の復活をさした語ではない。箇人の復活を信するに至つたは餘程後世のことである。イエス當時に於てさへサドカイ人は甦を信じなかつた。但俗説中には種々の復活談があつた。

「ヨハネが甦つた」といふ評判も其一である。其は兎に角メシヤが死して三日目に甦るといふ明白なる預言は舊約聖書中、何處にも見えぬやうである。

さて本文の主意はイエスが祭司長老等に迫害せられ、而して遂に殺されることを語り給ふたのである。然ればこそペテロがイエスを諫めたのである。然らば「三日目に甦る云々」の預言は此文章中には適合せぬ語である。甦るといはれたならばペテロにも満足

すべき筈である。

「必多くの苦難を受け、殺さるべきこと」といふは受難が必要であり又必然である (is necessary) の意である。

「教へ始めたり」といふは、公然と此時よりかく教へ始められたといふ意である。前にもいへる如く「始めたり」といふ語は馬可の慣用語で、多くの場合は重き意味を有せぬのである。但し此文中の「始めたり」は實際之が始めであつたことを示すのであらう。然れば馬太は他の例の如くに之を除かず却て「此時より」の語を加へて「始めたり」との意を一層明かにしてゐる。是によればイエスも最初から死を豫期せられたのではないらしい。「ペテロ叱責し云々」は強い語で、イエスを叱責するやうにいつたこの意味である。是はペテロがイエスの心事を了解する能はず、彼が失望せられ居るものと思つて勵ますつもりで激しく語つたのであらう。

ペテロの語に對しイエスの語も又甚激しかつたらしい。即ち「サタンよ退け云々」と語られた。イエスはペテロをサタンであるとは思はれたのではないが、かゝる思想の内にサタンの誘惑があるとせられたのである。かくて大に之を叱責し、自ら覺悟を固くする

と共に弟子の決心をも強めんとせられたのである。

「人の事を思ふ」とは利己心によりて考へるとの意である。

第六 弟子の決心を促す

可	八。三十四—九。一
太	十六。廿四—廿八
路	九。廿三—廿七

聖書本文

かくてイエス其弟子と共に群衆を呼び集めていへり、

「人もし我に従はんと欲せば自己を排斥し己が十字架を取りて我に従ふべし」

其は己の生命を救はんと欲するものは之を失ひ、

我及び福音の爲に其生命を失ふものは之を救ふべければなり。(可八。三十四—三十五)

もし人、全世界を得るとも、其生命を失はば何の益あらんや、人何を興へてか、其生命に換へんとする乎。(三十六、三十七)

姦惡にして罪深き今の世に於て我と我言を愧づる者をば、人の子も亦己が父の榮光をもて、聖き使等と共に來る時之をばづべし。(八。三十八)

又彼等にいひけるは、我真に汝等に告げん。此所に立つもの、内、神の國の力を以て來るを見る迄は死を味はざる者あり。(可九。一)

【注】「群衆」の語は馬太には除きあり、(路加傳にもない)。イエスは今北方カイザリヤ、ピリビの方に旅行せられつゝあるのであるれば、左程多くの人々集りしとは思はれぬ。故に除いた方がよいかと思ふ。若し群衆が居つたとすれば其はガリラヤ地方に於てあつたことである。

「生命」と譯したは原語は「靈魂」又は「精神」(Soul)といふ語で主として現在人々の有する生命をいふのである。

永遠の生命即ち「救」又は「心靈」といふ語とも異なるのである。但し「生命を得んとするものは失ひ、之を棄つるものは得る」といふ場合には、其生命は二様の意味に用ひられてゐる。即ち一は肉體的生命で、他は心靈的生命である。肉體的生命を犠牲とする覺悟

がなくば心霊的生命は得られぬとの意である。

「我が爲云々」の説明は前段に記述した。

「己を排斥し」としたは「己を棄て」と同義であるが一層原文に忠實ならんとして改めたのである。つまり利己心を棄てることである。

其次の句である「人もし全世界を得るとも生命(靈魂)を失はば云々」の語は稍語法を異にしてゐるやうである。前節の語は、低き生命と高き生命との對照であるが、此語は世界即ち物質と生命即ち靈との對照である。此靈を失ふといふは肉體的生命にも心霊的生命にも其意義を取り得るが、主として心霊的生命をいふのであらう。但し普通のユダヤ人は肉體的生命と心霊的生命とは區別してゐなかつた。

「全世界を得る」とは、全世界を儲けるといふやうな意義である。

「其生命(靈)を失はば」といふは「沒收せられる」棄權するといふやうな意味である。

「何を與へて生命に換へんとする乎」とは其生命を沒收せられたる場合は、幾許の償金を出して之を買ひ戻し得るであらうか、全世界の富を出しても、其生命をば買ひ戻し得ぬとの義である。

「姦惡にして罪深き今の世」(this adulterous and sinful generation) といふは甚だ烈しい語である、イエスは此世に少しの善も光明もないといはれたのではない。然れど彼は此世に於ては非常に力強き悪魔が働きつゝあるものと見られた。故に彼は其悪魔と激烈に戦はんとせられたのである。

「我と我が言葉を恥づ」とは、臆病にして、イエスと共に、神と人との爲に、充分に戦ひ得ざるものである。

「人の子來る時云々」とは最後審判の時の意である。其時イエスも、彼等を其弟子といふことを恥ぢ給ふといふのである。而してイエスが如何なる意味に於て彼等の審判者たるかは前節に既に述べた通りである。

「此所に立つ者の内、死を味はざるものあるべし」といふは、最後の審判が近き内に來るといふことである。

イエス自身が之を信じてゐられたことは恐く間違ひなからう。但しイエスの重なる主張が此點にあつたか否かは疑問で、是につきては既に論じたこともある。要するに熱心世の終りと其審判の時期を論じたものはユダヤ人中の或學者等とイエスの弟子等であ

つた。イエス自身の主張は其時期よりも其審判の性質に關するものであつた。其時其日は我が知る所にあらずとせられたのである。

第七 イエスの變貌

可九。二一九
太十七。一十三
路九。廿八―卅六

聖書本文

かくて六日の後、イエスは、ペテロヤコブ及びヨハネをつれ、彼等を導き、人をさけて高き山に至る。而して彼等の前にて彼の姿、變れり。其衣は白く輝き、地上の布晒人さしもなし得ざる程なりき。かくてエリヤとモーセ彼等に現はれ、イエスと語りあたり。(可九。二―四)

其時、雲來りて彼等を掩へり。而して雲の中より聲ありていふ、「此は我愛子なり、汝等彼に聞け」と。彼等俄に見廻せしに、イエスの外彼等と共に誰をも見ざりき。(七、八)

彼等山を下る時イエス彼等に、彼等が見たる事どもを、人の子の死より甦るまで、誰れにも告ぐべからずと命じたり。(九)

【注】 苦難についての預言ありて六日後此事件があつたといふのである。但し路加傳には「八日ばかり過ぎて」とある。(シユワイツェル氏は之をペテロ告白前とす)

路加傳には彼等「祈りの爲」山に登つたとある。其れは事實に近いことと思ふ。エリヤ、モーセは舊約の代表者と思はれてゐたのである。

天より聲があつたといふことは洗禮の時にもあつたと傳へられてある。共にメシヤたることを證明せられたのである。但し洗禮の時はイエス自身に對する證明の聲であり、此時は弟子に對する證明の聲である。詩篇二。七に曰ふ。

「汝は我が愛子なり、今日我汝を生めり」と、是は神がメシヤに對する宣言で、福音書の文章は是に基くものであらう。「之に聞け」といふは「メシヤの言に聞け其教訓を謹んで受けよ」との意である。

要するに是は洗禮の時の記事と共に、メシヤたる休徴として弟子の傳へたものである。

而して之が事實であるか否かは問題である。恐く是は弟子等がイエスと共に山上に於て祈禱をなした時の気分を神話的に傳へたものであらう。

「是等のことどもをば人の子の甦るまで誰れにも告ぐるべからずと命せり」といふ語はグレーデ氏が主張する如く聖書記者の教義に基く語である。即ち記者の意によれば此事實はペテロの告白と共に一大秘義に属すること、イエスの甦りまで隠されてゐたことであるといふのである。然るにイエスの事實や教訓に一般人に秘すべき秘密のあつた理由はない。

但しイエスの人格は秘義中の秘義である。弟子等は愈親しく接すれば接する程其偉大に驚かざるを得なかつた。即ち彼等は此北方旅行中に於て其人格に一層深く感じたのである。

第八 イエス謙遜を教ふ

可 九。三十一―三十七
太 十八。二―五
路 九。四十六―五十

秘義中の秘義

聖書本文

彼等此所を去りて、ガリラヤを通り行けり。彼其ことを誰にも知らしむることを欲せざりき。そは彼其弟子を教へ、且「人の子は人々の手にわたされ、人々は彼を殺すべし、然れど殺されて三日の後には甦るべし」と彼等に告げられたればなり。(可九。三十一―三十二)

彼等カペナウムに至れり、彼、家に入りし時、彼等に尋ねていひけるは「汝等途にて何を論じむたりしや」と。彼等默然たりき。そは途にて彼等互に誰れか最も大なるやと論じられたればなり。(三十二―三十四)

かくてイエス坐し、十二人と呼び、而して彼等にいひけるは「若し何人にも首たらんと欲せば、凡ての人の後となり且凡ての人の僕となるべし」と。(三十五)

イエス又幼児を取り、彼等の中に置き而して、彼を抱きつゝ、弟子にいへり。凡そ誰れにても、我名の爲に一人の幼児を受くるものは我を受くるなり。

また誰れにても、我を受くるものは、我を受くるにあらず、我を遣はし、者を受くるなり」と。(三十六―三十七)

【注】前文「イエス變貌」の記事の次に、イエスが癡癩の子供を癒されたことが聖書に記されてある。かゝる事件も此旅行中に起つたかと思ふが元來此旅行の目的は傳道及治療でなく、弟子を教養する爲であつたと思ふ故に此記事をば省略した。

尙弟子は先きに「鬼を逐ひ出す權」を授けられて多くの人を癒したといふに、此時は幾分失望する所があつたので、いやし得なかつたと記してある。要するに此記事も重要ではあるが、本章の主意に直接關係なき故に省略したのである。

イエスは其後間もなく再びガリラヤに歸られた。然れど其後は再び公けの傳道をなすことなく、寧ろ其弟子等を教育して、エルサレム行の準備をせられたらしい。

「嬰兒をうくる」といはいと弱き者及び謙遜なる者を尊び、之を歓迎し、之に事へて、愛心をつくすことである。

「我名のために」とは弱き者をイエスの愛し給ふものとして、又謙遜なる者をイエスの代表者として、之を愛せよといふのである。而して斯く誠意弱者を愛し謙遜者を尊ぶことは其人のみを愛し尊ぶにあらすしてイエスを愛するものであり、更にイエスを愛する

弱者に對する奉仕

は神を愛するのである。

以上はイエスが弟子等に對し謙遜を教へられたものである。イエスの弟子に要求せられたものは第一に献身犠牲の精神であつた。次に謙遜にして人に事ふることであつた。此兩者がなければイエスの弟子とはなり得ない。

第九 イエスの寛大

可九。三十八—四十
路九。四十九—五十
路九。五十一—五十六

聖書本文

ヨハネ、彼にいひけるは「師よ 我等或者の汝の名により鬼を逐ひ出し居るを見たるが、彼は我等に従はざるものなりし故、我等彼を禁めたり」と。

イエスイひけるは「彼をどむる勿れ、そは我名によりて力ある業を行ふものにして、直に我をそしることを得るものはあらざればなり。そは我に反かざるものは我につくものなり」。(可九。三十八—四十)

イエス、彼が擧げらるべき日の來れる時、確く意を定めてエルサレムに向へり。使者等先きに遣されたり。彼等イエスの爲に備へんとてサマリヤの或邑に入りけるが、邑人等イエスがエルサレムに向ふものなるにより、彼を受けざりき。彼の弟子ヤコブとヨハネ、之を見ていひけるは「主よ、汝は我等をして天より火をよび下し、彼等を焼きつくさしめんと欲する乎」と。然れどイエス顧みて、彼等を吐りぬ。而して彼等他の邑に行けり。(路九。五十一—五十六)

【注】 イエスに従ひ居らず而かもイエスの名によりて鬼を逐ひ出してゐたといふは如何なる種類の人なるか、明瞭でない。只悪意ありてかくなしてゐたのでないことはイエスの答へによりて明瞭である。

イエスは元來妥協を好まぬ方である。善を善とし惡を惡とし曖昧なことを甚しく嫌つた方である。而かも人に對しては寛大であつた。特に其者が外形上如何なる黨派に屬しやうとも、其れ等には頓着せられなかつた彼等にして惡意を有せざる限りは之を愛し、

又自己の味方と信せられた。

然れどイエスは其心中に惡意を有し故意に正義と愛に反對せんとする徒に向ひては容赦なく叱責せられた。又善惡何れにもつかざるやうな態度をも忌み嫌はれた。かくて「我と共に集めざる者は散らすなり」といはれたこともある。

此「イエスの名によりて鬼を逐ひ出してゐた人云々」の件は馬可及び路加には記してあるが何故か馬太傳には見えぬ。

又サマリヤに於ける記事につきましては、路加傳が記してゐるのみである。而して之れもイエスの寛大を示すものである。彼は即ち何人に對しても其罪を心に思はず、利己を本位として怒るやうなことはなかつた。即ち無智の惡人については極めて寛大であつた。只彼の怒り給ふた者は高慢にして神と人とを欺くものであつた。

尙以上の記事によると、イエスは途を先づサマリヤに取らんとせられたらしい。然るにサマリヤ人が彼等を迫害した故に、イエスは途を轉じ、ヨルダン河東に出で、所謂ペレアの地を経てエルサレムに向はれた。

ペレアの地は比較的ユダヤ人が多くて通行には便利であつた。故に多くの人はサマリ

厭ふべき態

許すべき人々

ヤを通らずして此途を取つたのである。

第十 ヘロデ、イエスを殺さんごす

路 十三。卅一―卅三

聖書本文

其同じ時刻に或パリサイ人等來りて彼にいひけるは「汝出で往き、此所を去れよ、そはヘロデ汝を殺さんと欲すればなり」と。イエス彼等にいへり、「往きて、其狐に告げよ、視よ我今日も明日も鬼を逐ひ出し、治療を行ふ、三日目には我事終るべし。然れど、今日も明日も其次の日も我が道を行かざるべからず。其は預言者はエルサレムの外にて殺さるゝことあらざればなり」と。

ヘロデの態度

【注】茲に「ヘロデ」とあるはヘロデ、アンテバスに相違ない。彼はガリラヤ、ペレア地方の領主である。彼は先きにヨハネを殺した者である。彼は又イエスをも殺さんごしたのである。

而して右の記事は路加傳によればペレアにイエスが渡りてからの事實である。然れど

是によりてイエスがガリラヤ傳道中の後期に於ける、ヘロデの態度を知ることが得ると思つた故に此所に之を入れたのである。即ち彼はあくまでイエスに對して敵意をもつてゐた。「其時刻」にとあれど、是は重要な語でない。

「今日も明日も」、又「今日も明日も其次の日も」といふは共に尙暫くの間はといふ意である。

イエスはヘロデが己を殺さんごしてゐるといふことを聞かれても、我が使命のある限り、神の保護のあることを信じ、直ちに此所を去らんとはせられなかつた。

「預言者はエルサレムの外に殺さるゝことなし」といふは恐らく福音書記者等の注であらう。彼等の信仰によれば預言者特にメシヤは必エルサレムに至りて活動し其所にて死すべきであると思つてゐたのである。但し死ぬる場所が何處であらうが、其れは其人の價値には關係ない筈である。故にイエスは必しも是非エルサレムに於て死なねばならぬと思はれたわけではない。彼は死を決してエルサレムに行くことを既に定めてゐられたに相違ないが、其は死ぬるにガリラヤはよくない、エルサレムでなくてはならぬといふのではなかつた。エルサレムに往くは傳道の爲である。死を預期しつゝも死を目的とせ

メシヤの死

られたのではない。

〔附言〕 イエスがガリラヤ人の反對に遇ひ、弟子をつれて、北方に旅行せられたといふは普通の學說である。然るに終末論者として有名なるシュイツェル氏は之に反對して左の如く論じてゐる。

イエスは決してガリラヤ人より反對を受けられたことはない。ガリラヤに於ては終始人民の歡迎を受け、群衆は常に彼を追ひ求めた。只彼が北方に旅行せられた理由は自己の覺悟を定める爲であつた。派遣した弟子が歸らぬ内に、世の終末は來るべしと信ぜられてゐたに、其の如くならなかつた爲に、イエスは其方針を變へる必要を感じられたのである。即ち北方旅行中に於て、イエスはメシヤの死なくば、世の終末は來らぬと、覺られ、遂に自己の死を決せられたのである。其れまでは「世界的苦難」を説かれたのであつたが、其以後は自己の死を宣傳せられた。従つてイエスがエルサレムに往かれたは傳道の爲ではなく、全く死する爲であつたといふ。

第七章 ペレア及ユダヤに於けるイエス

概論

イエスの重なる傳道はガリラヤの地に於て行はれた。而かも其れは成功ではなかつた。然れど尙彼は自ら信するだけの事を語り又行ふて自己に取りては不満はなかつた。かくてガリラヤよりは足の塵を拂ふて立ち去り暫く北方に旅行して弟子の教育に従事し給ふたが、更に方向を轉じて南に來り、ペレアの地を旅行しつゝ同じく弟子等を教育すると共に其所に居るユダヤ人に傳道せられた。

ペレアといふはヨルダン河の東の地で、土地は概して不毛である。然れど諸所に耕地もあり、都會もあつた。ユダヤ人の住むものも甚だ多かつた。但しガリラヤほど榮えた土地ではなかつた。イエスの傳道も單に旅行中暫く滞在して之に従事せられたといふに過ぎぬ。イエスの目的はエルサレムに至りて其主張を宣傳することであつた。此ペレア傳道の中に路加傳は多くの事實を記入して居る。然れども其は恐く假りに其部分に入れ

ペレアの地

たもので實際に於ては其の多くはガリラヤ若しくはユダヤで行はれたことかと思ふ。ベレア傳道は左程長く續いたものではなかつた。

さてイエスの傳道はエルサレムに近づくに従ひ、多少の變化を見るやうである。是は其土地人情の異なるが爲である。ガリラヤ人に對しては主として神の國の福音を傳へ、病者罪人等を招いて、彼等に救を經驗せしめんとすることであつた。ユダヤに來りても其主意に變化なれども、ユダヤはラビの根據地にしてイエスに來り會するもの、多くは單純なる平民よりは、階級的思想を有するパリサイの徒なりしかば、其説教は多くは彼等に對する警告であつた。

本章に於てはイエスがガリラヤを去りてよりエルサレムに入られる迄の記事を集めたものである。其内には主題の關係上、既に前章に入れたものもある。然れど尙此期に起つたと思はるゝ重要なものは凡て此章に入れたのである。尙是等の記事の眞意を了解する爲には前章「イエスとパリサイ人」「神の國に關する教訓」等の記事を参照する必要がある。

ユダヤ傳道
の性質

第一 離婚についての訓戒

可十。一一一二
太十九。一一一二
路十六。十八

聖書本文

イエス此處を立ち出で、ユダヤの地方及びヨルダンに彼方に至りしに、群衆又多く彼のもとに集る、彼、常の如く彼等を教へむたり。

時にパリサイ人等來り、彼を試み、問ひけるは、「人其妻を出すは可きか」とイエス答へて彼等にいひけるは、「モーセは汝等に何と命せしや」彼等いひけるは「モーセは離婚狀を書き與へて之を出すことを許せり」と、イエス彼等にいひけるは「モーセは汝等の心無情なるにより此命令を記せり、然れど創世の初め、神、人を男女に造れり、是故に人は父母を離れて其妻に合ひ、二人のもの一體となるなり。然らば最早二にあらず一體なり。故に神の合せたる者、人之を分つべからず」と。

家に於て弟子また此事につきて問ひしかば、イエス彼等にいひけるは、「誰にても其

妻を離縁して、他の婦と婚姻する者は彼女に對して姦淫罪を犯すものなり。また婦も其夫を離縁して他の男と婚姻せば此の女も姦淫罪を犯せるなり」と。(可十。一—十二)

【注】「ユダヤの地方」としたは、「ユダヤの境」(frontiers of Judea)としてもよい。又「ヨルダンの彼方」とあるは所謂ベレアの地をさすのである。尙馬太傳には「ヨルダンの彼方なるユダヤの地方」といふ語がある。ヨルダン河の東をもユダヤといふこともあつた。然れど此地方は當時ガリラヤと共にヘロデ、アンテバスの領地で、ヨルダンの此方たるユダヤ本部の地とは支配者を異にしてゐた。即ちユダヤ本部の地は知事の支配してゐた地で當時はピラトなる知事が羅馬政府から遣はされてゐた。

「彼を試みた」といふは學者等がイエスを陥れんとして問ふたといふ説もあれど、是は恐く其程度地悪き質問ではなく只イエスの知識才能を試みたといふぐらゐのことで誘惑したとの意ではなからう(This was a test, not a temptation)(グールド氏による)

當時ユダヤの學者中にヒレルの説をつぐものと、シャンマイの説に従ふものがあつた。ヒレルは豫ねて温和なる説をなし、シャンマイは嚴格なる説をなした。イエスの教

學者の質問

ヒレルと
シャンマイ

訓は多くの點に於てヒレルの主張に似てゐたが、尙最も嚴正なる徳義を主張することに於て寧ろシャンマイと同じ點もあつた。即ちヒレルは離婚を許しシャンマイは之を禁じた。而してイエスはシャンマイに同意して嚴正に之を禁じた。但しイエスは之を律法上の問題とはせず、其問題の精神にたち入りて、假令モーゼ法に如何に命じありとも、根本に於て人間相互の人格を重んじ其生活を圓滿ならしめんとする主意より之を禁せられたのである。換言せば法律論よりいへばヒレルのいふ如く離婚を許してゐる。然れど一層高き倫理法よりいへば離婚は禁すべきものであるといふがイエスの意らしい。

要するに離婚問題は當時學者間にては一の教理問題であつたが、イエスに取つては人格問題であり實際的の道徳問題であつた。

「モーゼは汝等の心無情なるにより云々」とは、男子が無情亂暴にして妻を虐待するが故に、婦人を保護する目的にて離婚を許し、且離婚したる以上は婦人が他に嫁し得る爲に、離縁状態なるものを作ること命じたのであるとの意である。

「創世の始云々」は人間本來の徳義よりいへば離縁は無論許すべからざることであるとの意。此語の起原は創世記一章廿七、二章二十四等に據つたのである。

婦人の保護

「姦淫罪を犯す云々」は男女に拘らず、結婚したる上にて、任意に離婚し、他の男女と結婚するが如きことあれば、是は前婚者に對し其人格を輕蔑し、彼に對して罪を犯すものであるとの意である。本文中に「彼女に對して」(against her)とあるは彼女の人格に對しての意であらう。既に一たび結婚したる上は彼は必其配偶者に對し其人格を重んじ、終生自己の節操を守る義務あるものである。離婚したからとて其れは神の前に離婚となつたものではない。有夫の婦が他の男子と通するが姦淫罪たる通りに、任意に離婚して他の男に嫁するも同様姦淫であるとの義である。姦淫罪とはつまり相手方の人格を犯す意である。

凡て結婚は人格者と人格者とが互に相尊敬し合ひ相助け合ふ意である。故に一方の者が他の人格を犯し其尊嚴を傷け、而して之を己が便利又は私情によりて勝手に取扱はんとするが如きことあらば凡て之れ姦淫罪を犯すものである。

尙馬太傳の方には十九章九及び五章三十二即ち山上の垂訓中に同様の語がある、但其中には「姦淫の故ならで云々」この語が入つて居る。姦淫の故ならば離婚してもよいとの義である。然るに學者中此句を以て馬太記者が附加したか又は後の記者が挿入したか

あるとする人が多い。何故ならばイエスは元來律法を與へられた人でなく精神を鼓吹せられた人である故、其言葉の調子を弱めるやうな條件などを附せられなかつたと思ふ。されば此語は學者の所説のごとく挿入かも知れぬ。馬可傳の教訓中には見えぬ。但し是を以て若し妻が他の男子と姦淫し良人を棄て去つた場合にも尙其良人は此の不義の妻に對して良人たる義務を盡さざるべからざるものかといふにイエスの意は其れを命じたのではない。イエスはかかる場合にも其不義の妻を愛し、有らゆる方法を盡さねばならぬが、其後の處置は自ら善と考ふる所を行つてよいとの主意であると思ふ。凡てイエスの教訓は人々の良心を刺激し、人格尊重の主義を鼓吹するものであれば一々場合に應じ律法や規則を設けられたのではない。若しイエスの命令であるからとて離婚せずとも其精神に於て互に人格尊重の精神がなく、又互に犠牲的愛心がなくば何の役にも立たぬ。イエスは離婚を禁ずると共に其精神を一層重んじて説かれたのである。

第二 耶蘇幼兒を近づぐ

可十。十三一十六
太十九。十三一十五
路十八。十五一十七

聖書本文

イエスに觸さわられんとして、人々、幼兒を彼の許につれ來りつゝありければ、弟子彼等を叱りゐたり。然るにイエス之を見て、憤り、而して彼等にいへり幼兒を我に來らすことを許せ、彼等を禁する勿れ、神の國は斯の如き者の所有なればなり。眞に我汝等にいふ誰れにても幼兒の如くに神の國を受けざるものは決して是に入ること能はざるなりと。かくてイエス彼等を抱き、手を其上に置きて彼等を祝せり。(可十。十三—十六)

【注】此記事もベレアに於ける事件であらう。「幼兒」としてあるは十二三歳迄の小供をいふのである。

當時有名な教師等の許に、親達は其子を連れ來り、手を按きて祝福を與へられんことを乞ふ習慣があつたらしい。然るに弟子等は是に同情する心がなく斯ることを小事と思つたと見える。イエスの感情の優しかつたに反し、弟子の心が粗雑であつたことが是等の記事によりて示されてゐる。

「幼兒の如くに云々」とはいふ迄でもなく謙遜にして正直なる態度を以て神を信じ其旨に従ふことが出來ずば救を完ふすることを得ぬとの意である。「神の國を受くる」とは神の國の福音を受け入れることであり、又神に信頼することである。

「神の國に入る」云々は「神の國は其人のものなり」とあると同様な意味である。神よりの救を受くる義である。

第三 富める青年

可 十。十七—廿二
太 十九。十六—廿二
路 十八。十八—廿三

聖書本文

イエス途に出でしに、或人走り來り、彼の前に跪きて問へり、「善き師よ、我、永遠の生命を嗣がん爲には、何をなすべき乎」と。イエス彼にいへり、「何故我を善きといふや、獨りの外に善きものはなし、即ち神なり。汝、誠を知る、即ち姦淫する勿れ、殺す勿れ、盜む勿れ、偽りの證を立つる勿れ、欺き取る勿れ、汝の父と母とを敬へ」

彼いへり「師よ、凡て是等の誠は、我が幼年の時より守れる所なり」と。イエス彼をながめ視ていつくしみ而して彼にいへり、「汝一を缺ぐ、往きて其有てるものを悉く賣り、貧しき者に與へよ、然らば汝天に於て寶を得ん。而して來り我に従へ」と。然れど彼は此言によりて、うちしほれ、悲しみにみちて去り行けり。そは彼は多くの財産をもつ者なりしか故なり。(可十。十七—廿二)

【注】此の事件も何處に於てあつたことか、ペレアに於てあるか、又既にヨルダン河を渡つてからのことであるか明瞭でない。

此富める人は比較的善良の人であつたらしい。「走り來り」とあるは其熱心を示すものである。尙路加傳は此人を司(Father)とし、馬太傳は青年(十九。二十)としてゐる。

「永遠の生命」(Eternal life)といふは恐く左の如きダニエル書の文に基く語であらう。

「また地の下に睡り居る者の中多くの者目を醒さん、而して其中、永遠の生命を得るものあらん、又恥辱を蒙りて限りなく羞るものあるべし。(十二。二)」

即ち永遠の生命といふも必しも心靈的の意味ではない。メシヤ王國に於て權威と幸福を受けるとの意である。斯の如きがユダヤ人の理想であつた。故に此富める少年も之を望んだのである。彼に果して幾許の心靈的理想と要求とがあつたかはよく知ることができぬ。

其は兎に角、此青年は熱心にメシヤ王國を希望してゐた。而して其れに達せんと努力してゐた。是はイエスの大に嘉みせられし所であつた。

さて此青年に對し、先づイエスが與へられた注意は、「神」といふことであつた。凡ての宗教道德の中心思想は「神」である筈である。故に先づ神といふことを心に置いて而して凡ての問題を解決せねば解決し得らるべきものではない。故にイエスは先づ「善の本體は神なり」と告げて神のことを思はしめんとせられたのである。

次にイエスが此少年に對し與へられた注意は律法のことであつた。律法は何人にも最も明白に倫理道德の簡條を教へるものである。故にイエスは先づ此律法を引きて此青年の良心に訴へられる所があつた。然るに此青年は普通の律法をばよく守つてゐた。故に普通の律法を聞いたのみでは彼は自ら罪を自覺するには至らなかつた。是は青年の良

心が鈍い爲ではなく、元來律法なるものが其れ程深く人の良心に觸れぬ爲である。

かくてイエスは一層此人の良心に深く立ち入り、人類共通の最大缺點であると共に又此人の弱點である利己心に對して一の嚴肅なる命令を與へられた。汝は現在の地位と財産とを棄て、貧民を愛し、又よく我と共に福音の爲に盡す覺悟ある乎と問はれた。此時に至り、始めて此青年は自己を顧み、而して痛苦に堪へざりしもの、如く、遂にイエスの前を逃れ去つた。

要するに眞の意味に於て永遠の生命即ち救済を得んと欲するならば、人は先づ神を信じ、而して神の旨と信する時には一切を棄てる覺悟がなくてはならぬ。イエスが他の時に語られた如く、キリストの爲に生命をさへ棄つるものにあらざれば、生命を得ざるのである。

イエスが何故に「善き師よ」といふ語を拒絶せられたかにつき議論があるが、要するにイエスは自己を神と同一視せられてゐなかつたことは是にて明白である。但し是れによつてイエスが自己の罪を告白せられたものとする説は立ち難いと思ふ。

イエスに罪があつたとか、なかつたといふ議論は到底斯る言葉を以て證明し難い。只

イエスも神を完全なる善と信じ、自ら謙遜にしてひたすら神に倣はんとせられてゐたことは明了である。(馬太傳記者が此節の語を變更し「何を善きことにつきて問ふや云々」としたのは記者がイエスを尊敬するあまりかくしたのであらう)

又「財産を棄て貧民に施せ」といふ意義についても種々の議論がある。或學者はイエスは財産の所有を一切禁せられたのであるとする。然れどイエスが一切財産の所有を禁せられたと思はるゝ箇所は見當らぬ。

「汝等生命の爲に何を食ひ、又身體の爲に何を着んと思ひ煩ふ勿れ」といふは單に物質の爲に憂慮することを戒められたものである。又弟子等を傳道に遣はすに際し「旅囊、財布をもつ勿れ」と命せられたは傳道旅行者としての心得を語られたに過ぎぬ。決して財産の所有を禁せられたのではない。

然らば此青年に全財産を棄て、貧民に施せと命せられた所以は何所にあるのであらうか。其理由は次の二つの内何れかであらねばならぬ。

一、是は單に此人一人に對する特別の命令である。此青年の使命は全財産を貧民に施し、而してイエスと共にエルサレムに従ひ行くことであつた。

二、是は此人の覺悟を要求せられたのである。覺悟といふものは單に想像ではない。事實である。事實財産を棄てることをなす勇氣をいふのである。然れど財産を棄てることの事實をさすのではない。イエスも實際財産を棄てよと命せられたに相違ないが、イエスの主旨は其財産を棄てることを要求せられたのでなく、是を棄てる勇氣、覺悟を要求せられたのであらう。

以上二つの主意は何れもイエスの精神に適ふことと思ふ。現今に於ても財産を棄てることが必しも人の靈を救ふこと、は思はれぬが、財産に執着するものは人格を完ふすることを得ぬ。又特に傳道者改革家等とならんとするものは自己の財産を適當に放棄する必要がある。但し傳道者等が自己生活に全く無頓着であるといふことは現今の時代に於ては不可能のことである。故に正當の道に於て之を支へることは決して惡事ではない。

第四 誤れる希望

可 十。三十五—四十五
太 二十。廿—廿八
路 廿二。廿四—廿七

聖書本文

時にゼベダイの子、ヤコブとヨハネ、イエスに近よりて曰ひけるは、「師よ、我等、汝が我等の求むることを我等になし給はんことを願ふ」と。彼いへり「何を我が汝等になさんことを願ふや」と。彼等イエスに曰へり「汝の榮光の中に、一人を汝の右に一人を汝の左に座することを得させ給へ」と。イエス彼等にいひぬ「汝等は自ら願ふことを知らず。汝等は我が飲む杯を飲み得るか、又我が受くるバプテスマを受け得る乎」と。彼等曰ひけるは「得べし」と。イエス彼等にいひけるは汝等は眞實に我が飲む杯を飲み、我が受くるバプテスマを受くるなるなり。されど我右左に座することは我與ふることにあらず。此は備へられたる人にのみ與へらるゝなり」と。(可十。三十五—四十)

十人の弟子之を聞き、ヤコブとヨハネとを憤り始めたり、イエス乃ち彼等と呼びていふ。

汝等知るべし、異邦の王と見ゆる者は之に主となり。

彼等の君たるものは其上に權を取る。

然れど汝等の中にては斯かあるべからず。

誰れにても汝等の中大ならんとするものは僕となるべし。

誰れにても頭たらんとするものは奴隷となるべし。

そは人の子の來るも人に事へられん爲にあらす、人に事へん爲なり。

且多くの人の爲に贖として其生命を與へん爲なりと。(四十一—四十三)

【注】右の記事に似たものは前章中にもあつた。即ち弟子等は以前より互に誰が最も大なるものとなる乎といふ争論をしてゐたのである。イエスは度々是につき訓戒を與へられたらしいが、彼等は未だ十分イエスの意を解したらしくない。依てイエスは茲に同様の訓戒を一層明白に且親切に與へられたのである。尙此記事は何故か路加傳にない。其理由は明白でないが、記者は此記事を以て弟子を輕蔑し又イエスの權能を制限するものと思つて記さなかつたのかとも思はれる。

「汝の左右」云々は、多分イエスを、政治的メシヤと信じて願つたのであらう。即ち彼等はイエスに特別に愛せられ、イエスの事業成功の場合には、必上座につかんものと願

つたのである。彼等は何れも大望心(ambition)に充ちてゐたのである。

イエスは其願望を聞き直ちに叱責せられず、却て懇ろに其誤れることを戒められた。

「杯」といふ語は舊約聖書中に既に屢々苦痛の意に用ひられた所である。(イザヤ五十一。十七。エレミヤ四十九。十二)

又バプテスマといふは浸水(immersion)といふ義である。而して其意味は苦難を受けるといふ義である。尙此一句を直譯すれば「我が浸さるゝ浸水に汝等も浸され得るか」(to be immersed with the immersion that I am immersed with?) といふのである。意味は我が受けんとする困難を汝等も受け得るかといふ意である。此「バプテスマは儀式としての所謂「洗禮」とは關係がないらしい。是は迫害の波に打たれ、苦痛の海の内に沈むといふやうな比喩的の語である。(即ち詩四十二。七。六十九。二。三。十五、百二十四。四等参照せられたし)

「杯を飲み、バプテスマを受くるなり」(you shall drink, you shall be baptized) といふは恰かも未來を預言してある如く聞える。かくて是はヨハネ、ヤコブの殉教者として死を語つたものであるとの説がある。ヤコブの死は使徒十二。一に見える。ヨハネについて

は古くから彼が長命したといふ傳説が存じてゐる、即ちバトモス島にては黙示録を記し又エベソの市にては約翰福音書を書いた。而して又長くエベソ教會の教師であつたといふのである。然れども亦是れと反對に彼もユダヤ人の爲に早く殺されたといふ傳説もあるのである。エベソに彼が居つたといふ傳説も可なり有力であるが、又早く殺されたといふ傳説も決して輕視すべきものではない。(モファット氏新約總論六〇三頁以下参照)

「此は備へられたる人のみ云々」はよい譯ではないが、適當の譯語を發見し得ぬので假りに斯くして置いたのである。直譯すれば、「此は(一定の)人々の爲に備へられてありて、其人々へのみ屬するものなり」といふ意である。是によると人間の地位は神により豫め定められてあるやうに考へられるが、イエスの意は決してかゝることを主張するではない。只人は各其分を盡し而して其地位は神の與へ給ふ所に任せよとの意である。

「我與ふる所にあらず」といふは是れ又イエスの謙遜である。イエスは自ら神の地位を占め、而して我が意志に任かせて人を審かんとはせなかつた人である。

「異邦の王と見ゆる者云々」とは「所謂王者は云々」といふと同じである、眞正の王者ではない、王者らしくする多數の僞王者のことである。「大なる者云々」も所謂高位高官

の者はいふ意である。

「僕」と「奴隸」とは稍異つてゐる。奴隸は身を賣つたもので全く權利なきものであるが、僕はそうでない、單に雇れて仕事をしてゐるものである。但奴隸は自主の權をば有たぬが常に家庭に居る爲家族の一人として最も好遇せられたものである。聖書中には多く此奴隸の文字が用ひられてゐるが、一々是を奴隸と譯するは不必要のやうに思はれ、單に僕としてゐる所が多い。此所にては二つ異なる言葉が用ひられてゐる故、一をば「奴隸」と直譯したのである。

「人の子云々」については前述した通りである、即ちイエスが「我」といふべき所に此「人の子」といふ語を用ひられたやうに傳へてゐる。但し是は果して事實なるか否か疑しい。

「贖」とは奴隸を解放する爲に拂ふ金である。此語は恐らく弟子等の語から來たものであらう。イエスの語として他に此語を用ひてゐる場所はない。

要するに此所に傳へられてゐるイエス教訓は奉任の生活を以て尊しとすべきもので、人を使役するは決して人の光榮ではない。尙イエスは人に事へて其功德によりて首とな

ると教へられたのではなく、人に事へることが即ち人を支配することであり、而して名譽たるべきことであると教へられたのである。

第五 善きサマリヤ人の比喩

路十。廿五―卅七

聖書本文

さて見よ、或律法學者立ち上り、イエスを試みいひけるは「師よ、我永遠の生命を嗣ぐ爲には何をなすべき乎」と。イエス彼にいへり「律法に記されしは何ぞ、汝如何に讀む乎」と。彼答へて曰へり「全心、全靈、全力及び全意を盡して、汝の神たる主（エホバ）を愛すべし、又己の如く汝の隣人を愛すべし」と。イエス彼にいへり「汝正しく答へたり、汝是を行へ然らば生くべし」と。（路十。廿五―廿九）

然るに彼自ら辨解せんと欲してイエスにいへり「我が隣人とは誰ぞや」と。イエス答へていひき、「或人エルサレムよりエリコへ下りけるが（途にて）強盜に遇ひぬ。強盜彼をはぎ、彼を傷つけ、半死半生にして彼を置き去れり。時にたま／＼或祭司同じ道を下り來りしが、彼を見ながら他の側を過ぎ行けり。又或レビも其所に來りしが同じ

く彼を見ながら他の側を過ぎ行けり。然るに或サマリヤ人、旅して、此人の所に來りしが、彼を見て憐れみ、乃ち彼に近づきて、傷に油と葡萄酒を注ぎ、之を繙帯し、而して己が獸に乗せ、宿につれ行き、彼を介抱せり。翌朝デナリ（銀貨）二つを取り、之を宿の主人に與へ、而していひけるは此人を介抱せよ、費用若し之にましたらば歸りの時我汝に償ふべしと。（廿九―三十五）

「然らば汝、此三人の内何人が此強盜に捕はれしものに對して隣人たりしと思ふや」と。律法學者いへり「彼を憐みし人なり」と。イエスいへり「汝も往きて其の如くせよ」と。（三十六・三十七）

【注】 右の記事は路加傳特有のものである。其内の所謂「善きサマリヤ人」の比喩は「放蕩息子」比喩と共に路加傳が傳ふる最も貴重なる記事である。其資料をば記者は何處に於て發見したか分らぬ。従つて其歴史的價値に於て疑へば疑はれぬことはないが、共にイエスの主義精神を最もよく傳へたるものとして重んずべきである。

さて「律法學者」としたは從來「教師」と譯したこともある文字である。又通常「學者」

學者の研究法

(Scribo)と譯する文字とは異なるが、同じ人々をいふのである。彼は當時傳つてゐた律法を學び、又之を人に教ゆるものである。而して多くはパリサイ派に屬したものである。學者の研究法とした所は古き律法を傳説に基き之を其まゝ傳へ又は敷衍するのみで、理性と實驗とにより新しき解釋をなさんとするのではない。故に爰に學者の一人が來りイエスに「永生」のことにつき質問したといふもイエスの自説を聞かんとしたのではない。律法につきての知識を試みたに過ぎぬ。「彼を試みたり」といふは即ちイエスが果して律法につき幾許の知識を有し、如何なる律法に基きて之を説明するかを知らんとしたのである。「試たり」といふ内に惡意があつたとは思はれぬ。

イエスは自ら答へず却て學者に答へしめられた。學者の答へた「神を愛せよ」といふ語は、申命記六〇五にあるのである。又「隣を愛せよ」といふ語は利未記十九。十八にある語である。此兩語を引きて答へたことは、珍しきことではなかつたが、彼が相當の知識を有することを示してゐる。イエスも是に同意して「之を行へ云々」と語られた。「之を行へ」といふは現在動詞の命令法で「續いて行へ」といふ意である。

「自ら辨解せんとして云々」とはあまり平易なる質問をしたと思はれぬ爲といふ意か、

「隣」の意義

又は自ら知つて居て問ふたといふ非難を免れんとしてといふ意かと思ふ。

「我が隣とは誰ぞ」といふ質問は「隣」とすべき者の範圍を尋ねたものらしい。然るにイエスの與へられた比喻的の答は直接に是に答へられたものらしくない。其理由は明白でないがイエスの意は次の如くであつたらしい。汝は隣の何人たることを問ふが、人は先づ何人に對しても親切なる態度をとらねばならぬ。然る時は外國人でも汝の隣となり得るのであると。

祭司とレビとは共に神殿にありて禮拜にたづさはるものである。然るに彼等の多くは形式に於てのみ神を拜し、禮拜の根本義である人を愛することを忘却してゐたものである。故にイエス彼等を取りて善良なるサマリア人と對照せられたのである。

「サマリア人」といふは純ユダヤ人ではない。又純ユダヤ教の信者でもない。従つてユダヤ人等が輕蔑してゐた民である。然れど一般に性質溫和善良であつたといふことである。かくて斯る比喻中に引用せられたのであらう。

「エリコ」といふはエルサレムを去る凡そ廿一哩の所にある市であるが、其間の道路は甚危険であつたのである。又エリコには多く祭司が住んでゐたといふ。

「盜賊に捕はれし者に對し隣たりしと思ふ乎」といふは「盜賊に遇ひし者に對し、隣人となりしか」(became neighbor)としてもよい語である。又「隣人たることを證據せしや」(proved)としてもよからざるである。(Plummer, Luke, p. 288)

要するにイエスは此所に於て「人は凡て人種の如何を問はず、互に隣人である。但し其間に愛が行はれずば隣人たる實は成立せぬ。」といふことを教へられたらしい。想ふにイエスがサマリヤに傳道せられたといふ約翰傳の記事は事實ではなからう。然れどイエスは人を人とし、又神の子として見られた故サマリヤ人、ユダヤ人等の差を認めず、之を兄弟とし隣人とせられたことは疑ふべきでない。又之を愛することによりて眞に兄弟隣人たる交をなし得ることをも堅く信せられてゐるに相違ない。

第六 エリコに於ける盲人

可 十。四十六―五十二
太 廿。廿。九―卅。四
路 十八。三十五―四十三

聖書本文

かくて彼等エリコに至れり。而してイエス其弟子及大なる群衆と共に、エリコを出づる時、テマイの子なるバルテマイといふ盲目の乞食、道の傍に坐し居たりき。彼ナザレのイエスなりと聞き叫び且ついひ始めぬ、「ダビデの子イエスよ我を憐め」と。(可十。四十六・四十七)

イエス立ち止まりて彼を呼べといへり。人々盲人を呼びいひけるは、「勇め、立て、彼汝を呼び居れり」と。盲人乃ち其外衣を棄て立ち上りてイエスに來れり。イエス答へて彼にいひけるは「汝我に何を爲られんと欲ふや」と。盲人彼にいけるは「ラボニよ我見えなんことを欲ふ」と。イエス彼にいひけるは、「往け、汝の信仰汝をいやせり」と。彼直に見ることを得、イエスに従ひ行けり。(四十七―五十二)

【注】 エリコといふ市は所謂ヨルダンの谷の中にある。ヨルダン河より西方五哩、死海より北方五哩隔つた所にある。死海は最も低い地で其水面は海面より低きこと千三百呎である。エリコは其よりは凡そ五百呎高いこと。尙海面よりは殆んど千呎も低くエルサレムよりは三千呎以上も低い。舊約時代以來有名なる市であるが、今は荒れはてして

地 エリコの位

イエスの同胞主義

まつて、只小さい一の邑が昔のエリコにあつた場所に近くあるのみとのことである。イエスの時代には尙可なりの都市であつたかと思ふ。

盲人の告白

「ダビデの子イエスよ」云々はイエスをメシヤと公然告白するものである。馬可傳記者は初めより悪鬼がイエスをメシヤと告白したと傳へてゐる。中頃ペテロが最も親しき弟子を代表して是を告白したといふ。而して此盲人を普通人とすれば普通人にしてイエスを公然メシヤと宣言したものは是を最初のものでせねばらぬ。然れど此盲人といふは普通人ではなく尙病者の一人である。ユダヤ人間には凡て病人は神經鋭敏なる故特別に悪鬼との交通を受けるやう思つてゐた。此盲人が告白したのも悪鬼の告白と同意義のものとして傳へてゐるのである。

尙此所にはイエスが其告白を止められしやう記してない。是れもイエスの最後が近づきエルサレムに於けるイエスのメシヤ運動が迫つたから止められなかつたのであると説く人もあれど其れ程の意義あるわけではなからう。

且つ此告白全體が私は疑はしいものと思つてゐる。是は先きより述べ來つた通りに記者がイエスのメシヤたることを證明せんとしてかゝる告白の語を附加したのである。盲

人にイエスの使命をよく理解する程の用意があつたとは思へぬ。只此盲人に神を信じ、イエスの愛に感じ、一切を棄て彼の命に従はんとする決心があつたので、其れで病が癒されたことと思ふ。

尙馬太傳には「二人の盲人」とあり、路加傳には「市に近づける時」とある。是等は馬可本文と異なる所である。尤も馬可の文にも「エリコに至る」と「エリコを出づる時」との句が並べ記してあるので稍明了を缺くやうにも思はれる。

又「バルテマイ」の名につきても稍明了を缺く點がある。テマイといふはアラマイツク語の盲人といふ語をギリシヤ化したものであるとの説がある。又バルテマイといふは即ちテマイの子といふ義である。然る時はバルテマイといふ語が果して固有名詞なるや疑はしくなる。一種の通稱かも知れぬ。

尤も普通にはバルテマイもテマイも箇人の名であると思はれてゐる。テマイはイエスの弟子となつて後までも人に知られた人であるといふ説さへ傳つてゐる。

「ラボニ」は「ラビ」と同意義で一層町重なる語である。

第七 イエス弟子に先ち進む

可十。卅二

聖書本文

彼等エルサレムへ上る道にありしが、イエス彼等に先ちて進む。彼等驚けり。又彼に従ひ行きしものは怖れたり。

【注】 イエスはエルサレムに近づくに従ひ、愈勇氣を増されたものの如く思はれる。之に反し弟子等は兼ねて覺悟はしてゐたもの、敵の根據地ともいふべきエルサレムに近くに従ひ、愈恐怖心をもつたものらしい。

〔附言〕 イエスはヘテロのメシヤ的告白後、其死を預言すると共に、其死が萬民の贖であることも語られたといふ説もあれど、恐くイエスは其死を豫言せられたのみで、其が贖であることの説明をば與へられなかつたと思ふ。(第四一八頁を参照せられたし)

第八章 エルサレムに於けるイエスの活動

概説

イエスのエルサレムに於ける活動は福音書記者が最も詳密に記す所である。馬可傳及馬太傳の記者は全篇の凡そ三分の一を是に費し、又路加傳は其割合稍少けれども尙五分の一以上をば此記事に用ひてゐる。是により記者等が如何に此傳道を重んじたか、明瞭である。

元來エルサレムはエホバの神殿のある所で、古來神聖なる都市と思はれ、多くの預言者等も此地を中心として活動したのである。故にイエスが特別な準備をなし、又大なる覺悟を以て此地に來られたこと、及び此所に於て最も意義深き活動をなされたことは當然である。

然るに尙エルサレム傳道の性質につき二三重要な問題がある。先づ第一はイエスがエルサレムに來られた動機についてである。或學者はいふ、イエスがエルサレムに來ら

れし理由は、此所に於て、新しき政治をなす爲であつた。即ち彼は其入京の時より既に王者たる態度を示し、而してガリラヤより伴ひ來つた弟子等を其手兵として、茲に革命を企てられたのであるといふのである。

然るに又他の學者はイエスがエルサレムに來られたは、メシヤ的死を就ける爲であつた。即ちイエスは既にガリラヤに於ても殺されんとせられたがメシヤの死はエルサレムでなくてはならぬ故に、ガリラヤよりは逃れて此都に來り、最も美しき又最も痛ましき死をとげられたのであるといふのである。

以上二説は何れも道理ある説の如きも、私は共に誤つてゐる説と思ふ。イエスが地上に於て新政を布かんとせられたといふは他に證據のなきことである。又イエスが死を決して此地に來られたことは、前章既に研究せし如く確實であれど、尙死其ものを目的として來られたとするは不自然なる想像に過ぎぬ。

然らばイエスがエルサレムに來られし動機は如何なるものであつたか、是は極めて單純であつたと思ふ、即ち先きにガリラヤに於て試みられし傳道をエルサレムに於ても試みんとせられたに過ぎぬ。但しエルサレムの地がガリラヤの地とは其事情を異にするが

エルサレム
傳道の特徴

故に、其傳道にも自ら異なる所があつたのは無論である。

然らばエルサレム傳道の特徴は如何なるものなりし乎、是れが又重要な問題で是につきても二三の異論がある。

先づ福音書を見れば、イエスがエルサレムに於てなされし説教及宣言は何れもイエスのメシヤたることを公表するものである。即ちイエスはガリラヤに於て、つとめて秘して語られなかつたメシヤ的自覺を此エルサレムに於て公然發表せられたのである、メシヤ的入京及び神殿に於ける商人の叱責は其著しきものである。又福音書が傳ふる他の特色はイエスが神殿に於て多くの學者智者等と盛んに爭論して、よく彼等をいひ伏せられたことである。

以上の如き特質が果してイエスのエルサレム傳道に於ける最も重要な點であらう乎。若しそうであつたとせばイエスのエルサレム傳道は甚だ形式的又教義的のものであつたとせねばならぬ。又果して是によりてイエスが十字架に死せねばならなかつた理由が説明せらるゝであらう乎。若しイエスが我はメシヤなりと宣言せられたのみであつたならば、祭司學者等は之を單純なる狂者と見たではなからう乎。又彼の智能がすぐれて

わたのみであつたのであれば、彼等は假令嫉んで居つても十字架にまではかけなかつたであらう。想ふにイエスがかくまでに迫害せられた理由は他にあつたのではなからう乎。要するにイエスのエルサレムに於ける説教と行動は福音書に傳へられるよりも一層自由で又深刻のものであつたと思はれる。

イエスがエルサレムに來られし動機は前述せる如く依然傳道にあつた。神の國の宣傳にあつた。然れど此地に於ては、一層熱烈に形式的ユダヤ教に對して駁撃を加へられた一切の外形的權威を否定して、神の權威を主張せられたらしい。茲に此傳道の特色が存し、又イエスの殺され給ふた理由があるのでなからう乎。

是につき吾人をして思ひ出さしむるものは預言者エレミヤの説教である。

預言者エレミヤはイエスより凡そ六百年前エルサレムに於て、建物は違つて居れど同じく神殿に於て祭司貴族等に對して最も激烈に彼等の罪惡を責めた。其内の一節に左の如き句がある。

萬軍のエホバ イスラエルの神 かくいひ給ふ。「汝等其途と行とを改めよ、然らば我汝等をして此地に住ましめん。

エレミヤの
預言とイエ
スの説教

汝等、是はエホバの神殿なり、エホバの神殿なり、エホバの神殿なりといふ偽りの言を頼む勿れ。

汝等もし全く其途と行とを改め、人と人との間を正しく審き、異邦人と孤兒と寡婦とを虐げ、罪なき者の血を此所に流さず、他の神に従ひて害を招かずば、我汝等を我が汝等の先祖に與へし此地に永遠より永遠に至るまで住ましむべし」と(エレミヤ七

〇三二七)

イエスがエルサレムに於て、祭司學者等に語られた説教は其主意に於て此エレミヤの預言に同じではなかつた乎。即ち形式的禮拜の無効を説き倫理的實行を主張したものであつたらしい。而して此主義主張は一見平凡なるもの、如きも決してそうでない。何れの世に於ても多數人は或形式に囚はれてゐるのである。會々形式に囚はれざる人があつて其主義主張を明かにするや、彼等は斯る人を危険人物として迫害するのである。かゝる理由によりてエレミヤは迫害せられ又其他の預言者アモス、ホゼヤ、イザヤ等も同じく迫害せられたのである。イエスが迫害せられた理由も之にあつたとするが最も至當のことである。

尙福音書の記事はイエスを迫害したものは、主としてパリサイ人及サドカイ人であつたと傳へてゐる。而してロマ政府の官吏は寧ろイエスに同情したらしく記してゐる。然るに是は事實に適つた記事傳説であらう乎。尤もイエスはロマ政府に直接反對せられたらしくない、故にロマ政府の官吏が其れほど厳しく彼を迫害せなかつたかも知れぬ、然れど彼等も亦イエスを以て危険人物となし、其處刑に賛成したものとすることは信するに難くない。

「カイザルのものはカイザルに歸へし、神のものは神に歸へすべし」と語られたイエスの態度は、信仰と良心の自由を無視する、ロマの官吏等には甚危険に思はれたに相違ない。

要するにエルサレムに於けるイエスの活動及び説教は充分の注意を以て之を研究せねば其真相をば了り得られぬのである。勿論吾人は福音書の記事以外に何等の資料をも有せぬ。故に之を批評研究するにも確實なる標準とすべきものをもたぬ。只細かく其記事を精讀すること、又當時の歴史的事情をよく洞察することによりてのみ、其真相に達せんとするのである。

尙福音書によればイエスのエルサレム滞在は一週間計りになつてゐる。普通の説明によるとイエスは「すぎこし節の六日前」即ち土曜日にてベタニヤに入り(約翰傳十二。一)翌日曜日メシヤ的入京があり、月曜日神殿の淨めがあり、火曜日諸種の問答があり、水曜日は一日ベタニヤにて休息せられ、木曜日最後の晚餐があり、翌金曜日十字架につけられ給ふたといふのである。但し是も假定説に過ぎぬ。尙イエスの十字架につけられし日を金曜日にあらず、木曜日なりとの説もある。此事につきましては尙後に研究する所があるであらう。

第一 イエスの入京

可 十一。一—十一
太 廿一。一—十一
路 十九。廿九—四十四

聖書本文

彼等エルサレムに近づき、橄欖山の下なるベタニヤにまで來たれる時、イエス二人の弟子を遣はす。而して彼等にいふ「對ひの村に往け、然らばつながれたる驢馬の子

を見ん、其を解き、つれ來れ」と。(可十一。一—二)

かくて彼等驢馬の子をイエスにつれ來り、己の衣を其の上に置きければ、イエスはに乘れり。多くの人々或は衣を、或は野より伐り來れる木の葉を、道に敷き、而して或者は先きに立ち或者は後に隨ひて、呼はりいへり「ホザンナ、主の名によりて來れる者に祝福あれ、我等が父ダビデの國、來るべき國に祝福あれ、最高き所にホザンナ」(可十七。一—十一)

【注】 以上はイエスが公然メシヤとして入京せられたといふことを傳ふるものである。是はゼカリヤ書九章九に出づる語即ち「視よ汝の王は柔和にして驢馬に乘りて來る」といふ預言に基きイエスの入京を是に合致せしめんとして記したものである。イエスが驢馬の子に乘りて入京せられたといふことは事實かも知れぬが、其れに預言的意義があつたものとは思はれぬ。此入京をメシヤ的のものとするは恐く記者の信仰に基くものであらう。

エルサレムはダビデの建てた都で、又ソロモンが神殿を建た所である。海拔凡そ二千

シオン山
モリヤ山

五百尺、周圍に深き谷あり、要害堅固にしてユダヤ人の根據地としては最も適當の所である。頂上都市のある所に二つの峰があり一をシオン山といひ他をモリヤ山といふ。モリヤ山上に神殿があつた。但し昔よりモリヤ山とシオン山とは同一に呼ばれてゐたものと見え、「シオンに至りてエホバに見ゆ」といふやうな句もある、即ちモリヤといふ名よりも寧ろシオンといふ名はエルサレムの都市及神殿をいひ表はす名となつてゐたらしい。ユダヤ人等は世界に神の國の來る時其王たるメシヤの住む所は此エルサレムなりと信じてゐた。即ちメシヤは必此所に來り此所に住みて世界を支配すると考へた。かくてイエスの入京は即ち其王が自己の都に乗り入り給ふたものとして福音書記者等は記してゐるのである。

ベタニヤは福音書によればイエスには最も關係深き土地である。此地は橄欖山の麓にありエルサレムとは反對の方向に面した小邑である。故にエルサレムに往くには此橄欖山を廻らねばならぬ。即ち此邑は其山の東南に向ふた所にある。又馬太傳には「ベテバゲ」とある。馬可の或原本には「ベテバゲ及ベタニヤにまで來れる時云々」とある。ベテバゲとはベタニヤに並んでゐた邑である乎。又は此ベタニヤ地方を總稱していつた地

ベタニヤ

名かよく分らぬ。

「對ひの村」とはベタニヤのことか、又其近くの他の村をいふかよく分らぬ。多分ベタニヤのことであらう。

衣や木の葉又は小枝等を敷くといふは道路を歩みよくすることで王者に對する禮である。

「ホザナ」の意義

「ホザナ」といふは「救ひ給へ」「祝福せよ」といふやうな祈禱の意を有する語である。(詩百十八篇廿五・六參照)但し當時は單に讚美の語となつたかも知れぬ。(McNelis, St. Mt. p. 296)

「祝福あれ」(blessed be)とした語も「福なり」(blessed is)とすべきであるとの説もある。此語も其内に祈禱の意があるか、或は單に讚美の意であるか明かでない。本書にては、かりに「祝福あれ」としたのである。

「至高所にホザンナ」といふは、單に讚美の語とする人は「天に榮光あれ」(路加傳參照)といふと同義とし、祈禱の意ありとする人は「至高所に住む者等を恵み給へ」との意であるとする。(Gould, Mark p. 209)要するに是は「萬歳」といふよりは一層意味ある語

の如きも、當時の人々は其内容には多く意を用ひずして使つたものであらう。

尙イエスが弟子を遣はし「辻」又は曲り途)に沿ひ、門の外につなぎある驢馬を引き來させたといふは記事のまゝによれば、イエスが千里眼的力を以て遠方より之を知り、而して弟子を遣はされたのであるらしい。然れど斯くの如きことは恐く後に生じた傳説であらう。イエスの偉大なる所は斯くの如き力を有してゐられたと知られたらなかつたといふことには關係ないものである。

想ふにイエスは疲れてゐたまふたか、又は他に或單純なる理由があつて、其附近の農家より驢馬を借り來らしめ、之に乗つて入京せられたに過ぎぬ。其他に特別の主意があるやうに傳ふるはイエスを理想化せんとする爲である。

第二 神殿を淨む

可	十一。十五。十九
太	廿一。二十一。七
路	十九。四十五。四十八
約	二。十九。太十二。六